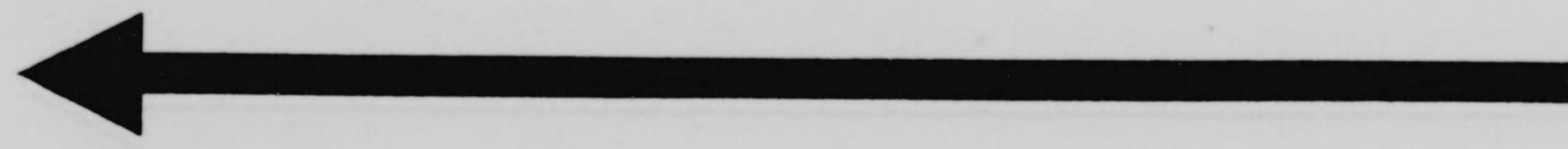


363
151



始



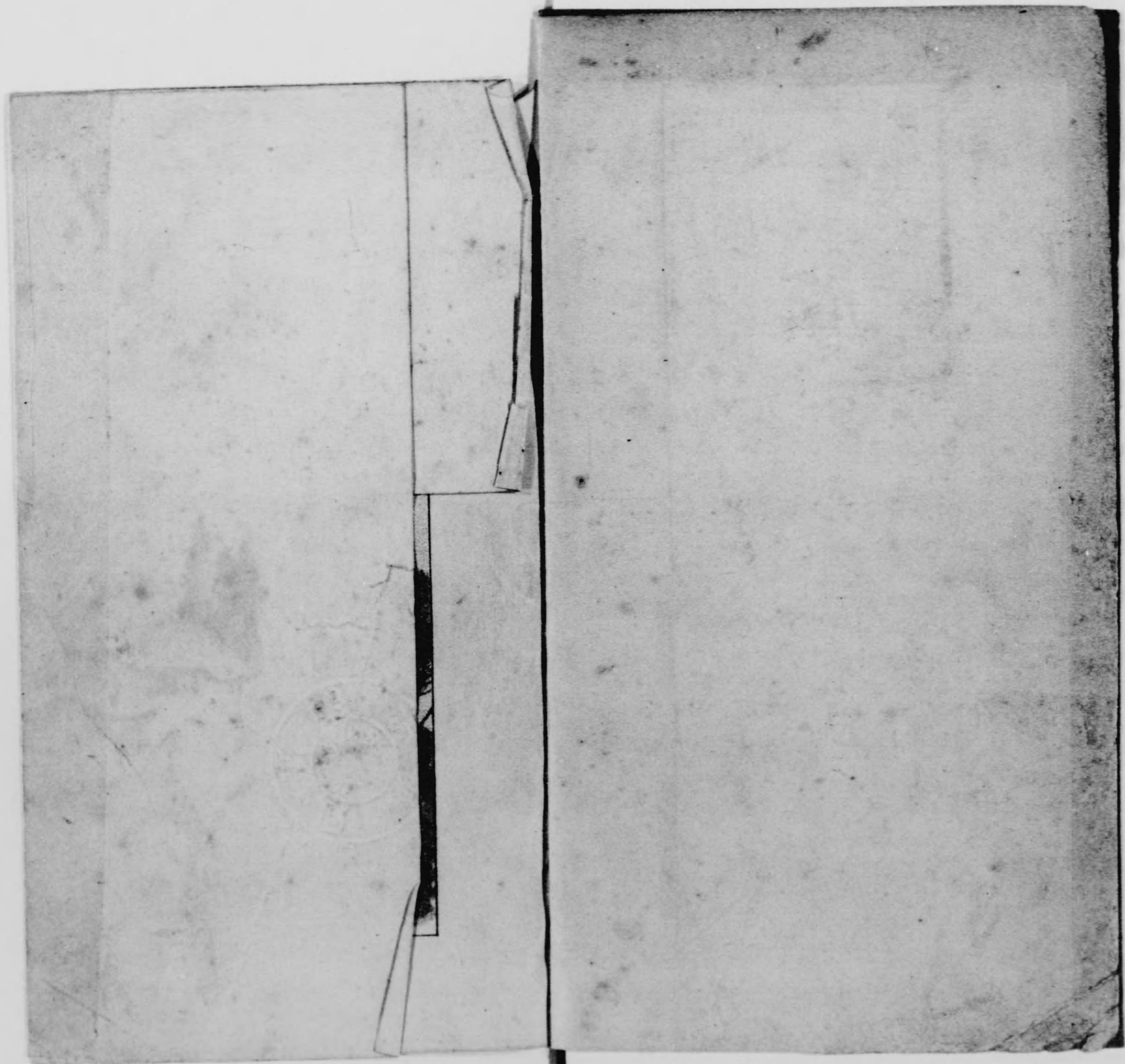
363-151

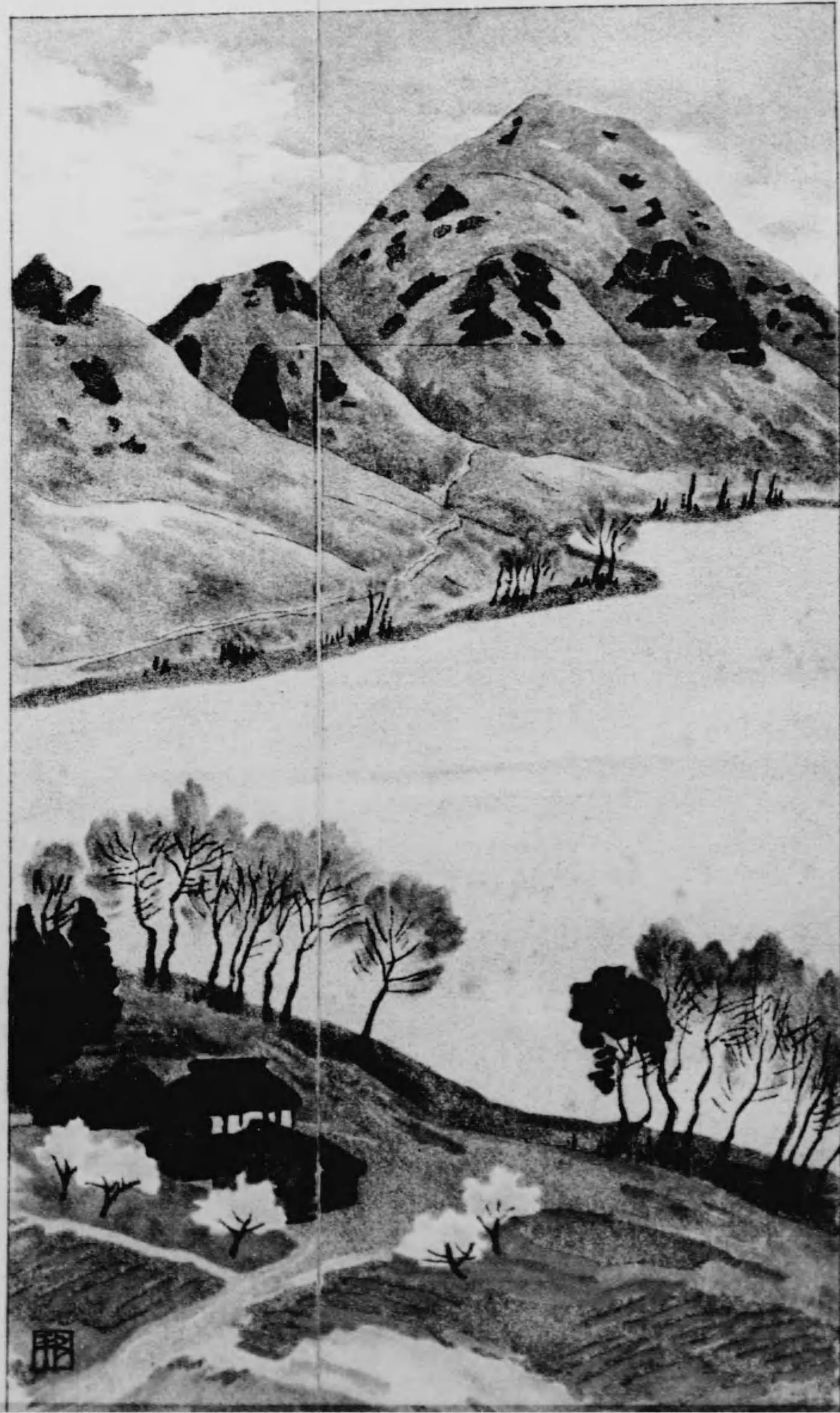


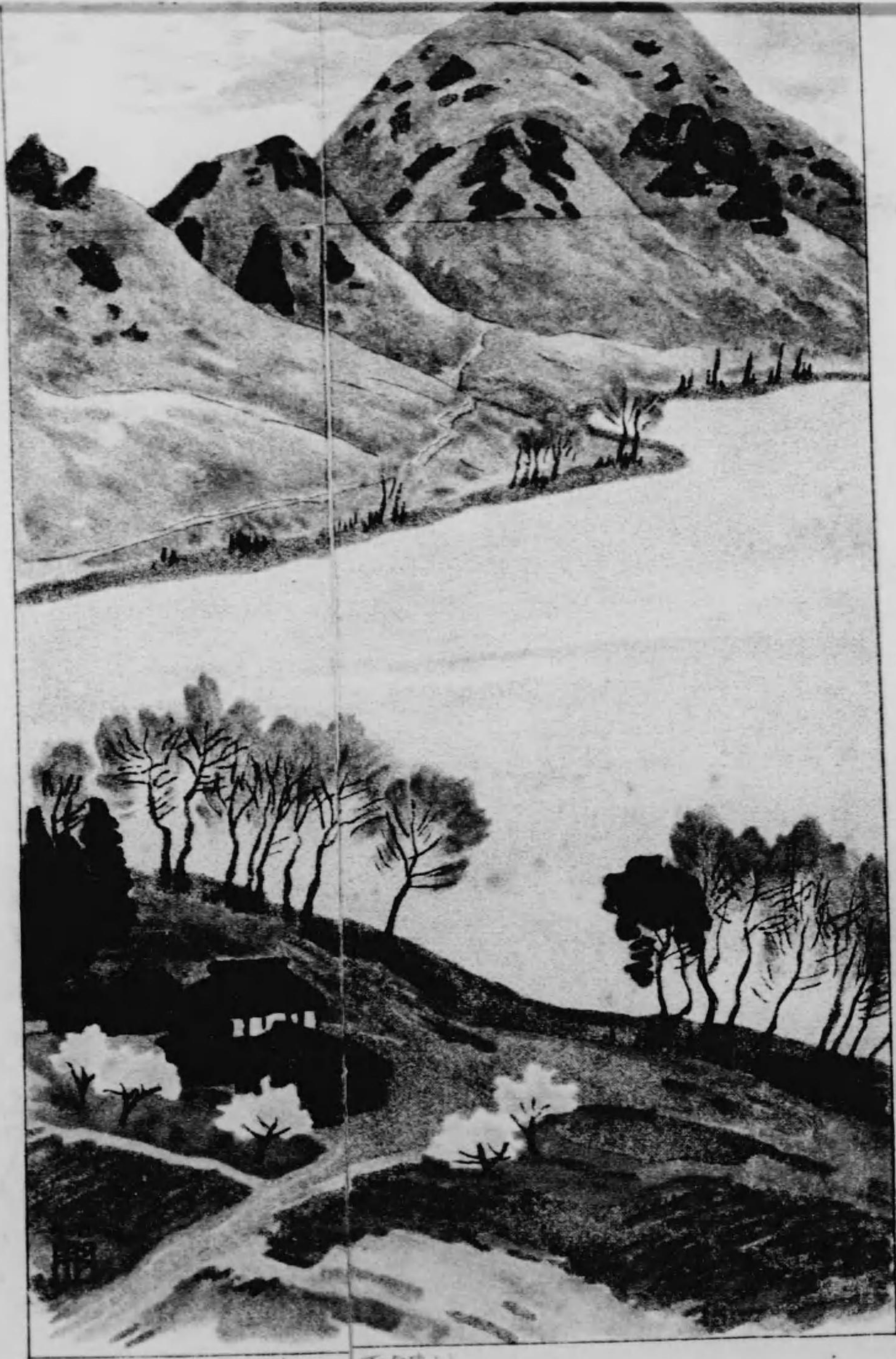
旅

田山花袋著

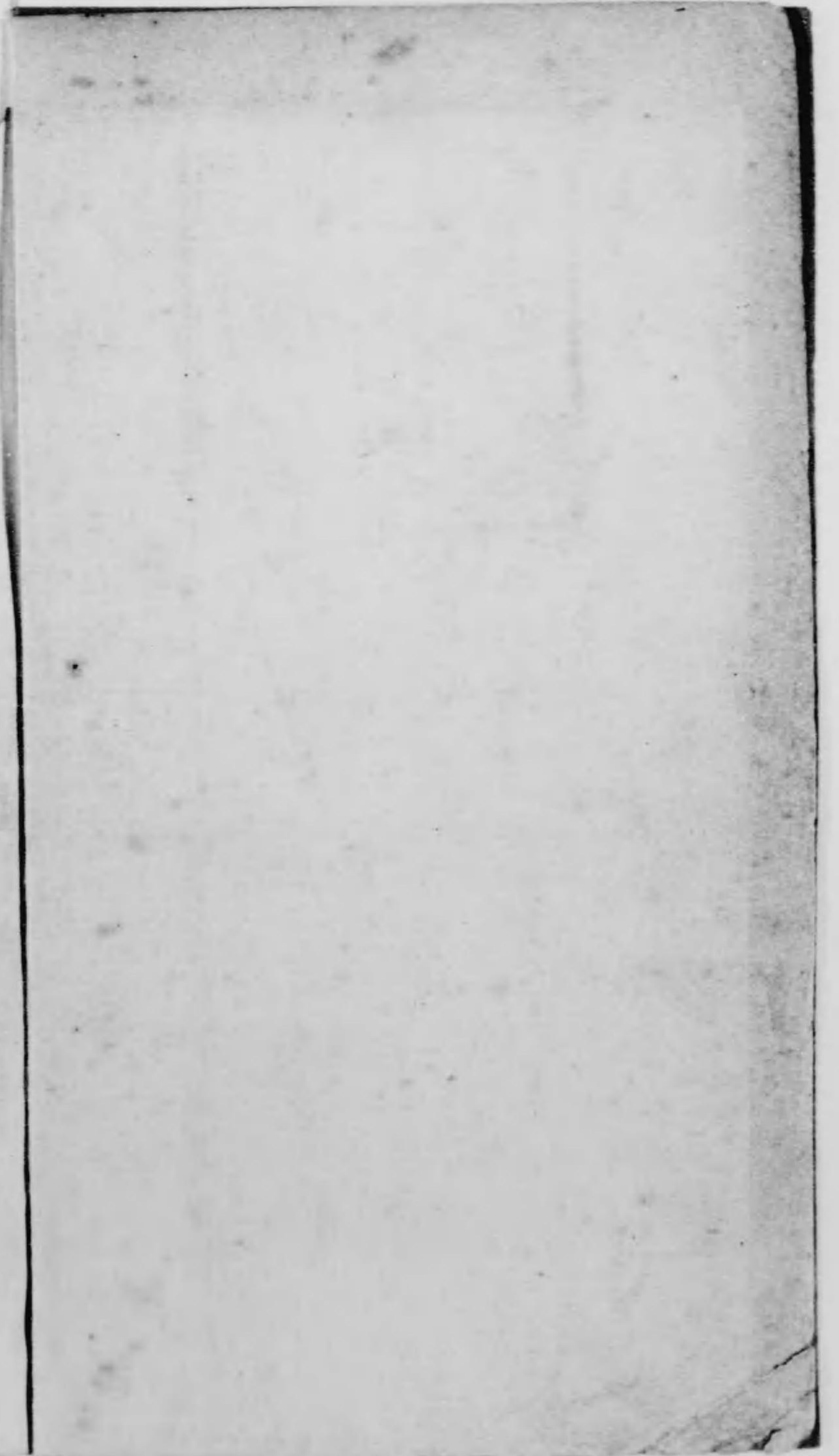
大正
6. 12
内交







樟名山 天神山
樟名山 一部



緒言

著者巽に『日本一周』三巻を公にしたが、何うも、あれでは完全な旅の案内記にならない。著者の感想や観察や低徊が多すぎる。急いで旅をするものに取つては、あつした静かな落附いた気分では居られない。殊に、遊覽のためにする旅客に取つては、一層さうした感が深い。それに、三巻では分量が多すぎる。もつと小さいもので、ポケットにでも何でも入れて行かれるやうなもので、それで日本全國を一目に指さして見せるといふやうな案内記が一冊欲しい。かういふ要求を著者は到る處で聞いた。書肆の人達からも、友人からも……………。

で、閑暇にまかせて、更にさうした輕便なものを書いて見ることにした。今度は全くの『案内記』にした。くだんしい感想や観察はすべて入れずに、成べくわかり好く、一目で飲み込めるやうにと心がけた。しかし、日本全國を六百頁位の一冊にまとめるのは、初中等教育の地理書でも困難だ。従つて兎角名所古蹟ばかりに筆を多く費すことに

緒言
 二
 なつた。著者ちよしゃに取つては、どうも面白くない。しかし、その面白くないのが、却つて旅客りやくに便利べんりを與へる『案内記』となるやうな點てんもないではない。で、兎に角かく、これを公こうにすることにした。

大正六年四月

著者

目次

一	横濱、金澤、横須賀方面……………	一
二	湘南の海岸……………	一四
三	箱根行……………	三三
四	熱海と伊東……………	四七
五	富士登山……………	五四
六	伊豆半島……………	六四
七	駿河の海岸……………	七二
八	濱松、豊橋、名古屋間……………	八〇
九	伊勢参宮——月瀬の梅……………	九〇
十	京都と大阪……………	一〇九
十一	大和めぐり……………	一六一

目次

目次

十二	河内の諸勝	一九六
十三	和歌の浦と高野山	二〇二
十四	紀州の奥めぐり	二一三
十五	瀬戸内海	二二〇
十六	出雲大社参拜	二六四
十七	九州一巡	二九七
十八	四國めぐり	三五六
十九	房總半島	三七二
二十	霞ヶ浦と筑波方面	三九四
廿一	常磐海岸	四〇一
廿二	奥羽の旅	四一三
廿三	日光と鹽原と那須	四六三
廿四	秩父の諸勝	四九二
廿五	上州の諸勝	四九六

目次

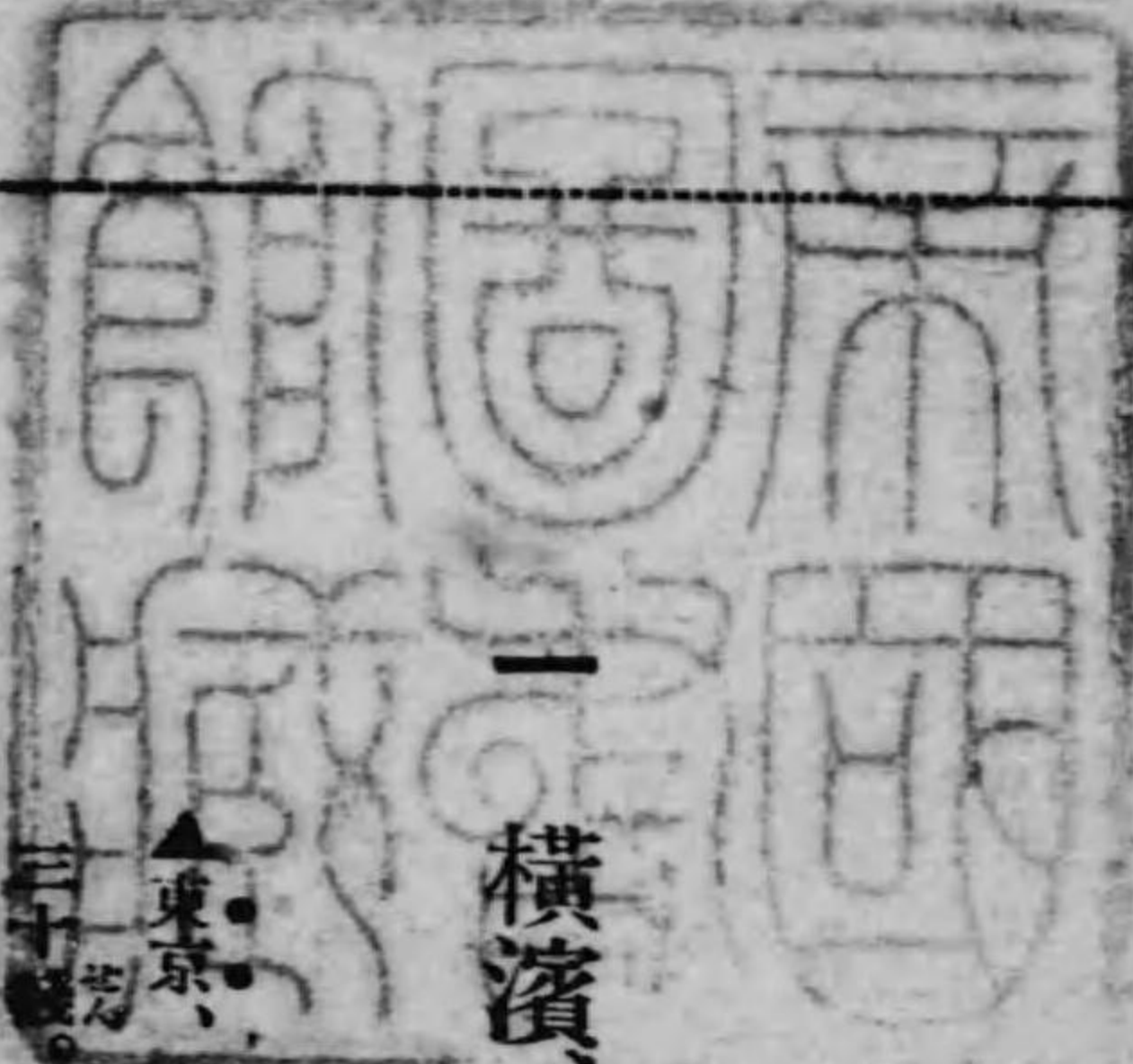
廿六	善光寺詣	五〇四
廿七	越後の旅路	五一四
廿八	木曾への旅	五三〇
廿九	北陸の旅路	五四六
三十	北海道と樺太	五七二
卅一	臺灣	五九九
卅二	琉球	六一七

目次終

旅

田山花袋 著

横濱、金澤、横須賀方面



▲東京、横濱間 十五分乃至二十分毎に發車す。哩數一八哩二鎖、三等賃金
 ▲横須賀 へは大船で乗替へる。東京驛から直通のものが七八回ある。東京から
 哩數二九哩四鎖、三等賃金四十九錢。逗子、鎌倉、はその手前で、鎌倉へは三

横濱、金澤、横須賀方面

十七錢、運子へは四十一錢。
 ▲三浦半島へ行く船は東京灣岸島から午前二回出る。浦賀、下浦、金田、松輪に寄港して三崎に着く。賃金二十錢、時間は五時間、三崎から東京に至る方は、夜の九時と十二時とに出て、東京に到着く。
 ▲金澤 田浦間には、和船の便がある。船賃三四十錢位、運子からも、鎌倉からも歩いて行ける。車もある。共に二里位。
 ▲杉田の梅林まで、横濱から自動車が出る。二圓位、車は七十錢内外である。

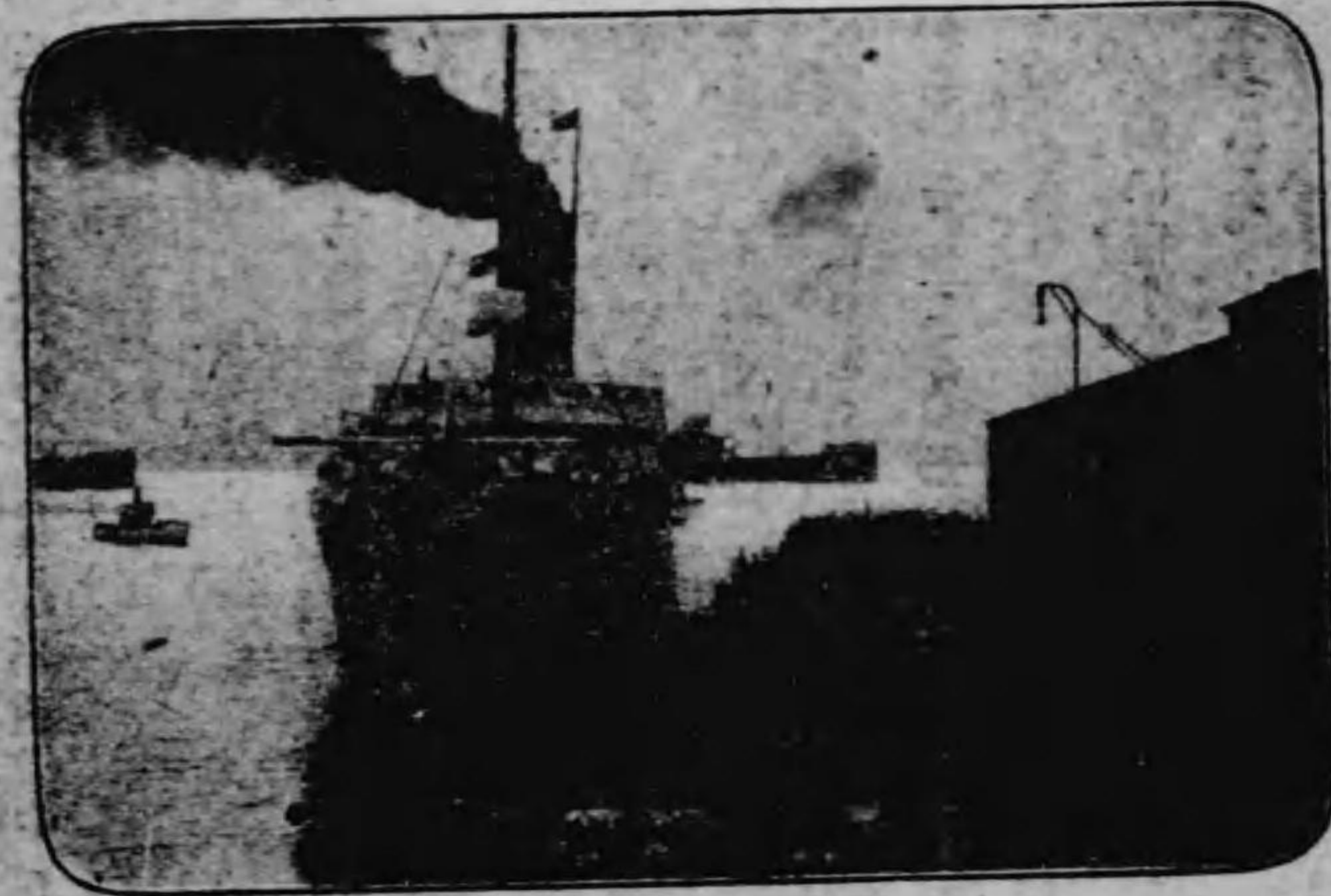
横濱までは汽車があり電車があり至極便利だ。横濱は今では、東京の前港であると共に東京の都會の一部のやうな気がしてゐる。横濱まで行く間には、池上の本門寺だの、羽田の穴守だの、川崎の大師だの、鶴見の總持寺だの見るところが非常に多いが、それはまたあとで書くとして、先づ横濱から始める。

横濱は元一漁村で、東海道を行く旅客が遙かに神奈川臺から望んで行つたところであ

る。今の市街の十の九までは、悉く海を埋め立てたものである。江戸名所圖繪にある姥島などは、昔は景色が好いので、わざと船を繋ぎ、人が見に行つたところだが、それは丁度元の横濱停車場のあつたあたりに當つてゐるといふことである。注意して見ると、野毛山一帯の丘陵と南山手一帯の丘陵とが海を隔て、相對してゐて、その中に入江が深く入り込んだものだといふ地形が略想像されるのである。

横濱はさう大して見るところがない。埠頭と野毛山と、公園と、南京町と先づその位である。普通の旅客はそれだけ見れば先づ澤山である。何處かに行く途中、ちよつと一汽車か二汽車おくらせて見物することが出来る。車は割合に高い。それに、新開地だけに質もあまりよくない。しかし五十錢も出す氣なら、埠頭と、南京町と野毛山位は見られる。そしてこの三ヶ所に行く途中は、大抵横濱の市街の賑やかなところだから、そこを車で乗り廻せば、先づ以て横濱を見たと言はれる。

埠頭に行く途中は、ちよつと外國にでも行つたやうな感じを起させる市街である。竝木がある。大きな洋館がある。ショウウインドウがある。外國に航海する人を送迎する旅館がある。正金銀行の大きな石造の洋館がある。それから橋を渡つて港内に入つて行



横濱新波止場

此處には煉瓦の倉庫が一杯に並んでゐる。碧い海に、ランチや、ダルマ船や、ボウトや荷足がゴタゴタと浮んでゐるのが未來派の繪か何ぞのやうに見える。浚漉船が泥をさらつてゐるのも見える。港内はかなりに廣い。橋から埠頭のところまで行くのに十二三町ある。繫船壁はぐるりと埠頭を取巻いてゐる。そこに、外國の郵船やら日本の郵船やらがびたりと寄つてかゝつてゐる。七八千噸から一萬噸以上の大船も樂々そこに入ることが出来る。こゝから出て、數千里の遠い海を航海して行くのかと思ふと、一種いふに言はれない心持がする。

日本の郵船ならば、紹介がなくても、頼め

ば見せて呉れる。大きな汽船の中もちよつと旅の物語の種になるものであるから、見せて貰ふ方が好い。

埠頭から海岸通りに行く。こゝらもちよつと好い。オリエンタルホテルだとか、何ホテルだとかいふ大きな旅館が海に臨んでゐて、自動車は滑かにその前を走る。確かに何處か外國の港といふ氣がする。

税關、縣廳などのあるところを通つて、公園に行く。公園は横濱市の公園としては、あまりに小さく且淋しい。こゝから、南京町に行つて、引返して伊勢佐木町あたりの繁華なところを通つて、橋をいくつとなく渡つて、今度は反對の方の野毛山に行く。山の上には大神宮がある。そこは一に伊勢山と言つて、頗ぶる眺望が好い。横濱市の全瓦葺と港の帆檣林立とを一目に集ることが出来る。その下に不動堂がある。そこも眺望に富んでゐる。

この野毛山と相接して、掃部山がある。そこは、市での花の名所だ。井伊直弼の銅像などがある。

これ以上に詳しく見やうとする人は、車よりも電車が好い。電車は市中を通つて、根



梅の田杉

岸本牧の方まで行つてゐる。根岸の競馬場から本牧の十二天社のあたりは、昔はさびしいところであつたが、今はすっかり郊外町になつて了つた。南山手の高臺の瀟洒な外國人の洋館のあたりを歩くのも面白い。旅の興味を味はうとする人には、横濱は單獨に出かけて行つて見るほどの處ではない。何かの次手にちよつと行つて見る位のところである。だから、一晩とまり位のトリップを試みる氣なら、是非二月の下旬頃に、こゝから、杉田の梅を見て、金澤に行つて見るのが好い。金澤は、鎌倉、逗子の方からも行けるけれど——むしろ其方の方が便利だけれど、杉田の梅を見て、それから行つて見る方が順路である。

杉田の梅

杉田の梅は、今も昔に變らぬ。東京近くでは、梅では先づ一番である。海に臨んでゐる形が面白い。そこには、横濱の根岸から二里位歩くなり車に乗るなりする。川船も梅の頃には出る。横濱から自動車が二圓、車が七十錢位である。杉田から金澤に行く間これも二里半ある。車はあるが、歩く方が好い。丘を越えたり登つたりして、ちよつと風情のある路だ。そしてその路は、金澤八景眺望の第一勝と言はれた能見堂の上のところへと出て行く。

金澤八景

しかし、金澤は地形が變つて、入江が田になつて、昔のやうな面影がない。いかにもさびれてゐる。従つて能見堂なども、遊覧者がないので、婆さんが一人ゐる位で、茶屋らしい茶屋すらもない。そこから下りて行くと、稱名寺の方へ行ける。金澤文庫の址などもある。鎌倉の榮えた時分の跡も探ることが出来る。そこを見て、右に行くと、金澤のさびしい村がある。潮入川が旅館の下まで入つて來てゐたりする。千代本は故の伊藤公の遊んだところとしてきこえてゐる。他に、東屋といふのがある。午飯を食ふに、好い處だ。

千代本
東屋

九覽亭

これから少し行つて、瀬戸の九覽亭は是非見なければならぬ。今では、能見堂より

も此處の方が眺望が好い。それに、金澤の附近には、泥龜新田に有名な牡丹園がある。

横須賀、逗子方面から船で見るものが多い。さて金澤を見て、其處から何處に行かうかと言ふと、鎌倉までは一里半位ある。路も良く、車も通る。しかし鎌倉方面は、あと廻しにして、これから船で横須賀方面へと行くことにする。船賃は二三十錢で、田浦、長浦の方へ船は着く。田浦には海軍の水雷庫がある。長浦には種痘所がある。田浦から横須賀への陸路を行くと、途中に十三峠があつて、英人アダム夫妻の墓がある。これは外國人で徳川幕府に最初に仕へた人で、アンジンと呼ばれてゐる。しかしわざ／＼出かけて行くほどの處でもない。田浦から逗子の停車場までは、低い峠を越して一里半ほどで行ける。

船は長浦から横須賀の吉倉といふところに着く。そこへ来ると、横須賀の造船所の煤烟の海を蔽つてゐるのが見えて、エンジンの音が海波に響いてきこえる。船を下りてトネルを一つ越すと、横須賀の停車場はもうすぐだ。横須賀の町は、海軍町だ。海軍の軍人や水兵が到る處に歩いてゐる。房州から三浦半島の方へ行く汽船の發着所は、停車場から行つた町を左に曲つて、造船所に沿つて十二三町行つた大瀧町にある。鎮守府は

宏壯な建物だ。造船所の中や、船渠は海軍の軍人の紹介でも貰つて一度は見えて置く方が好い。

横須賀で他に見るところは米の濱である。丁度市街の東端で、若松町にある。そこには日連の巨剎龍本寺がある。猿島がすぐ下に見えて眺望が好い。丁度、海を隔て、走水のある観音岬を隔て、安房の鋸山が右に偏つて見えてゐる。

横須賀と浦賀との間には、馬車がある。二十錢位で行ける。そこに行く前に、米の濱の傍の深田といふところから、南にわかれて深く丘陵の中に入つて行く路がある。この路は三浦半島の西岸の長井に行く路で、三浦大助がゐた時分には、重要な道路であつた。そしてその中央に、例の衣笠の城址がある。そこには一里位しかないから、是非行つて見る方が好い。大助義明の墓は、衣笠山の東南大矢田村満昌寺にある。

横須賀から浦賀に行く間は、路がをり／＼海に沿つてゐて、景色の好いところだ。その中ほどの大津には、海水浴場がある。たしか勝男館と言つたと覺えてゐる。氣候も暖かだし、宿料も低廉だ。

観音岬は、海軍の要塞地帯だから、深く中に入つて行くわけには行かないが、それで

走水神社

も走水神社だけは是非行つて見なければならぬ。何故と言ふに、其處は東海道と房總地方との最も古い渡海所で、日本武尊も此處をわたつて行つたし、其他の大官も皆な昔は此處を通つて行つたからである。景行天皇の東征なども此處を渡つて行かれたと思はれる理由がある。内部地方のまだ開けない時代にあつては、東海道から常陸の方へ行くには、是非此處で海を渡らなければならなかつたのである。走水神社がその古い昔の址を語つてゐるのは面白いことだ。

浦賀

浦賀はすつかりさびれた。これが例の有名な港であつたとは何うしても思はれない位だ。今では單に和船の港として存在してゐるばかりで、房總通ひ、三崎通ひの外は、汽船は大低素通をして通つて行つて了ふ。しかし深く入込んだ海の兩岸に、人家の並んでゐる形は面白い。何かおもしろいロマンスでもありさうに思はれる古い港である。この南半里ばかりに例のペルリ談判の久里濱がある。今其處にペルリの上陸記念碑が立つてゐる。

久里濱

ペルリ上陸記念碑

三浦半島は何方かと言へば、大抵の人は汽船の便を利用するのが常である。それと言

三浦半島へ

ふのも、東京靈岸島から日に二回づつ、汽船が出て、船賃が安くつて至極便利であるからである。それに、陸から行くよりも、船で行く方が景色も好く、骨も折れない。船に酔ふのを恐れない人は、必ず海上を行くべきである。そして、歸りには、逗子の方へと西海岸をやつて来るやうにするが好いと思ふ。

誰も知つてゐるが、この汽船の船賃の安いのは、三崎で獲れた魚を東京に持つて来ることを主として、普通の乗客は副としてゐるからである。従つて旅客は魚類の臭氣の腥いのを我慢しなければならぬ。

劔ヶ岬

松輪海水浴

三浦半島の大觀は、城ヶ島もあるが、それよりも寧ろ劔ヶ岬附近にある。燈臺のあるあたりは殊に好い。昔は今嘉納塾の水泳場のあるところに、松輪海水浴場といふものが土地の人の株式組織で出来てゐて、汽船も必ず其處に寄港するし、浴客も多く出かけて行くし、ちよつと他の海水浴場に見られない特色を持つてゐたのであつたが、今はそれがなくなつたので、劔ヶ岬の燈臺のあるところまで行くのは、ちよつと不便になつた。しかし、旅客は是非其處は見なければならぬ。松も好ければ、深く錯綜した丘と谷との形も好い。殊にティブルランドを成してゐる形は、東京附近では、多く見られない

ティブルラ

横濱、金澤、横須賀方面

好眺望を成してゐる。

其處に行くには、松輪で汽船を下りるか、陸路なら、三崎街道を菊石から入つて金田を経てやつて来るかするのである。何方からでも足場はわるいが、松輪の方が近い。松輪から劔ヶ岬の燈臺のあるあたりまで半里位しかない。

東京灣に入つて来る汽船と軍艦との壯觀は言はずもがな、房總の山が殊に見事である。此處から見た鋸山と州の崎の鼻との眺望は、東京近海では多く見ることが出来ないものである。私は人に訊かれるといつても此處と犬吠岬とを指して答へるのを例としてゐる。旅客は此處を見て、再び松輪に戻つて、山越しの近路をして行くと、三崎までは三里には近い位だ。路は細いが、坂はさう大して大きいのはない。松輪で下りずに、三崎から出かけて行つて見ても、散歩に少し毛の生えた勢を覚える位のものである。

三崎の町は魚蟹の町である。感じが好いといふわけには行かない。それに、城ヶ島が前に横つてゐるので、海が見えない。城ヶ島と三崎との間は細い海峡を成してゐて、丁度川のやうに思はれる。旅館には、青柳、紀の國屋、船本屋などといふのがある。宿料は割合に低廉だ。一圓出せば上等である。

松輪から三

三崎

城ヶ島

小網代

臨海實驗所

西海岸

三浦の遺址

城ヶ島はさう好くない。燈臺のあるところも平凡だ。とても劔ヶ岬などとは比べものにはならない。

で、三崎から歸りは、西海岸をたどることにする。葉山まで馬車がある。海を左に豫想しながら容易に海の見えないやうなところである。小網代には、例の帝國大學の臨海實驗所がある。そこは油壺灣に臨んでゐて、頗る風景が好い。それに、その臨海實驗所は、世界でも名高いもので、この相模灣で獲れた魚で世界にめづらしいものがある。旅客は傳手を求めてその内部を見せて貰ふ方が好い。

この西海岸は、海岸を傳ふと、かなり景色が好い。しかし、馬車では駄目だ。少し難儀して海岸を傳つて歩いて見なければいけない。長井などといふところは殊に好いところである。この西海岸は、東海岸に比して、富士と天城群山とを持つてゐるだけに、殊に眺望がすぐれてゐる。富士を見るのには、伊豆半島の西海岸よりも、もつとすぐれてゐるかも知れない。

この附近には、三浦黨の遺址がかなりにある。櫻の御所、桃の御所、梅の御所などといふ名が今日でも残つてゐる。梅の御所の近所に尼ヶ崎の森輪館がある。一泊して海を

見るには好いところだ。
三崎から堀内まで、馬車で半日か、れば行ける。馬車賃は四五十銭内外である。堀内から返子へは、もうちきであるが、これは、別に鎌倉方面のところに書かうと思ふ。

二 湘南の海岸

▲鎌倉、江の島、片瀬、藤澤、この間には電車がある。藤澤から江の島を先に見て鎌倉に行くもよく、鎌倉から江の島に来て一泊するのも好い。何方にしても、午飯と泊るのは江の島にする方が好い。

▲茅ヶ崎、海水浴場までは、茅ヶ崎停車場から十二三町、車賃十銭乃至十五銭位。平塚も矢張、停車場と海水浴場と離れてゐる。東京からの汽車賃は茅ヶ崎へ六十銭、平塚へ六十六銭。

▲大磯へは汽車賃七十銭、國府津へ八十銭。

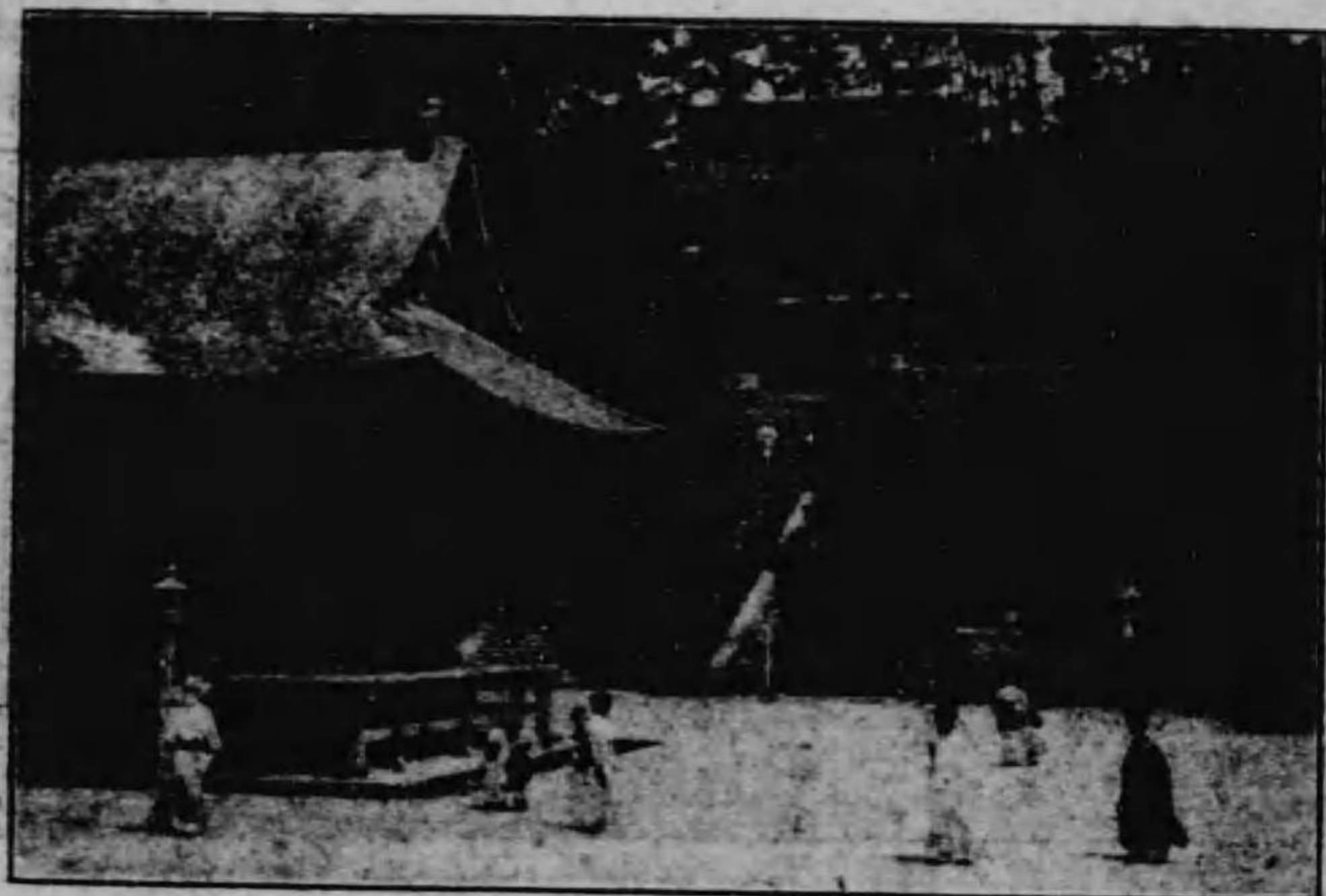
▲國府津から小田原まで電車十五銭、湯元へ三十銭内外。國府津から熱海を経て伊東に行く汽船は、國府津發十二時一回だけ。つまり、伊東を朝の七時に立つて来る汽船が十一時に國府津に着いて、十二時に立つて行くのである。國府津から熱海まで五十五銭、伊東まで一圓。

▲小田原から網代に行く汽船は、正午十二時發、眞鶴、吉濱に寄つて、熱海に寄らない。賃錢網代まで七十銭。

湘南の海岸は、今は東京から最も多く人の遊びに行くところになつてゐる。鎌倉は殊に汽車が便である。鎌倉に居を構へて、毎日東京に通勤してゐる人の話に由ると、少しも不便はないといふことである。東京の郊外に住んでゐると殆ど同じだといふことである。鎌倉と東京との間は、一時間半か、れば十分だといふことである。

私の考では、湘南の海岸はや、平凡だ。むしろ餘り都會に近接しすぎて平凡にされて了つたかも知れないが、兎に角、あまりすぐれて旅客の眼を樂ませるやうなところは

ない。無論中心は江の島附近であるが、これとて、やゝコンベンショナルである。風景
 があまりに綺麗すぎる。變化がなさすぎる。海も波も穏かすぎる。
 しかし歴史的に見ると、鎌倉は面白い。衰へるだらうと思つたのが、榮えたので、慶都
 とか舊都とかいふ感じには乏しいが、それでもいろいろな遺蹟が澤山に残つてゐて好い。
 昔の都では、奈良、平泉に次いで、矢張鎌倉であらうと思ふ。
 先づ東京から出かける。横濱から鎌倉まで行く間で、ちよつと面白いのは、程ヶ谷の
 先の境木村である。江戸名所圖繪にも書いてあるが、東海道五十三次の昔のさまが比
 較的に残つてゐるやうな気がする。榎の竝木も面白ければ、一八の咲く藁葺の屋根を汽
 車の窓から下に見て行く形も面白い。トンネルに入る前あたりもちよつと好い。このト
 ンネルの上には、例の東海道の信濃阪の茶店があつたのである。
 鎌倉を見るには、大船から下りて圓覺寺、建長寺と見て行くやうにするのも好いが、
 馴れない旅客には、矢張、鎌倉を下りて、そこから、眞直に松竝木の大道に出て、一番
 先に鶴岡八幡に参詣するのが順序だ。
 この松竝木の大道は、鎌倉時代の大通りで、昔は若宮大路と言つて、これを中心に四



鎌倉八幡宮

方に市街がひらけて榮えてゐたといふことを
 わすれてはならない。つまり、この大道を島山
 重忠や梶原景時や大江廣元などが烏帽子姿で
 通つたことを忘れてはならない。だから、鎌
 倉時代の遺址は、多くこの近所に残つてゐて、
 政治の首廳も、諸家の邸も、頼朝の邸宅も、皆
 なこの附近にあつたのである。そして、鶴岡
 八幡宮は、昔も今も變ることなく、依然とし
 てこゝに鎮座してあつたのである。北條高時
 の自盡した地も、ぢきその大通の右の山の裾
 の葛西ヶ谷に求めることが出来るのである。
 鶴岡八幡宮は感じの好い社だ。境内も好い
 し、石段も好い。樓門の前から遠く由比ヶ濱
 の波の音を聞いた感じは、ちよつとこの附近



頼朝の墓

では多く得られない。先づ華表のところから入る。蓮池などがある。靜御前の舞つたといふ舞樂殿が右に見える。石段の傍に、實朝を刺した僧公曉の身をかくした銀杏の大樹がある。木の代は變つてゐるであらうけれども、その位置はそのまゝだ。大したものはないだらうけれど、旅客はそこで寶物を見せて貰ふ方が好い。少しは旅の話の種になるものもないではない。宮の後に聳えてゐるのは白旗山である。社を出て、左に折れて、町外れを二三町ほどたどる。頼朝の邸跡が其處等にある。それから一二町、山添ひに歩いて行くと、高い丘の半腹に、頼朝の墓がある。五輪塔である。その隣に大江廣元と島津忠元との墓がある。主の頼朝の

墓は昔蒸してゐるのに反して、臣の廣元の墓の綺麗に掃除されてゐるのは一奇である。これと言ふのも、廣元の後裔の島津家が今日猶榮えてゐるためであらう。この東に、荏柄天神の社がある。これは鎌倉がまだ都にならない以前からあつた古社としてきこえてゐる。

それから更に東する。例の大塔宮護良親王を祀つた鎌倉宮に詣でるには、そこからまた五六町奥に入つて行かなければならない。社はさう大きくはないが、清楚な白木造りで、感じが好い。晩春の頃、山櫻がちら／＼散つてゐるのを見ると、そゞろに旅客をして南朝の歴史を思はしめる。社の奥には、例の土牢がある。頼むと見せて呉れる。淵邊某は、親王を此處で弑して、首級をその裏の山の松のあるあたりまで持つて行つたといふことである。土牢の廣さは八疊敷位あらうか。

荏柄天神社の附近まで戻つて、右に滑川の橋を渡る。坂東三十三番の杉本觀音がそこにある。それから東して淨明寺に行く。その近所にある公方屋敷は、足利氏が關東管領であつた時の屋敷址である。これを眞直に東すると、金澤の方へ出て行く朝比奈切通がある。

光觸寺

葛西ヶ谷

妙本寺

小袋阪

建長寺

東慶寺

光觸寺も其近所にある。

滑川の流域に添つて下ると、例の葛西ヶ谷だ。北條高時の自盡した寺は潰れてないが、その後出来た寺が残つてゐて、當時の遺物を澤山に藏してゐる。

日蓮宗の妙本寺は、國木田獨歩が『夕日いざよふ妙本寺』と詠じた寺である。附近に比企能員の墓がある。

これから海岸の方へ行くと、爲朝の矢の根井戸だの、光明寺だのがある。林木座はちよつとした町を成してゐる。

再び八幡の前に戻つて来る。それは建長寺と圓覺寺とを見るためである。小袋阪といふ狭い長い切通しがある。鎌倉には四方にかういふ切通しがあるが、つまりこれから内が本丸のやうな形になつてゐたのである。建長寺は山門も大きく境内もひろい。本堂の前に竝んでゐる數株の樹は見事なものである。寶物の中には、頼朝が富士の牧狩に使つた陣太鼓なるものがある。本堂の欄間の天人の彫刻も名高いものである。

長壽寺、淨智寺、東慶寺などといふ寺が、こゝから圓覺寺に達する間の彼方此方に散在してゐる。中で東慶寺は、尼寺で、豊臣氏の遺孤が此處で尼になつたり何かしてゐる

寶領屋敷址

圓覺寺

梅

古鐘

化粧阪

葛原岡神社

ロオマンズの多い寺である。少く行くと、路の傍に管領屋敷の址が依然として残つてゐる。春先は野椿の赤いのが咲いてゐる。やがて圓覺寺に達する。

圓覺寺は北條時宗の創建したもので、奥に時宗の墓を藏してゐる。建長寺に比すると境内がひどくさびれてゐる。それといふのも、一方には半僧坊といふ流行神がその裏にあるのに、此方にはさういふものがないからである。しかし、境内には梅が多く、三月頃は殊に見事である。寺の右の丘の上に、古鐘があつて、一つきいくらで遊人の撞くにまかせてゐる。いかにも禪寺らしい感じのする寺だ。

鎌倉を初めて見物する人に取つては、これから扇ヶ谷に出て、化粧阪を越えて、長谷の方に出て行く方が便利である。それには、長壽寺の角から右に曲つて、海藏寺に十六の井を見たり何かして、右に化粧阪に登つて行くのである。阪の左の方に、景清の土牢といふものがある。

葛原岡神社は、南朝の忠臣俊基朝臣を祀つてゐる。丁度化粧阪を上り切つたところである。俊基朝臣は其處で斬られたのである。こゝから扇ヶ谷の青福寺をたづねて、政子實朝の墓を見て長谷の方へと出て行く道がある。

長谷はしかし普通には八幡前から電車に乗つて行く。このあたりは、二十年前には、一面の麥畑であつたが、今はすつかり人家になつて了つた。長谷の大佛は、電車を下りて眞直に突當つたところにある。境内は靜かで、ちよつと感じが好い。それに、大佛の顔もよく出来てゐるのできこえてゐる。頼むと、佛像の腹の中の觀音六體、阿彌陀三體を拜ませて呉れる。

電車路近くまで戻つて右に行く、長谷の觀音がある。寺もかなり立派な寺である。觀音は鎌倉の海中から出現したと稱せられるもので、眞暗な中に安置されてゐる。旅客が行くと、寺僧はロクロ仕掛で、手燭を觀音の鼻先まで上げて見せる。

この附近には、鎌倉權五郎社だの、權五郎の手玉石だの、星月夜の井戸だのといふところが澤山にある。鎌倉十六井とか云つて、綺麗な水の出る井が、此處には澤山にあるが、これを以てしても、鎌倉といふところは、海近く、水がわるいところであつたといふことが想像せられる。

由比ヶ濱の海岸は、さう大してすぐれたところとも思はれない。松も凡である。兩方から出た稻村と小坪の徒崖のさまなどもさう好いとは思はれない。海水浴の地としても

さう好いとは思はれない。

逗子に行くには、鎌倉の停車場へ戻つて、汽車で行くのが普通だが、足の達者な人は、材木座から小坪を通つて、峠越しに行く方が興味が饒い。そんなに大して骨も折れない。女でも樂に行ける。

逗子の停車場からは、馬車が出る。葉山から堀内の方まで行く馬車がある。この馬車が此處では殆ど車を壓倒してゐる形になつてゐるのが面白い。客が一人でも二人でも、馬車はドンドン出て行く。そこから海岸までは西南に十町ほどある。御最期川が半は潮入川になつて流れてゐる形が面白い。養神亭はその潮入川の向ふにある大きな旅館である。こゝはちよつと好い。座敷から庭下駄を突かけて、向ふに見える海岸に行つて、始めて海が見える。弓弦を引いたやうに波は波打際を打つてゐるけれども、矢張規模が小さい。

この近所には、例の浪子不動、六代御前の墓、島山、三浦の古戰場などがある。旅館では養神亭の他に日蔭の茶屋、柳屋などがある。これから葉山の長者ヶ崎を通つて、御用邸の前を過ぎると、長者園といふ旅館に達する。こゝらは、富士と江の島とを眺める

のに、最も好いと言はれてゐる。(三浦半島の部参照)

再び鎌倉に戻つて、今度は電車で江の島の方へと向つて行く。やがて極樂寺の切通に
来る。それを出ると、川が流れてゐて、その向ふを電車が走つて行く。例の新田義貞が
鎌倉攻めの時に悪戦苦闘したところである。其時戦死した大館宗氏以下の墓は今日でも
依然として路傍にその跡をとめてゐる。やがて海が見える。稻村ヶ崎の長く海中に出
てゐるのが見える。此處に來ると、ひとり手に、義貞が海中に錦刀を投じたことなどが
思ひ出される。しかし、實は干潮の時は、この稻村岬の鼻は徒歩で涉つて行くことが出
来るやうになつてゐるのである。今でも釣する人などは、潮時をはかつて、わざとそ
こを通るといふことである。

こゝから江の島は手に取るやうに見える。

七里ヶ濱は明媚な風景だ。決してわるくない。湘南の風景の中で、明媚なのを求めた
なら、先づ此處等に指を屈さなければなるまい。それを旅客は電車の中から見て行く。
春先などは實に好い心持である。少し行つたところに小さな川がある。日蓮の御難の際
太刀の折れた異變を報ずる使者と宥免の使者とが兩方から行達つたところで、今でも名

を行達川と呼んでゐる。こゝから見た腰越の入口の岩に松の生えてゐる形は面白い。
腰越は純然たる魚蟹の村だ。しかし、三崎あたりに比べると、魚の收穫が乏しいと見
えて腥氣に乏しい。そこには例の義經の腰越状を藏してゐるといふ満福寺がある。電車
は半は瓦、半は茅葺の汚い町の中をけた、ましい破鐘のやうなベルを鳴して通つて行く。
腰越のつぎは片瀬である。日蓮の御難の場所に立てられた龍口寺がある。その前に片瀬
饅頭といふ旨い饅頭がある。此處には、海水浴の旅館が二三軒あるが、風景はあまり好
いといふ方ではない。松原も平凡だ。

片瀬の停留場で電車を下り、それから二町ほど歩くと、海岸に出る。江の島は俄かに
前に展開されて見える。白い大きい浪が長い棧橋に打寄せる。流石に好いと思はずには
誰もゐられない。富士箱根天城が右に一列に並んで見えてゐるのも見事だ。

江の島では、岩本、ゑびすや、金龜樓などといふ旅館がある。そしてこれ等の旅館に
富士の方を見るに適した家と、鎌倉逗子の方を見るに適した家と二種ある。岩本、ゑび
すやは前者である。金龜樓は後者である。何方にも特色がある。

江の島の料理は、田舎者が御馳走を食ひに行くのを目的とした餘習が残つて、今でも

こつてりと分量澤山である。御馳走が澤山ありさへすれば好いといふ形である。段々登つて行くと透津の宮、中津の宮、奥津宮の三社がある。中津の宮を少し行つたところに、山二つといふところがあつて、そこに一遍上人成就の水といふのがある。このあたりから見た風景は中々好い。それから奥津の宮の傍の、これから窟に下らうとする茶店のあたりから見た岩と波の相戦ふさまが見事だ。松も好い。其處からは、晴れた日には、大島の噴烟が指さされる。

兒ヶ淵から窟へと下る路は、女子供には面白いだらうが、旅客には餘り有難いところではない。海人の真似をして、貝やら魚やらを股の間に挿んで人の目を晦ますのを家業としてゐる男なども滑稽だ。しかし、窟の暗い中から海の明るいのを輪廓的に見た形はちよつと面白いと思つた。

島には橋の樹が多い。春は花が見事だ。それ菜螺の壺焼が旨い。

片瀬からか、つてゐる棧橋は、時々波の爲めに洗はれて落ちることがある。暴風雨の時などは殊にさうだ。昨年一日半ほど交通が絶えて、米がなくなつて困つたなど、いふ話があつた。

再び片瀬に戻つて、電車で行くと、鵠沼はすぐである。その名の停留場もある。昔は此處は松原と砂山とばかりであつたが、十五年ほど前から開けて今では湘南でも指に折られる海水浴の地になつた。東屋、鵠沼館などといふのがある。片瀬、鎌倉などよりは、海水浴の地としては無論すぐれてゐる。松原も好い。

藤澤では、や、遠いが遊行上人の遊行寺を見る必要がある。一汽車おくらせても、度々来ないやうな人は行つて見る價值がある。車賃が二十錢位である。鎌倉時代の創建で吞海上人の開山であるが、山門、本堂共に立派で、賽客もまた多い。遊行上人は此處から出て日本全国を遊行してゐるのである。奥に小栗判官堂がある。平凡見るに堪へない。東海道線の汽車で来ると、大船あたりから地形が變つて、此處から茅ヶ崎あたりに行く、丸で趣が別になつたのに氣がつかすにゐるものがあるまい。此處等には、もう丘陵はない。全くの砂濱で、松原ばかりがつゞいてゐる。そしてその間に天津桃の畑などがつゞいてゐる。春は汽車の中で、立派な桃見をすることが出来る。

茅ヶ崎附近は、湘南の海岸でも、空氣が殊にオゾンに富んでゐるといふことである。

従つて肺病患者の静養地として著名である。それに夏は涼しく冬は暖かなので、別荘なども澤山にある。高田畔安の南湖院は、停車場から一里ほど海岸に行つた南湖といふところにある。茅ヶ崎館は、これとは路が途中で二つに分かれて、左に向つて行つた方の海岸にある。海水浴場で、一面つれ込宿のやうなところである。その室からは、海岸近く眺つてゐる鳥帽子岩が、つい鼻の先に見える。

その他にも二三軒宿屋がある。

茅ヶ崎と平塚との間に、馬入川が流れてゐる。甲州の桂川の末流である。この沿岸は相模でも殊によくひらけたところで、大山が丹澤山塊から獨立して、ナボレオン帽のやうな形をして車窓から見えてゐる。そして平塚から出た一路は、眞直に相模野を縦貫して、厚木町を経て、武蔵の八王子へと向つて行つてゐる。この川では夏は鮎がとれる。馬入川の鐵橋はかなりに長い。河口もちよつとカラアに富んでゐる。そこからは、晴れた日には、大島の噴煙を指點することが出来る。平塚も肺病患者静養地の一つだ。そこには佐々木病院の分院がある。海水浴場などもある。松原のさまはちよつと茅ヶ崎に似てゐる。

こゝから大山に行く道がわかれて行つてゐる。山の麓まで三里、それから二十町ほど登ると町がある。頂上まではそれから更に一里卅丁ある。この附近の流行神で、夏は登山者が陸續として集つて来る。

平塚から花水橋をわたると、高麗寺山の獨立した山が見えて、丘陵が海岸近く段々あらはれて来る。その次の停車場は、大磯である。

大磯は今も賑やかなところになつた。それと言ふのも、海水浴ばかりではなく、都人士の要求を満足させる種々なものがあるからであらう。一面避暑の地で、一面歡樂の巷と言つたやうなところがある。それに、豪商大官の別荘が澤山あつて、東京からやつて来る女や男に贅澤な人が多い。従つて藝妓なども多い。

海岸はしかし平凡である。町から東に離れて、松は少しはあるが、それとて、あまりすぐれたものではない。唯、町の後に聳えた一帯の丘陵が眺望に富んでゐるばかりである。旅館には清龍館、松仙閣、長生館などといふのがある。私は一度其處に高山樗牛君を訪ねて、甲喜樓と言ふのに泊つたことがあつたが、宿料も高く、感じもあまり好くはなかつた。

町から四五町行つたところに、例の西行庵がある。鳴立澤の秋の夕暮といふ歌は此處で詠まれたのである。この附近は、昔は國府に近く、街道筋であつたから、旅客が常に通つたところと見える。其



鳴立澤

他鎌倉時分の遊廓の址や、虎子石や、曾我兄弟の木像などがあるが、多くは見るに足りない。大磯、その次は二の宮である。この間、汽車の中から松原越しに見える海はちよつと感がいい。二の宮からは烟草の出来る秦野の方向

へ行く軽便軌道がわかれて行つてゐる。秦野はちよつと特色に富んだ金持の多い暖かい町である。

二の宮から國府津に行く間は、丘陵と谷と海と錯綜したやうな形を成してゐる。そして到る處に蜜柑が栽培されてある。所謂本場でない地の蜜柑は主に此處や小田原あたりからやつて來るのである。やがて汽車は國府津へ着く。

國府津は猫の額のやうに狭いところであるけれども、松と海との形が、他の湘南の海岸には見られないほど雄大な趣を持つてゐる。私は其處が好きだ。波の音の高く枕に響くのも好い。國府津館、葛屋などといふ旅館がある。

こゝからは毎日正午頃に、熱海、伊東の方へ行く汽船が出る。伊東に行くには、東京の靈岸島から直航の船が出るが、寢て行くには其の方が好いが、此處からも行く旅客が多い。午頃出て、三時すぎには、伊東につくことが出来る。

小田原の海岸も、ついでに此處に書くべきであるが、それは箱根行の條に譲つて、この一章は此處で筆を擱くことにする。

これら湘南の諸勝は、遠國からの旅客には、つゞけて行つて見る必要があるが、東京からは、一つ一つ行つて泊つて見るべきである。この間は、東海道を旅行する旅客に取つては、あまりめづらしいところでもない。唯、をりにふれ、時にふれて、鎌倉にでも

行つて見やうかとか、茅ヶ崎へでも行つて見やうかと言ふやうなところである。大抵は日がへり、乃至一晩とまりで行くところである。或は長い旅の途中ちよつと寄つて見るやうなところである。一々つゞけて行つて見るよりも、却つてその方が興がある。

三箱根行

- ▲國府津 から湯元までは電車、小田原まで十五錢、湯本まで三十錢内外、一等室はこの倍。
- ▲小田原 からは熱海の方へ行く汽車がわかる。
- ▲箱根 の山歩きは、駕籠もあり、自動車もある。自動車は湯本から宮の下で、五人乗で四圓位、しかし谷に臨んでゐるから、餘り好い心持がしない。山駕籠も女子供なら仕方ないが、歩く方が面白い。駕籠は湯本から宮の下まで二圓内外、大瀬谷や強羅の方まで行くと、往復四五圓取られる。

- ▲姥子 の向うの湖尻から箱根の古驛まで船、船賃一圓八十錢、乗合があればいくら割が安くなる。
- ▲箱根 から鞍馬の裾を越えて、熱海へ三里半、湯河原へ三里、此間は車は通じない。
- ▲仙石 から御厨峠に出て、御殿場に出て行く路は、三里位、さう大して峻しくない。
- ▲東京國府津 間の汽車は、距離四八哩二錢、賃金二等一圓二十錢、三等八十錢、時間は普通列車で三時間十一分、急行なれば一時間二十五分、湯本行の電車はいつも汽車に連絡する。

箱根は温泉場として東京の人に最も親しい。それと言ふのも、温泉にお好次第の温泉があり、設備が整ひ、交通が便に、何んな勝手なことでも出来るからである。それに、東京附近では、先づ先づめづらしい山水の勝に富んでゐる。

箱根の食物
都會式
塔の澤の藝

箱根の風景

太平臺までの
早川の流

湯元、塔の澤は女などを伴れて遊びに行くのに好いところである。それから五六人の伴で行つて騒ぐのにも面白い。しかし静かに温泉を求める旅客は、何うしても、山を上つて、底倉、木賀あたりまで行かなければならない。その上の強羅、小涌谷あたりに行けば、一層静かである。

箱根はそれに、食物が比較的に旨い。調理の方法も都會式である。湯元、塔の澤の宿では、東京の竝の料理店位のもは容易に食はして呉れる。藝者は塔の澤に巢を構へて、足りない時には、小田原から呼んで来るやうになつてゐる。塔の澤に三四十人位ゐる。義理や何かの出銭がないから、藝者は大變に樂なところださうだ。「一つ塔の澤へでも稼ぎに行つて、お金でも残して来やうか」などと東京の藝者はよく言ふ。

箱根は風景としては、規模が小さい。山が淺い。日光とは比べ者にはならない。芦の湖なども、さう大して好いと言ふほどではない。しかし、あまり山水と深い親みを持つてゐない東京の人には、この位で、丁度好い。これでも東京の人の眼には、立派なすぐれた山水として映るのである。

箱根では、太平臺に行くまでの早川の谷が好い。堂島の溪流に添つた温泉宿が好い。

萬年橋附近が好い。新強羅から鷹の巢山を見たあたりが好い。小湧谷の春の花などが好い。大湧谷から姥子に行く間にある間魔の臺の眺望が好い。湖尻から箱根にわたつて行く船の中が好い。その他では、私は多く好むところがない。

箱根に行くのは極く簡單である。東京國府津間の列車の運轉は一日九回ある。汽車賃が八十錢。これに要する時間は三時間十一分、で、國府津で汽車を下りると、すぐその前に、湯元行の電車が待つてゐる。これが朝の八時頃から夜の十二時頃まで廻轉してゐる。電車には、一等二等の別があつて、賃金は一等は二等の倍であると覺えてゐる。で、電車は國府津から、酒匂に出て、小田原を通つて、相生町の角で熱海へ行く方の軌道と連絡して、風祭から箱根の山の中へと入つて行く。國府津、湯元間の時間は、一時間半だと私は覺えてゐる。

酒匂には、松濤園がある。一種の海水浴場である。園の中には、獨立した數軒の小さな家があつて、それを借り切りにすることが出来るやうになつてゐる。こゝは松が好い。松の間から見える箱根、足柄の連峯と富士と相重り合つてゐる具合が好い。小田原は汚い不整頓な町だ。しかし、何處か昔の街道筋のやうな面白い気分がある。物價の廉いの

酒匂
松濤園
小田原
町
物價の廉い
ところ

と、肴の多いのと、氣候の暖いので、わざわざ東京から行つて住んでゐる人などもあ
る。花柳界なども賑い。汽車賃を使つて行つても、東京で遊ぶよりは賑いなどとよく人
が言つてゐる。

小田原には、小田原城址、二宮尊徳翁の報徳神社、小峯の梅林、松原神社位で、他に
は見るべきものもない。海岸には、安い海水旅館が二三軒ある。

風祭あたりから、山の嵐氣が次第に衣を襲つて来る。左に長く連つた山は、秀吉が小
田原陣の時、京都から淀君を呼びよせて長圍の計をなした石垣山である。やがて、電車
は山深く深く入つて行く。終點は湯元で、そこに宿引が澤山出て來てゐる。湯元では、
福住は名高い旅館である。その他に小川といふのがある。川を渡つて向ふに、大きな岩
崎の別荘がある。更に須雲川を渡つて、玉簾の瀧に行き、引かへして、早雲寺に行つて
見る。早雲寺から石垣山の峯つたひに早川尻の方へ出て行く路もある。

塔の澤は湯元から早川にかけて旭橋をわたつて、崖に添つて行くとすぐだ。新玉の湯
環翠樓、玉の湯、福住などといふ大きな旅館がある。浴室はいづれも綺麗だ。
それに、此處の特色は溪流の面白く折れ曲つて流れてゐる形である。それに山と山とに

狭く挿まれた具合も面白い。こゝからは、明星ヶ嶽に登る路がある。

旅館の間々には、藝者屋がある。格子の中から三味線の音が洩れてきこえたり、だら
しのない風をした女が素足で歩いて行つたりしてゐる。旅のつれづれに一夜聘んで見る
のも興味がなでもない。

湯元、塔の澤、こゝらは宿料はあまり安い方ではない。一夜、何うしても二圓かゝる
と思はぬければならない。茶代も一人前一圓の割で出さなければならぬ。

湯元からは自動車が出る。五人乃至六人乗で宮の下まで四圓、木賀まで五圓、小湧谷
まで六圓、芦の湯まで九圓、箱根町まで十三圓である。割合にしては高くない。駕籠な
どで行くよりは、却つてこの方が便利である。

塔の澤からは、早川の谷に添つて、爪先上りに登つて行く。好い景色である。春は山
櫻が咲いてゐるたりする。新緑の中に卵の花の白く咲いてゐるのも好い。紅葉の時も見事
だ。

前には絶えず明星ヶ嶽の丸い姿を見て行く。太平臺まで一里位あるが、この間は景色
が好いので、われ知らず歩いて行つて了ふやうな處だ。太平臺から谷を隔て、宮の下の



箱根宮の下

洋館を望みながら、茶店の欄に腰をかけて、茶を啜るのも心持が好い。やがて宮の下に着かうとする前から、左に下りて行く路がある。その底に堂島温泉がある。

こゝは割合に軽便だ。近江屋、大和屋などいふ旅館がある。すべてが、平民的で心持が好い。それに、早川がすぐ欄干の下を流れてるので、水聲を聴かすばかりである。夏は殊に涼しい。附近に、調べの瀧、白糸の瀧などといふのがある。

宮の下は箱根では一番贅澤なところだ。それと言ふのも、主として外国人と上流社會の人達とを目的にしてゐるからである。富士屋は殆ど外国人専門である。外国から歸つた人

から聞くと、設備の割に宿料が安いといふことだ。ちよつと富士屋位のホテルは、スイスでも先づ好い方の部ださうだ。この他に、奈良屋がある。この方は日本人の上流社會を主とした旅館で中々立派だ。ちよつと、我々平民には入りかねる。

此處には御用邸がある。

町の通りには、外国人相手の Fine Arts Shop が軒を並べてゐて、古い銅像だの古器物だのいろ／＼なものを店先に並べて置く。やがて蛇骨川の深い谷に出る。そこに萬年橋がかゝつてゐて、その南と北とに、底倉の温泉宿がある。北にあるのが萬年橋で、南にあるのが梅屋、仙石屋である。此處はちよつと靜かで好い。箱根七湯の中で、長く逗留するには此處が一番だ。

萬年橋の橋の上から眺めた眺望はちよつと好い。谷の深いのもよければ、早川と蛇骨川の相合してゐるさまも好い。それに明星ヶ嶽がすつとひらけて、明神、金時あたりの方までひらけて行つてゐる気分が、何となく旅客の心を伸々させる。この蛇骨川の谷には秀吉が小田原陣の時に入浴したといふ大開風呂なるものが残つてゐる。

此處で路が二つにわかれる。小涌谷、菅の湯の方に行かうと思ふ人は、橋をわたらず

に蛇骨川に沿つて左へ左へと登つて行く。木賀、新強羅、強羅、仙石原、姥子の方に行かうと思ふ人は、橋をわたつて川に添つて上つて行く。

先づ小涌谷から芦の湯の方へ行つて見ることにする。そこから小涌谷まではいくらない。二十町位である。ちよつとティアルランドのやうなところに位置してゐて、感じがいかに静かだ。矢張外國人を相手にしてゐるので、大きな三河屋などといふ旅館がある。西洋料理なども旨いのが出来る。それに、此處まで来ると、地盤がかなり高くなつてゐて、夏も朝夕は涼しすぎる位である。箱根の温泉の中で私は一番此處が好きだ。

これから芦の湯までは一里ほどある。全くの山路で、縦横に折れ曲つてゐる。それに草原なので、夏、既に秋草の一面に咲いてゐるのを見る。雲や霧の往來も、下とは格段の違ひである。芦の湯は、他の鐵鑛泉などに比べて、泉質が硫黄泉なので、例の玉子の腐つたやうな臭氣が、そこに行くくと、よく鼻を撲つ。女などにはあまり好かれない温泉である。

松阪屋、紀の國屋などといふ旅館がある。

この温泉の前には、二子山が屹として聳えてゐる。そして、後には駒ヶ嶽が高く立つてゐる。二子山の半腹あたりまでは、浴客の運動の爲めに設けた路が出来てゐる。浴客は退屈すると、よくそこに登つて行く。眺望が頗る好く、其處からは小田原の海を見わたすことが出来る。

駒ヶ嶽にもここから登攀するのが順路になつてゐる。ここから、曾我兄弟の墓だの、多田満仲の墓だといふ、いかゞはしいものを見て、少し行くと、芦の湖が唯一目に見わたされるやうなところに出る。好い眺望だ。此處に來ると、誰でも快哉を呼ばずには居られないと思はれる。そこから元箱根までは、大抵二十町位しかない。

芦の湖の倒さ富士、塔ヶ島の御用邸、碧い碧い色を湛えた湖水、すべて是れ一輻の繪である。湖水と文庫山の間には、元の箱根の古關趾がある。箱根の舊道は、湯元から、須雲川の谷に入つて、畑、須雲など、いふところを通つて、眞直に此處へとやつて來るのである。しかし、今では、其處は殆ど通る人がないと言つても好い位さびれて了つた。其處に住んでゐる人は、獵師か、でなければ箱根細工の材料を切り出すのを職業にして

辛くもその日を送つてゐる人達である。交通の變遷などが思ひやられる。

元箱根には、箱根神社、箱根別當の舊跡などがある。賽の河原に、石佛が澤山亂れ重つてゐる。そこから離宮の前を通つて、やがて箱根宿へと着く。

箱根宿は温泉場に比べると、ひどくさびれてゐる。茅茨敗屋歴々として相次ぐといふ風である。従つて感じがあまり好くない。湖水もいやにどんよりとしてゐるし、周圍をめぐつた山の影も低い。唯、昔の五十三次の一驛が廢驛となつて残つてゐるのを目のあたり見たやうな氣がするばかりである。

更に再び底倉まで戻る。そこで萬年橋をわたつて、宮城野川に溯つて行く。川床が次第に高く、溪流が上から落ちて来るやうな氣がする。水の鳴る音も頗る高い。六町で、木賀の温泉に達する。其處には龜屋、仙石屋の二軒の温泉宿がある。こゝから五町ほど溯ると、宮城野村がある。そこに、名物の蕎麥を賣る家がある。

この少し手前から左に岐れて、早雲山を上る路がある。それは新強羅から強羅、大涌谷、姥子の方へ行く路である。つまり箱根の裏山路である。これに引かへて、宮城野から眞直に行けば、一里ほどで仙石原の温泉を経て、御厨峠へと出て行く。御厨峠から見

た富士は、富士百景の中でも殊にすぐれて人口に膾炙してゐるところである。そこを越えると、路は御殿場の方へと出て行く。

裏山路を行くと、十五六町で、新強羅に達する。五六年前新に開いた土地で、前に鷹の巣山を見、下に蛇骨川の谷を望んで、風光絶佳の地である。旅館も新たに大きなのが出来た。こゝから三十町位で、強羅温泉に達する。こゝは箱根の全景を見るといふやうな位置で、頗る眺望に富んでゐる。雲霧の往來も頗る變化を極めてゐる。旅館には、早雲館と言ふのが唯一軒あるばかりで、宿料なども安い。それに、そこには、湯壺の大きいのがあるのできこえてゐる。

しかし、宮城野から此處まで来る間は、かなりに遠い。概して林の中を通つて来るやうなところが多い。それに、路もあまりよくない。車も完全には通じない。女子供にはちよつと無理である。

強羅から大涌谷まで二十町ほどある。矢張上つたり下つたりする石ころ道である。丁度連山の半腹を歩いて行くやうな形になつてゐる。何うかすると、藝者をつれて駕籠に乗つた一行などに出會す。大涌谷はちよつと壯觀である。湯氣が高く騰つて、石も何も



湖の芦

皆な黄くなつてゐる。手を入れて見ると、皆な湯である。

しかし此處には人家も温泉宿も何もない。唯、めづらしいので、人が見物に行くばかりである。それに、湯気の噴出が烈しいので、久しく留つてゐることが出来ないうやうな處だ。で、急いで其處を去つて、猶山路を七八町上ると、ちよつとした峠のやうな處に出る。

『閻魔の臺だ』

かう案内の男が教へて呉れる。

此處に來ると、誰も皆なホツとする。何故なれば、其處からは、深林を隔て、芦の湖が手に取るやうに見えるからである。『あ、好い景色だ』かう誰も言ふ。そして、暫くはそこに立盡す。

實際、此處から見た芦の湖は、芦の湯の先きのところ

ろから見たものよりは、幾倍すぐれてゐるかわからない。あまり開けてゐない形も面白いし、深林を前にした形も面白い。それに、世離れてゐるといふことが、何んなに私達の氣分を爽やかにするか知れない。

それに、此處から見た富士が見事だ。雲のか、つたり晴れたりするさまがいかにも好い。そしてその影は靜かに水の上に落ちてゐる。兎に角、箱根山中では稀に見るの好眺望と言つて好い。

こゝから姥子まで行く間は、下り道ではあるが、全く氣味のわるい深い深い林の中である。そして姥子温泉はその林の中に埋れたやうな形になつてゐる。この温泉はや、温い。それに温まるといふよりは冷える方であるから、眼病などに好いといふことだ。贅澤な、豪華な、設備萬般整はないもの、ない箱根の温泉中にあつては、こんな温泉があるがと思はれるほど鄙びてゐるが、それでも、をりくは、好奇に都會の人がこゝまでやつて來るものがあるを見て、山中に似合はず、設備が思の外行届いてゐる。宿の一間から、芦の湖の一部が見えて、そこに靜に富士がその朝の影を映してゐるさまは美しい。

こゝには旅館は一軒しかない。そして普通の浴客は、箱根から来るものよりも、山向ふの駿河から、峠越しにやつて来るものが多いのは一奇とすべしである。

こゝから湖尻まで十町ほどある。そして半は矢張林の中である。やがて、林が開けて、湖尻が前に見える、一軒の渡船小屋がそこにあるのが見える。

湖の岸を傳つて、元箱根にも出られるが、その間は、二里近くあつて、しかもあまりおもしろい路ではない。旅客は此處では非船を雇して湖水を渡らなければならない。この船賃は一圓八十錢であるが、乗合があればあるやうにぐつとやすくなる。しかしこの船賃は私には高いとは思はなかつた。舟中の風景は、實際それを償つて餘りあると思つた。

船中から見た駒ヶ嶽は頗る見事だ。それに、湖をめぐつた山の形も、箱根から見たとは餘程趣が變つてゐる。鞍馬などの位置が、景色に一種の趣を添へてゐる。

箱根から伊豆の東海岸の方へ出て行く路は、鞍かけの裾を通つて、草藪やら林やらの中を抜けて行くやうになつてゐる。初夏の候は、鶯と杜鵑とがかけ合ひで鳴いて、頗る旅情をなぐさめる。それに、鞍馬の下の高原あたりから見た富士は、箱根山中何處

から見たものよりも美しいと言はれるだけあつて、さうに人の心を惹く。

この路は草藪や林の中ではあるが、概して平坦で、登るやうなところはない。至つて容易である。そして、中途で、この路は二つにわかれる。一つは湯河原に下る路で、他は日金山から熱海へと下つて行く路である。日金は十州一島を望むと昔から言はれてゐるだけあつて、頗る眺望に富んでゐる。秋はことに好い。熱海の方から登ると、一町ごとに石佛を置いた五十町の登路があつて、それが峻峻で、頗る難儀であるが、箱根から越えて行くと、それが下りになつてゐるから樂だ。この路は女子供にはちよつとむづかしいが、學生などは是非此處を一度踏えて行くべきである。箱根から湯河原へも、熱海へも三里に少し遠い位のものである。

四 熱海と伊東

▲伊東へは國府津から汽船、賃錢一圓、毎日一回正午十二時に出帆する。この

船は熱海にも寄港する。海を行けば、東京豊島から東京伊東間の汽船で行く。夜、九時出帆、朝の八時に伊東に着く。賃金一圓二十錢。修善寺の方から来ると、山越して五里、車を通ずる。

▲熱海へは小田原から汽車、哩數一五哩八、三等賃金七十九錢。この間は海に添つて景色が好い。

▲熱海と伊東の間は山越して行けるには行けるが、路があまりよくない。

▲大島へは伊東からも、熱海からも、和船が出る。何方かと言へば、伊東の方が便利だ。風の好い時には、苦もなく行ける。

熱海と伊東とは、其間に峠が横つてゐるので、近くつてゐながら、互に離れたやうな感じを抱かせるところである。熱海に行く人は、大抵熱海だけで済まし、伊東に行く人は、大抵伊東だけですますといふ風である。従つて熱海と伊東とは、餘程氣風が違ふ。熱海は頂上まで行つて繁華からいくらか下り坂になつてゐる形だし、伊東は、今ま

で開けなかつたのがぐんぐん開けて行くといふ形である。であるから浴客に取つては、伊東の方が居心がよくつて、そして勉強する。宿料なども安い。唯兩方とも、冬は肺病患者が療養に来てるのが多いのが閉口だ。

この地方に行くには、順路として、小田原十字町からわかれた軌道に由るのが普通である。この軌道は日に七八回往復するから、旅客は多く待たせらるゝことなくして、國府津湯元間の電車から、この軌道に乗り移ることが出来る。猶、この他に、前に國府津の條に書いた伊東國府津間の汽船の航路がある。その汽船は正午に國府津を出帆して、熱海に寄つて、そして伊東へと行くのである。

しかし、此處では、人竝に陸から行く。小田原熱海間の軌道の賃金は七十九錢である。この汽車は小田原を出て、早川をわたつて、そして石橋に着く。そこは頼朝が大庭景親と戦つて、九死に一生を免れた石橋山の古戦場である。頼朝は此處から遁れて、眞鶴に行つて、そして安房に走つたのである。眞鶴にも停車場がある。十町ほどで、その岬の鼻のところまで行かれる。そこに海水浴場の眞鶴館がある。

汽車は一方海、一方山といふやうな景色の好いところを通つて、吉濱から、門川へと

行く。湯河原の温泉場には、そこで下りて、一里ほど車で西の山裾に入つて行く。湯河原は猫の額のやうな狭いところだが、ちよつと世離れてゐて、心持が好い。藤木川の流れもわるくない。胃腸病、婦人病などにはかなりによく利く温泉である。宿は、藤田屋中西、伊藤などといふのがある。いづれも似たり寄つたりである。

この近所には、土肥實平の城趾だの、三十三體の観音だのがある。浴客は退屈するをり、五十町の急阪路をたどつて日金にのほつて行く。

もとに戻ると、門川の次ぎは、伊豆山である。そこにも温泉と温泉宿がある。相模屋の湯壺は大きいのできこえてゐる。いくらか熱海よりは物價が安いので、長逗留の客は却つて此方の方が多い。この町の後の高い山の半腹に、伊豆山権現がある。昔から名高い社で、頼朝時代には、この社の持つた権力は非常なものであつた。社からの眺望は可なり好い。

賑やがて熱海だ。賑かな町と大きい旅館とがすぐ目に着く。氣候が暖かいので、避寒には殊に持つて来いといふところである。魚類なども多い。富士屋、相模屋、隠居玉屋、鈴木屋その他にもいくらか好い旅館がある。そして旅館の二階の欄干からは、相模灘と

2.6.1928

そこに浮んだ初島とが手に取るやうに見える。

この温泉は、誰も知つてゐる通り、世界にもめづらしい間歇泉である。日本では、間歇泉は此處と陸前の鬼首ばかりである。つまり時間をきつて、下から吹き上げるのである。その湯元には、柵をめぐらしてある。ふき上げる時の盛んなさまを寫眞に取つたのなどをよく見かける。

それに、此處はもと噴火山の址で、熱海も海中の初島も共に外輪山を爲してゐるのである。そして噴火口は海中にあるのだといふことである。

町の西に、公園があつて、そこに梅林がある。正月には毎年きつと花が咲く。それほど氣候が暖かい。その他、この附近では、前に言つた五十町登りの日金山と、一里ほど先の鹽見ヶ崎と、それに船で初島にあそびに出かけて行く位のものである。

こゝからも、伊東からも、伊豆の七島に向つて、絶えず便船がある。しかし和船であるから、風都合がわるいと、三日も四日も待たなければならぬ。

伊東へ行くには、東京からなら、靈岸島から出る伊東行の汽船に乗るのが一番便利だ。

夕方出帆して、一夜船の中で寝て行けば、明日の朝は、いやでも伊東に着いてゐる。それが一番好いとその土地の人々も言つてゐる。しかし、單獨に其處に行くのでなければ、國府津からの汽船が一番である。次は熱海まで汽車で来て、其處で一泊つて、翌日矢張國府津から出る汽船でそこに行くのである。熱海と伊東の間は、山路で、さう樂には行かれない。また、修善寺をかねて、そこから伊東に行く人は、車か馬車で峠越しに来るといふことになる。

伊東には到る處に湯が湧き出してゐる。松原にも、久須美にもある。そのまた松原の中で猪戸の湯、出来湯、和田湯などとわかれてゐる。旅館は松原の方に、柳屋、山田屋、東京館、前田屋、寶來屋、久須美の方に、大阪屋、櫻屋などといふのがある。比較的宿料が安い。七八十錢から一圓で一日ゐられる。

この温泉場は、まだよく開けてゐない。従つて茶代をほられるやうなことはない。それに氣候が温く、魚類が多く、居心地が好い。しかし、所謂温泉場といふ気分は甚だ乏しい。住民も温泉場の住民の氣風とは全く違つて、何方かと言へば、漁民の氣風が多い。そこが長所、又短所である。

それに、近所にも、あまり見るやうなところもない。溪流もなければ、瀑もない。唯ひろい海が前に展けてゐるばかりである。従つて浴客の遊びと言つては、船にでも乗つて魚釣、打網にでも出かけて行く位のものだ。後藤園といふところがあるが、これとてさう大して面白いところでもない。

此處からは、大島がよく見える。島の根に波濤の白く打寄せてゐるのなども、はつきりとよく見える。此處に来ると、誰でも大島にわたつて見たくなるさうだが、實際さういふ氣がする。それに、伊豆七島に行くには、此處が一番便である。和船はいつでも此處から出て行く。

こゝから修善寺の方へも出て行ける。それから、伊豆西海岸の航行する汽船で、稻取から下田の方に行つて見るのも面白い。ことに陸路を行くと、丁度天城火山群の大室、高室、矢筈などの諸山の麓を掠めるやうになつてゐるので、面白いところが多い。稻取まで伊東から陸路十二三里ある。

伊東から下田に行く汽船の甲板の上も、ちよつと好い。波は荒く、船は揺れるが、天城火山群を見るには、此れに越すところがないと思はれる位である。大島もそこからは

よく見える。しかし、別に、伊豆半島の行程を詳しく書くつもりだから、此處は先づこの位にして置く。

五

五 富士登山

- ▲東京 から御殿場まで哩數七〇哩三、時間四時間餘、三等賃金一圓九錢。
- ▲御殿場 から二合目まで三里餘、人力車がある。こゝから吉田の方へ行く馬車鐵道がある。二合目乃至太郎坊あたりで、人足を雇つたり、登山の支度をしたりする。
- ▲吉田 即ち裏口から上ると、中央線で大月驛まで、東京の飯田町から五十哩六、三等賃金八十六錢。大月から馬車鐵道、谷村を経て、吉田。吉田で登山の仕度。
- ▲表口 大宮口に下りると、一合目から三里、八幡宮、それから、又二里で大宮

そこから富士、芝川間の身延鐵道で東海道の富士驛まで来る。大宮から三等賃金十八錢。

▲富士川 下りの早船は、甲府まで中央線、それから馬車鐵道で御澤、それから早船で下る。岩淵まで半日かゝれば達する。

富士に登る人は、十中の八九は東海道の御殿場驛で下りるやうである。つまり須走口を登るのである。

この他に、大宮口(表口)吉田口(北口)須山口、東表口がある。いづれも、登山者の都合の好い口を選ぶやうに出来てゐるのである。この中で、御殿場の東表口に次いで、登山者の多いのは、吉田口である。その次が表口即ち大宮口である。須山口は裾野驛から下りて上るのであるが、これが一番少い。

東海道線で行くと、國府津から、汽車は箱根足柄の火山群を前にしながら、次第に山北の方へ近づいて行く。酒匂川が絶えず路の畔に見えたりかくれたりしてゐる。矢倉

富士登山

大宮口
吉田口

嶽が手に取るやうに見える。この間に、松田で下りると、一里ばかり南西に當つて、最乗寺がある。有名な道了権現のあるところである。此處は流行佛で、賽者の多いばかりでなく、山も深く、境も静かで、是非一度は行つて見なければならぬところである。あながち、富士登山の折でなくとも好い。小田原からも行ける。だから、何かの次手にちよつと寄つて見るが好い。

山北から先のトンネルは、溪流に添つて折曲つてゐる感じが好い。駿河驛の前にある富士製絲會社の大きな規模も、旅客の目を刮せしむるに足りる。で、少し行くと、富士が見えて、やがて汽車は御殿場に着く。

御殿場から見た富士は、見事なものである。こゝから裾野を通つて三島まで下りる間の汽車の窓は、殆ど富士と愛鷹との姿で塗られたやうな形になつてゐるが、私の経験では、こゝあたりが一番富士のすぐれた容姿であらうと思ふ。冬の雪の一面に積つてゐる時分は殊に好い。

御殿場の停車場は、夏は登山客で一杯になつてゐる。驛前には富士屋支店、住吉屋、松屋、御殿場館などの旅館がある。こゝから瀧川村を通つて、二里行くと、馬返、それ

から少し行つて太郎坊、そこで金剛杖を買つたり、強力を雇つたりする。こゝまでの馬車賃は六十錢位である。強力を雇ふとすると、一人一圓三十五錢、別に賄賃を要しない。で一合、二合と登つて行く。五合目あたりまでは森林帯であるが、それを上りきると、眼界が遠く開けて、足柄、箱根の連山を脚下に見るやうになる。河口湖、山中湖も盆景のやうになつて見える。一合目毎に、石室があつて、そこで物を賣つたり登山者を泊めたりする。で、六合、七合と段々険しくなつて、遂に胸突八町を経て、頂上に達する。この胸突八町あたりは登山者の最も困難を感じるところで、一歩行つてはやすみ、二歩行つてはやすむといふ風である。それに、空氣が稀薄になつてゐるので、何處となく人の顔が黄く見える。登り切ると、奥の宮がある。左に都良香の富士山記の碑がある。社の後の舊噴火口を、直徑十三町、これを廻るのを内輪めぐり又は外輪めぐりといふ。御ヶ峯に達するのは、前の記念碑の南から、三島社を左に見て登つて行くのである。御ヶ峯の頂上には、野中至氏の測候所がある。雷岩から白山嶽に登り、釋迦の割石を見、東に出ると、久須志嶽がある。そこが吉田、須走兩口の絶頂になつてゐる。久須志神社がある。伊豆ヶ嶽成就ヶ嶽などを廻り、地上にところどころ噴煙の出るところを通つて、東



本栖湖の富士

賽の河原から、銀明水の湧き出すところへと出て行く。それから八ツ子の梯子を登つて駒ヶ嶽から大石俵石などを見て下る。この間五十町ある。内輪めぐりは、外輪めぐりと同じ道を劔ヶ峯に出て、そこから下りて、噴火口の岸の平地、西賽の河原に出て、馬の背山を左に見、白山ヶ嶽の麓、金明水から噴火口に沿つて、岩石の間を行くのである。この間約三十町ほどある。

この外、中道めぐりといふものがある。それは六合目の中腹を一周するので、寶永山、崩れ穴、牡丹畑、鬼ヶ澤、天の浮橋、冠石、姥ヶ嶽、大澤、大澤の石瀧、佛石澤、小嶽等の勝がある。しかし、大抵の旅客は登山だけで済まして、この中道めぐりなどは、減多にやつて見るものはない。

總て、吉田口から行つても、須走口を登つても、大宮口を登つても、皆な同じ形である。矢張同じやうな太郎坊があり、馬返があり、石室があり、奥宮がある。私は吉田口から登つて大宮口に下つたが、途中、森林帯の中で日が暮れて、何うすることも出来ないうで非常に弱つたことがある。兎に角、富士登山は、矢張あまり冒険をせずに、一夜石室に泊つて朝日を拜むやうにする方が好い。上りは人に由つて、半日乃至一日かゝるが、下りは早く、三時間あれば十分に下りて来られる。

『のほらぬ馬鹿、二度のほる馬鹿』といふ諺がある通り、富士は一度は是非登つて見なければならぬ。しかし、登山といふ興味他には、別に面白いこともない。昔、交通の不便な時代にあつては、富士に登るといふこと以外に、長い間を旅して行くことに興味を持つたものだが、今はさういふ興味はすっかり滅殺されて了つた。

吉田口から登らうとする人は、東京の飯田町から、中央線に乗つて、甲州大月まで行つて、そこで汽車を下りる。それから吉田までは馬車鐵道がある。この間に、十日市場の瀧などの勝がある。吉田は火祭を以て昔からきこえてゐるところである。こゝから御殿場までも、鐵道馬車がある。吉田口の方から登ると、胎内くゞりなどといふところがあ

る。登山の始期は、七月二十日頃から八月末頃まで、九月に入つては、颯風期に入るから、山が荒れて危険が多い。

裾野めぐりは、富士行者の所謂八湖めぐりで、これもまた興味が多い。むしろ登山そのものよりも興味があるかも知れない位である。それをするには、御殿場から吉田まで、鐵道馬車に乗る。賃金七十錢。須走から籠坂峠までは、爪先上の坂路で、峠を登り盡すと、山中湖が銀盤のやうになつて見える。八湖の中で、これが最も富士に近い湖水である。そこを過ぎて吉田に行く。吉田口は富士牧狩の時、高山重忠の假屋に用ゐた遺材で建築した建久館といふ古亭がある。

こゝから船津へ行く。この間一里。河口湖畔の一邑で、風光頗る明媚である。湖は杏の形をしてゐて、湖の中で最も大きい。御坂峠は北に、三つ峠は東に、十二嶽は西に三面から湖を壓してゐる此方、富士がひとり高く聳えてゐる形は、いかにも雄大であり壯絶である。

長濱から鳥坂峠を越えて、西湖に行く。一景去つて一景來るといふ概がある。湖畔に西湖村がある。正面に富士の清容を仰いで何とも言はれない。この湖水は、形は藥研

に似てゐると言はれてゐる。

こゝを出て、根場といふところを過ぎる。十町ほどで、青木ヶ原に入る。全く深い深い森林の中である。一鳥啼かず一葉動かずといふやう幽絶凄絶の森林である。この間が一里半位ある。やがて路は二つに分かれる。右すれば精進湖に行き、左すれば、本栖湖に行くやうになつてゐる。

精進湖は瓢の形を成してゐる。八湖の中では、水が最も浅いといふことである。女坂峠を後に、青木ヶ原を前にして、富士を望んだ形は、他に比すべきものもないやうな氣がする。冬は、一面に氷つて、スケートをするのに非常に好いといふことである。斷崖の湖邊に突出したところに、歸化人星野氏の精進ホテルの洋館がある。

で、こゝを去つて、青木ヶ原を出て、甲州街道を通つて本栖湖の方へと志す。本栖湖は鮫鱈の形をしてゐると言はれてゐる。こゝも中々景色が好い。

で、こゝから甲州街道を通つて、牧野ヶ原を過ぎると、やがて甲斐の境である割石峠へと路はかゝつて行く。そしてこれを越えようと、路は下り坂になつて、丁度、富士の西麓を南に出て行くといふやうな形になる。で、根原から富士の人穴を見て、上井出村に、



富士川

例の白糸の瀧や、祐經の墓や、頼朝の假屋のあ
となどを見て大宮の方へと出て来る、上井出か
ら大宮まで馬車鐵道賃錢二十二錢、大宮から東
海道の富士驛まで富士身延鐵道、賃錢十八錢で
ある。

白糸の瀧は、境はさう大して幽邃ではないが、
ちよつと形が面白い。それに、山の中でなく、
田疇の間にあるといふやうなものも面白い。大宮
町はちよつと賑やかなところである。富士淺間
神社がある。

富士に登つた次手とか、八湖めぐりをした次
手とかには、旅客は大抵駿河の海岸に行つて見
るものが多い。興津とか三保とか龍華寺とかに
出かけて行く。そして海岸の靜かな宿で一日の

富士川くだ

身延

七面山

勞を醫すやうにする。さういふ人は、『駿河の海岸』の條を併せて見るが好い。

それから、富士登山に連關して、富士川くだりのことを少し此處に言つて見たい。富
士川の早船は、中央線が出来ない中は、甲州から都會に出て来る唯一の交通路となつて
ゐたのであつたが、今はすつかり衰へて、昔のやうな河船の上下する賑かなさまは見
ことは出来なくなつて了つた。しかし富士川の激湍は是非一度は下つて見る必要がある
だ。それには、中央線で甲府まで行き、そこから鐵道馬車で、鵜澤に行き、そこで川船
に乗る。川は急湍激流で、船は矢の如く萬山の中を下つて行く。切石あたりまでは殊に
好い。もし暇があつたら、波木井から日蓮宗の本山身延に行つて見るのも好い。身延は
大きな寺である。そして七面山の奥まで行つて、其處で一泊泊つて、翌日、南部といふ
ところに出て、河船をつゞける。そしてその日の午後には岩淵へと出て來られる。八湖
めぐりと共に富士登山者の是非やつて見なければならぬ行程である。

六 伊豆半島

六四

- ▲三島 まで東京から八二哩七鎖、三等賃金一圓二十五錢、三島大仁間一二哩十二錢、三島まで四時間半、三島から大仁まで一時間足らず。
- ▲大仁 から修善寺まで馬車、二十錢位。
- ▲湯ヶ島 まで大仁から五里、馬車、この馬車は天城を越して下田まで行く。
- ▲修善寺 伊東間、山路五里。
- ▲東京下田 間の汽船、一圓六十錢、汽船諸港に寄港す。
- ▲下田沼津 間の汽船は、沼津を午前九時と十二時とに、下田を午前五時に午後九時に出帆する。この間十時間乃至十二時間。伊豆西海岸諸港に寄港す。

伊豆半島

東京近くで、面白い旅らしい旅をしようと思ふのには、伊豆半島などは、最も理想的

であると言はなければならぬ。温泉がある。山水がある。海がある。土地に變化がある。そのかはり少し歩いたり何かしなければならぬけれど——車や自動車で樂に行けるやうな旅とはいくらか違ふけれど、兎に角、行つて見て面白いところである。

そこに行くには、東海道線の汽車を三島で下りる。そして駿豆電氣の電車に乗替へる。こゝまで東京から約七時間ほどかゝる。三島には、例の三島明神の古社があるばかりで、他にこれと言つて見るやうなものもない。

三島から終點の大仁驛までは、十二哩ほどある。時間は一時間足らず、賃金は二十二錢である。この間は、伊豆では昔から開けたところで、國府などのあともあれば、頼朝の謫せられた遺址などもある。蛭ヶ小島なども、何でもこの沿線の近くにあるのである。それに、狩野川の流域に當つてゐるので、土地が自づから豊饒で、感じが好い。原木、北條、南條などといふ小さな停車場がある。江川太郎左衛門できこえた菰山の町はこの線路の左の丘陵の裾のところにくつ、いたやうになつて見えてゐる。例の名高い反射爐が不思議なやうな形をして立つてゐるのなども車窓から指さされる。やがて電車は山の翠微にと向つて入つて行く。狩野川が次第に溪流の趣を呈して来る。山は一步一步深く

國府地

蛭ヶ小島

菰山町

反射爐

狩野川の谷

伊豆半島

六五



修善寺温泉

なつて行く。

やがて大仁驛に達する。

こ、から修善寺に行く馬車も車もある。狩野川の橋を渡つて、少し行つて、下田街道を右折れて、桂川に添つて、一里ほど谷の中に入ると、修善寺の温泉がある。ちよつとしたところで、桂川を挟んで、兩岸に旅館が参差として竝んでゐる。頼家の殺されたところ、範頼の自殺したところとして、歴史にもよく知られてゐるところである。温泉は弘法大師が発見したと傳へられてゐる。胃腸には殊によく利く名泉で、浴客は常に遠くから群を成して集つて来る。桂川に架けた橋は、虎溪橋渡月橋の二つで、これで兩岸の人々が相往來する。獨鈷の湯と言ふのがあ

る。川の中から湧き出して、其處に浴槽がつくられてある。旅館には、養氣館、野田屋、浅羽樓、疑雨來館、大川、菊屋などがある。宿料は高いのも廉いものもある。七八十錢乃至一圓五十錢位で一日暮らせる。

こ、で見物するところは、修善寺と、頼家の墓と、範頼の墓と、先づその位のものだ。修善寺には、北條早雲の手箱、豊太閤の手紙などがある。頼家の墓は川の南岸に、範頼の墓は川の北岸にある。

こ、から天城の方へ行かうとするには、馬車でも車でもある。伴れのある旅ならば、馬車の方が得だ。で、前の下田街道までもどつて、大平といふ處に出る。その山の中に旭湖がある。かなり大きな湖で、ことに朝日に映するさまが奇觀だといふことである。この附近に、古奈、船原、嵯峨澤などといふ温泉がある。いづれも旅館が一軒か二軒ある。こ、から、松瀬、春羽根などといふところを通る。天城の山翠が衣を襲つて、いかにも心持が好い。それに、天城火山群は、想像してみたよりも規模が大きい。且つ有名な國有林があるだけに、檜の林相が見事だ。湯ヶ島近くなると、いかにも山林といふやう

な気がして来る。

湯ヶ島は風景に富んでゐる温泉場である。釣橋のあるあたりは、殊に人目を惹くに足りる。そこにある旅館は、落合楼と言つて、檜の大樹を隔て、水聲が屋を撼すやうにきこえる。その他、この下流に、もう一軒旅館がある。避暑には、共に持つて来いと言ふやうな好いところだ。

しかし湯はや、温い。それに、湧出する分量も少い。設備もさう行届いてはゐない。田舎の温泉場と言ふ気がする。

こゝまでは、旅客はよくやつて来るが、これから先へは、滅多に行かない。それといふのも交通が不便であるからである。しかし思切つてもう少し先に行つて見る必要がある。何故と言へば、天城の大谷はこれからその壯觀を惜しけもなく其前に展開して来るからである。

天城の谷は實際見事だ。これほどの大きな谷は、さう澤山日本にもあるとは思はれない。私の知つてゐる處では、これに匹敵するのは、草津峠、加久藤越位のものである。しかし、これを越えるのにはさう大した難義をしななくてもすむ。そこには馬車も車も通

する。

この峠が確か六里位ある。それを下ると、湯ヶ野の温泉場がある。田舎の温泉場だが、しかし感じは好い。それに、氣候が暖かい。冬など、天城の此方と彼方とでは、大變な違ひである。此方でまだ花が咲かないのに、彼方では菜の花などが盛りである。野椿なども非常に多い。

湯ヶ野から河津の谷に入る。例の河津三郎のゐるところである。此處にも温泉がある。密柑畑などが到る處にある。その暖かいのんきな町と、町に添つた川とを眺めながら、長い坂を上つて行くと、向ふに、海が展けて、大島がはつきりと見える。島の根に打寄せる波が白く見える。何とも言はれない好い眺望であつたのを私を覚えてゐる。

こゝから下田までは五里か六里だ。下田は思つたより好い處だつた。衰へてゐる昔の港の気分が何とも言はれない好い感じを私に與へた。私は其處に二日ゐた。

近所に蓮台寺温泉といふのがある。下田から人が皆な行つて遊ぶところである。雑沓してゐてそこはあまり面白くない。そこに行つて泊つて、隣の室なんかで騒がれるよりも、却つて下田の古風な旅館の一間で靜かに寝る方が好い。

下田からは、伊豆の東海岸と西海岸とを航行する汽船が毎日一度づつ、出る。これに乗れば、何處でも好きなところへ行かれる。伊東へも行かれ、沼津へも行かれる。しかし、此處まで来た旅客は、更に思切つて石廊岬あたりまで行つて見る方が好い。そこに行くには、松崎行の馬車で、手石まで行く。此間の馬車賃は三十錢位だ。途中から海が見えて、景色が好い。御子元島の白い燈臺は繪のやうである。

手石には、例の橋南谿の書いた彌陀窟がある。頼めば、僅かな金で、村から船を出して呉れる。しかし、風があつたり、波が荒かつたりする時は、危険だからよす方が好い。手石から長津呂までは、是非歩かなくてはならない。此間が二里ほどある。しかし、到る處海に面してゐて、伊豆の七島を手取るやうに見るので、決して退屈はしない。ある漁村では、私達は、あまりに風景の好いのに恍惚として、殆んど歩くのすら忘れて了つた位であつた。

長津呂は、西海岸航行の汽船の寄港地である。ちよつとした漁村だ。こゝから石廊岬の鼻までは三十町位あるが、其處には是非行つて見なければならぬ。すべて絶海のほとりにある岬端といふものは、景色の好いものだが、こゝはまた格別だ。日本で、私

の知つてゐる岬では、此處と志磨の安乗と、日向の鶴戸と、出雲の日御崎とを感心してゐる。そして中でも、此處はすぐれた方に屬してゐると私は思つてゐる。この他、津輕の龍飛岬が好いさうだが、私はまだ知らない。

此處から山越しに、松崎の方に出て行く路もあるが、それよりも、長津呂から、汽船で松崎の方まで行くが好い。松崎がまたおもしろいところだ。丁度、伊豆の西海岸の咽喉を成してゐるやうな形で、かなり賑やかな趣を呈してゐる。

松崎から土肥を経て、戸田に來る間は、すべて半は斷崖、半は海で、概して路はわろいが景色は好い。富士がいつもその前景を成してゐる。遠江の御前岬の鼻も遠く見わたされてゐる。土肥あたりは殊に好い。

戸田は日本最初の造船術の開けたところで、外國の船が曾て此處に難船して、そして更に船を此處で造つて、そして歸つて行つたところである。當時韮山あたりにゐたハイカラ連が山越しに、その造船術を見によく出かけて行つたといふことであつた。今は、夏は大學生の游泳所になつてゐて、多くの大學生が入り込んで來るところになつた。ここから靜浦にかけては、富士は殊によくすぐれて見える。戸田から山越しに、修善寺の

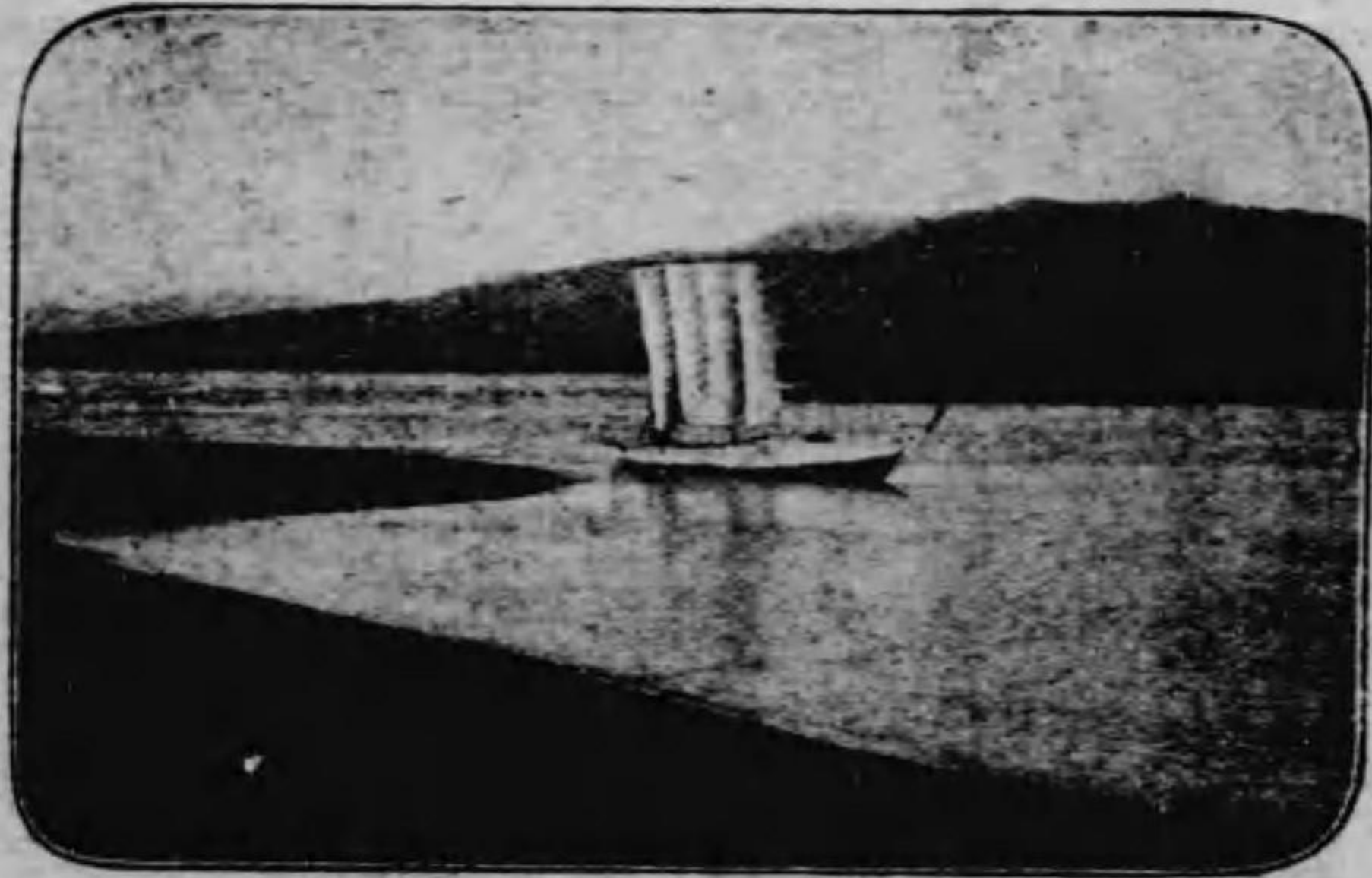
方へ出て行く路もある。

七 駿河の海岸

- ▲沼津 まで東京から八五哩九、貨金一圓二十九銭。
- ▲興津 まで同一圓六十銭。
- ▲沼津 三保まで、海上一里、船で行けば往復一圓内外、江尻からは車で一里半。
- ▲静岡 清水間の軌道は貨金三銭で各四十分毎に發車。江尻、龍華寺、久能山、すべてこの軌道を利用するに至極便利である。
- ▲久能山 へは江尻から二里、車がある。
- ▲龍華寺 へは江尻より一里十町、三保から三十町。

駿河の海岸

日本の新三景の候補地



駿河の海岸

沼津の富士

駿河の海岸は、東京からはや、遠いけれども、人はよく出かけて行く。富士登山の歸りとか、修善寺に行つた歸りとか、でなければ正月休みか暑中休暇に一週間ほど行つて遊んで來やうなどと言つて、人は出かけて來るのである。

駿河の海岸は、富士山の海岸だと言つても差支ないほどそれほど富士に縁が近い。晴れたと言つては富士、曇つたと言つては富士。富士がいつでもついで廻つてゐる。中には、好夢に、何處から見た富士が好いとかわらぬと言つてそれをあちこちと見て廻つてゐる人などもある。

日本の新三景を選ぶ場合には、屹度この海岸がその一に入るほどそれほどこのあたりの風景はすぐれてゐるのである。實際、明るい感じの好い處だ。の

蒲原あたり

沼津

千本松原

我入道

牛臥

静浦

松蔭寺

んきに其處から此處へと遊び廻つて歩くには持つて来いといふところだ。私の考では、富士山のあるのがよしわるしで、そのためあたりの風景が變化を缺いてゐるとは思ふが、しかし、蒲原あたりを汽車が通つて行く時には、『好い景色だなア』と思はず叫ばずには居られない。

この海岸をめぐらうとするには、先づ沼津で汽車を下りる。そして沼津の町へと志して行く。沼津と三島の間には、電車の便がある。で、一番先に、千本松原に行く。西南十三町、車なら十二三錢である。東海道時分から名高いところだけあつて松の形も面白ければ、松の間から見た富士の形も好い。海ものんびりしてゐる。こゝから引返して、南に行く、御用邸がある。猶少し行くと、我入道、牛臥の二海水浴場がある。共に設備がよく整つてゐて、そして割合に静かだ。一晩、静かに浪の音を聞くのも亦可なりである。それから少し先に行つて、静浦にも海水浴場がある。其處から見た富士は、愛鷹との對照上特にすぐれてゐると言はれてゐる。

沼津からは、伊豆西海岸を船行する汽船が毎日二回づつ、出る。東海道線の原驛から下ると、其處に白隠禪師の死んだ松蔭寺がある。その附近一面に

鈴川から見た富士

淨瑠璃姫の墓、
蒲原峠の茶亭

蒲原附近

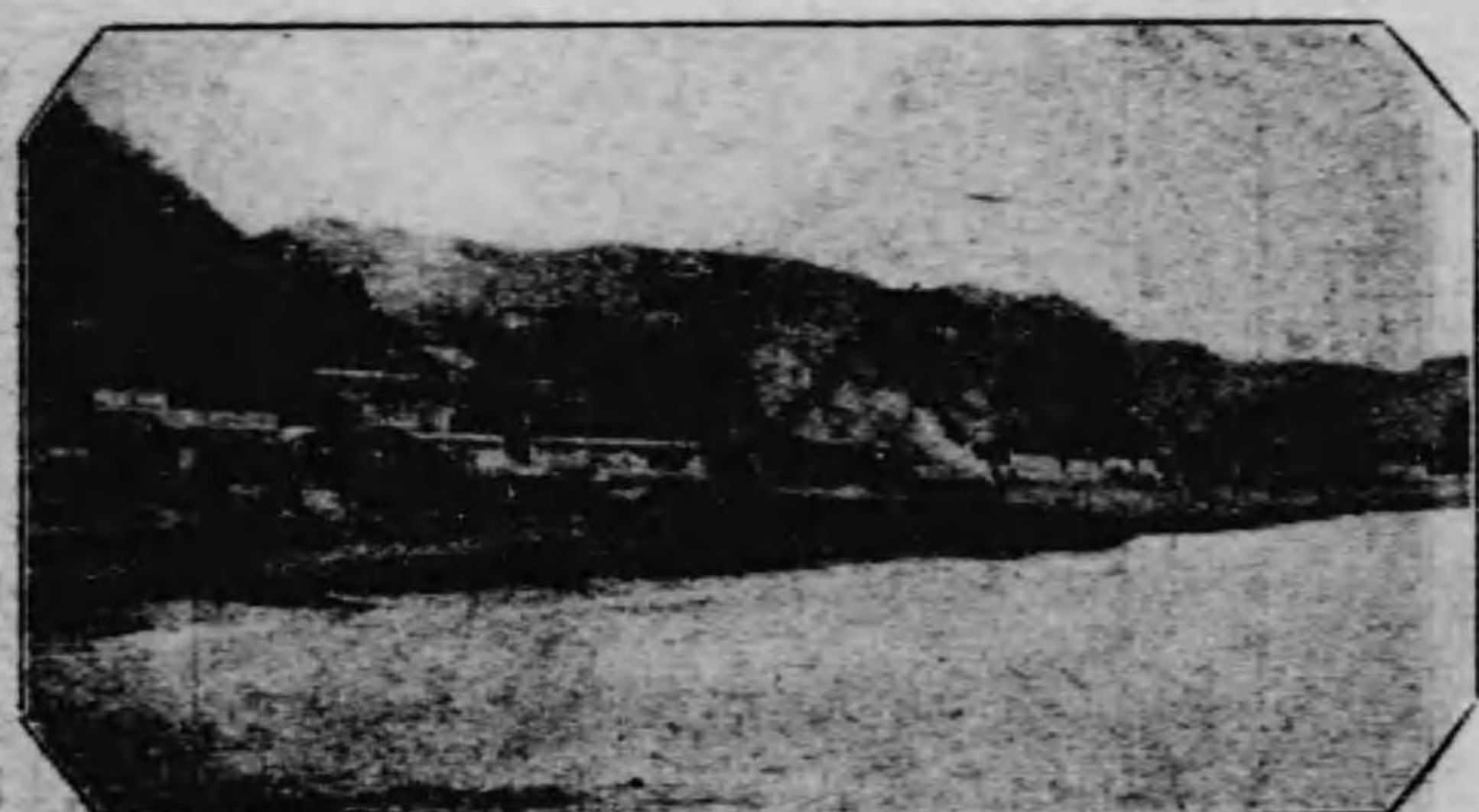
浮島ヶ原は、例の富士川の戦争の時の古戦場である。鈴川驛から吉原に行くところの橋の上も、富士眺望の一好地點として、人口に膾炙してゐる。富士驛からは、身延鐵道線が西北にわかれて行つてゐる。大宮町の方へ行く人は此處で乗替へる。で、富士川をわたつて、岩淵の停車場へと着く。この停車場から見た富士も亦捨て難い一つである。その次ぎは、蒲原驛、その町に牛若丸を慕つて此處で悶死した淨瑠璃姫の墓がある。蒲原からは、汽車は全く海濱に添つて走つて行く、東海道を往くと、例の薩陀の險が其處に横つてゐるのであつて、その峠の上の茶亭は、蜀山人が『山の神さつた峠の風景は三行半に書きも書きせじ』と歌つたところで、東海道を往く旅客は、富士を望むのに、此處を第一のところとした。その下を今は汽車がトンネルを穿つてそして通つて行つて了ふのである。

であるから、今では、蒲原の停車場からトンネルにかゝるまでの間が、實に何とも言はずに好い。富士は無論のこと、伊豆半島が長く海中に突出して、右に僅かに三保松原を望んださまは、實際一幅のパノラマと言つても過言ではない。しかし、ゆつくりそれを見でゐる隙もなく、汽車はトンネルの中に入つて行つて了ふのである。



清見寺

七六
 薩陀峠の望嶽亭までは、興津の停車場から僅かに二十町である。
 興津の停車場から清見瀨の海岸までは七八町に過ぎない。そこには東海ホテル、一望樓、身延屋、佐野屋などといふのがある。六七十銭から一圓位の宿泊料である。この他民家でいくらでも間借が出来る。一月五圓位からあるといふことである。清見寺は、東海線の汽車の窓から右に見えるが、寺の門のあるところが、元の清見ヶ關のあつた跡だといふことである。境内は閑静で、寺院も立派だ。書院の庭には虎石、龜石、牛石などといふ奇石がある。境内からは、清見瀨から三保にかけての眺望がよく開けてる。



興津海岸

三七
 三保に行くには、興津からでも好いが、江尻まで行つて、又別の汽車で清水まで行つて其處から行くのも好い。清水は江尻から十町、海水浴場などがあつて好いところだ。それに此處は海軍の要港で、軍艦はをり／＼来ては碇泊する。この清水の町から南に一里ほど突出したのが三保の松原で、松は昔のやうではないが、それでもまだ一佳景たるを失はない。東海の小天橋と言つた趣がある。そしてその中に三保神社、羽衣の松などがある。
 清水に戻つて西へ行くと、一里ほどで龍華寺に行くことが出来る。此間には馬車も車もある。寺は山の中腹に位して、旅客は先づその有名な大きな蘇鐵を見る。中腹の平地に上ると、富山が實によく見える。薩陀から見た富士は、三保の長い砂洲がその風

景の中に入つてゐないが、此處から見ると、三保も薩陀も田子の浦も皆な一眸の中に集つて、成ほど富士の大觀を集めたといふ概がある。



久能山

こゝに、高山樗牛の墓がある。例の『吾人は須く現代を超越せざるべからず』といふ句が墓石に刻まれてある。
久能山は、駿河の海岸では、や、偏して居るが、清水まで来た次手に、出かけて行つて見るのが順路である。しかし、静岡から出直

して行く路もある。

清水と久能山との間は、二里ほどあるが、車で行けばわけはない。行つて見ると、成



駿河の海岸

江尻海浴

ほど家康がその墳墓の地と定めたとところだ
けあると思はせるやうなところである。前
は遠州灘で、東北は駿河灣である。山には
樹が多く、東照宮の壯殿も中々宏壯をきは
めてゐる。旅館には石橋、豆腐屋、石垣屋
など、いふのがある。宿賃は安い。
こゝから静岡に行くのが路順である。
静岡はちよつと感の好い都會である。
縣廳のある町には、一種の氣風があつてイ
ヤなものだが、此處には割合にさういふ氣
風に乏しい。何處が商賈などにも富有なお
つとりしたところがある。市で、一番先に
見るべきものは、先づ例の賤機山の下にあ
る浅間神社である。かねてきこえてゐる建

築だけあつて、社殿が中々立派だ。それに、境内が今は公園になつてゐて、櫻が多く栽ゑられてある。花時は遊客が雑沓する。この東北二三町のところに、今川義元の創建した臨濟寺がある。そしてその近所が義元のた城の址である。その他、家康の側室寶台院を葬つた寺などがある。

猶、この近所に、細く見れば、宗長の庵室のあつた吐月峯だの、風の森だのがある。そして東海道をつたつて歩いて行くと、宇都の山、宇都谷峠、などといふところへとかゝつて行くのである。

東海道の線路はや、左に偏つて、用宗、焼津、藤枝、島田を通つて、例の大井川を渡つてゐる。焼津の海岸もまた捨て難い。小泉八雲が駿河の海岸中、特にこれを好んだのも尤もだと思はれる。藤枝の在の志太には、湧す鑛泉があつて、ちよつと田舎めいた好いところである。

八 濱松、豊橋、名古屋間

▲秋葉 へは袋井で下りる。八里以上を馬車と車で行かなければならない。

▲舞阪 まで東京から一七三哩四、三等賃金二圓二十一錢。

▲濱名湖巡遊汽船、舞阪から引佐細江の方にも行くし、氣賀の方にも行く。至極便利だ。湖水を見るには、和船なれば、一圓五十錢位。

▲豊橋 まで一八九哩七、三等賃金二圓三十八錢。

▲豊川 稻荷へ東京から二圓四十八錢、普通時間九時乃至十時間。風來寺山へは、豊川鐵道の終點を長巻驛から三里に近い。

▲伊勢参宮の近道 は、蒲郡驛から鳥羽蒲郡間の汽船が出る。出帆は正午十二時、船は伊勢丸、向ふの二見驛、鳥羽驛と此方の蒲郡驛と連絡して、時方連絡切符を發賣する。途中、福江、龜崎の兩港では、知多、衣ヶ浦行の汽船と接続するやうになつてゐる。三等賃金二、から二見浦まで八十錢、時間は、正午に出で、夕方の五時二十五分に着く。波もさう大して荒くない。

▲岡崎 を出て、西尾町を通つて、吉良新田に行く汽車が出来、西尾、港前間の

汽車が出来た。

▲知多半島 熱海の神宮前から半島の常滑に行く電車も便利だ。時間、一時間十分、賃金は四十一銭、神宮前大野間は三十分毎に、神宮常滑間は一時間毎に発車する。

遠江の諸勝

東海道線の汽車で行くと、駿河から遠江、三河、尾張——この間は、大抵の旅客は素通をして下ふものが多い。この間にも細かく見れば、是非立寄つて見なければならぬところは澤山にあるのだが、東京からそこだけを目的にして遊びに行くには少し遠すぎるし、さうかと言つて、京都とか伊勢とかを目ざして行つた旅客は、先のみ急がれて、其處はまあ後にしやうとか、歸りにしやうとかといふことになる。現に私などでも、舞阪に一夜泊つて見たいと思ひながら、いつでも素通りして下ふ一人である。しかし單獨に考へて見て、この間は實際さうすぐれた好いところはない。遠江などは、ことに何にもない。先づ秋葉山が行つて見るべきところである位なものだ。

菊川の里

だから、汽車に乗つてても退屈するやうなところだ。大井川を渡つて、金谷近所には、それでも二三の見るべきところがある。例の東海道の小夜の中山だの、無間の鐘だの、菊川の里だの、あるところである。中でも俊基朝臣の東下りの歌に見えた菊川の里は、行つて見たいやうなところである。

秋葉山

秋葉山に行くには、普通袋井驛で下車して、三十町ほど行つて、土地に名高い可睡齋三尺坊に詣で、それから森町まで三里は馬車、それから五里半で阪下に出て、そこから絶頂まで五十町、其處に有名な秋葉神社の社殿があるのである。境内からは遠州灘や濱名湖などが一目に見えて、景色が好いといふことである。

山住神社

この秋葉山から更に奥に、山住神社といふのがある。例の京丸村附近で、深山の奥の奥である。例の大きな牡丹の花が咲いて散つて、流れ落ちて、それで、その奥に人が住んでゐるのを知つたといふやうな傳説のあるところである。

遠江といふ國は、半ば平蕪で、半ば深い深い山嶽である。つまり日本でも屈指の高山の赤石山脈がその北を劃つてゐるのである。その躰遠州灘の海岸は、平滑な砂濱で、何にも見るに足りるやうなものはない。

天龍川

三方ヶ原

舞阪海水浴

で、天龍川に到つて、旅客は始めて退屈の眼を蘇がへさせられる。そして、それを渡ると、もうやがて濱松の町だ。町には城址がある。城内には東照宮がある。秋葉山參詣の本道は、實は此處を起點にしてゐるので、町のはづれにその一の華表がある、此處に來ると、誰でも三方ヶ原の戦を思ひ出す。家康は敗けて濱松の城に引返したが、城門を開けて置いたので、敵が怪んで入つて來なかつたなどといふことが思ひ出される。今もひろい原になつてゐる。

舞阪は好いところだ。汽車で素通りしても一夜泊つて行きたくなるやうなところである。松の形も面白いし、湖水のさまも好い。濱名湖を往來する白いペンキ塗の汽船などを見ると、何となく旅情がそゝられる。舞阪で、汽車を下りると、海水浴場のある辨天島はもうすぐだ。そこには、小松屋、茗荷屋、開春樓、松月、中村などといふ旅館がある。宿料は先づ一圓内外である、逗留して見ると、割合に見るところが少なくて、退屈するやうなところださうだが、それでも釣魚打網の興は容易に盡きない。肴もかなりある。此處等あたりに來ると、女中などにも、もう名古屋以西のものが多くなつてゐて、東京辯を聞くことが妙い。

濱名湖

鷺津海水浴

井伊谷神社



濱名湖

濱名湖、鷺津、名古屋

濱名湖の勝は、仔細に探ると、中々容易に盡きない。しかし、所謂十二景を探れば、あらまし見たと云はれる。それには、辨天島で船を雇つて、酒でも載せて、ゆる／＼湖中を巡遊するが好い。船賃は二圓も出すつもりなれば十分である。

鷺津にも、海水浴場がある。その附近には、例の東海道を西から來て初めて富士の清容に對するといふ名高い汐見阪の觀音がある。對岸の氣賀あたりにも行つて見るが好い。引佐細江あたりは、殊に、濱名湖のすぐれた氣分をあらはしたところであるから、これも見落してはならない。それから、その北一里、井伊谷村に、南部の皇子宗良親王を祀つた井伊谷神社がある。

親王はさまざまの辛艱を嘗めさせられた後、遂にこの邊陲の地に薨去あらせられたので、社の後に今、その陵墓が残つてゐる。

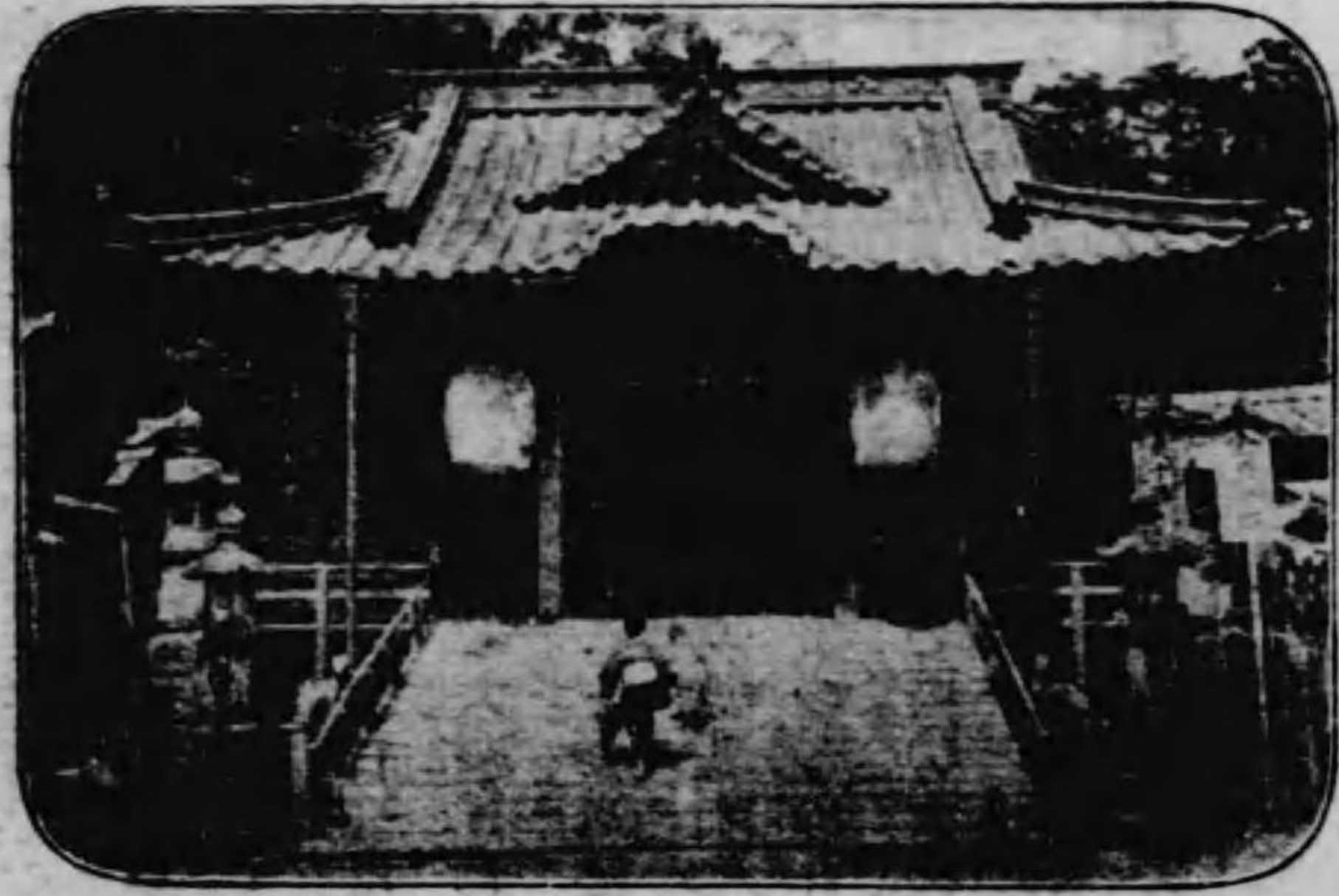
その西一里に、奥山半僧坊がある。半僧坊の本来本元である。寺號を廣寺と言つて宗良親王の御同胞滿良親王の開基であるのは面白い。

昔は濱松から此處を通つて豐橋に出て行く路は、姫街道と言つて、東海道の裏街道を成してゐたのである。そして氣賀と新井とに關所が置かれてあつたのである。

で、辨天島から長い鐵橋をわたつて、鷺津の方へと行く。これから豐橋に行く間には、二川の窟觀音を除いては、他に見るものはない。しかも、その觀音は、汽車の窓からでも、それと指點して通つて行くことが出来る。

豐橋は、一面兵舎町のやうなところがある。別にこれと言つて見るやうなところもない。第十五師團司令部が其處にある。城址は停車場から十町、その附近に吉田神社がある。しかし、この町から豐川鐵道の一線が北にわかれて行つてゐることは、注意しなければならぬ。

豐川鐵道は、少くとも豐川稻荷のために出來たやうな形がある。今は、この汽車はず



豐川稻荷

つと延びて、鳳來寺山の手前の長篠あたりまで行つてゐるが、長い間、豐川を一時の終點にしてゐたものであつた。豐川稻荷は、豐橋から二里、豐川鐵道の豐川驛から二三町で、その宏壯な寺堂と雑沓した賽客とは、確かに人を驚かすに足りる。東京から一汽車ごとに送る賽客だけでも、かなりの數に達してゐる。ことに、花柳界の女達は、御利益があると言つて、よくこれを信仰する。

この支線で行くと、武田織田兩氏の古戰場長篠を経て、三河第一の名刹鳳來寺に達することが出来る。長篠附近の溪流も中々見事だ。鳳來寺山は、遠江の秋葉に並んだ流行佛で、賽者は常に絶えない。本堂なども頗る立派である。

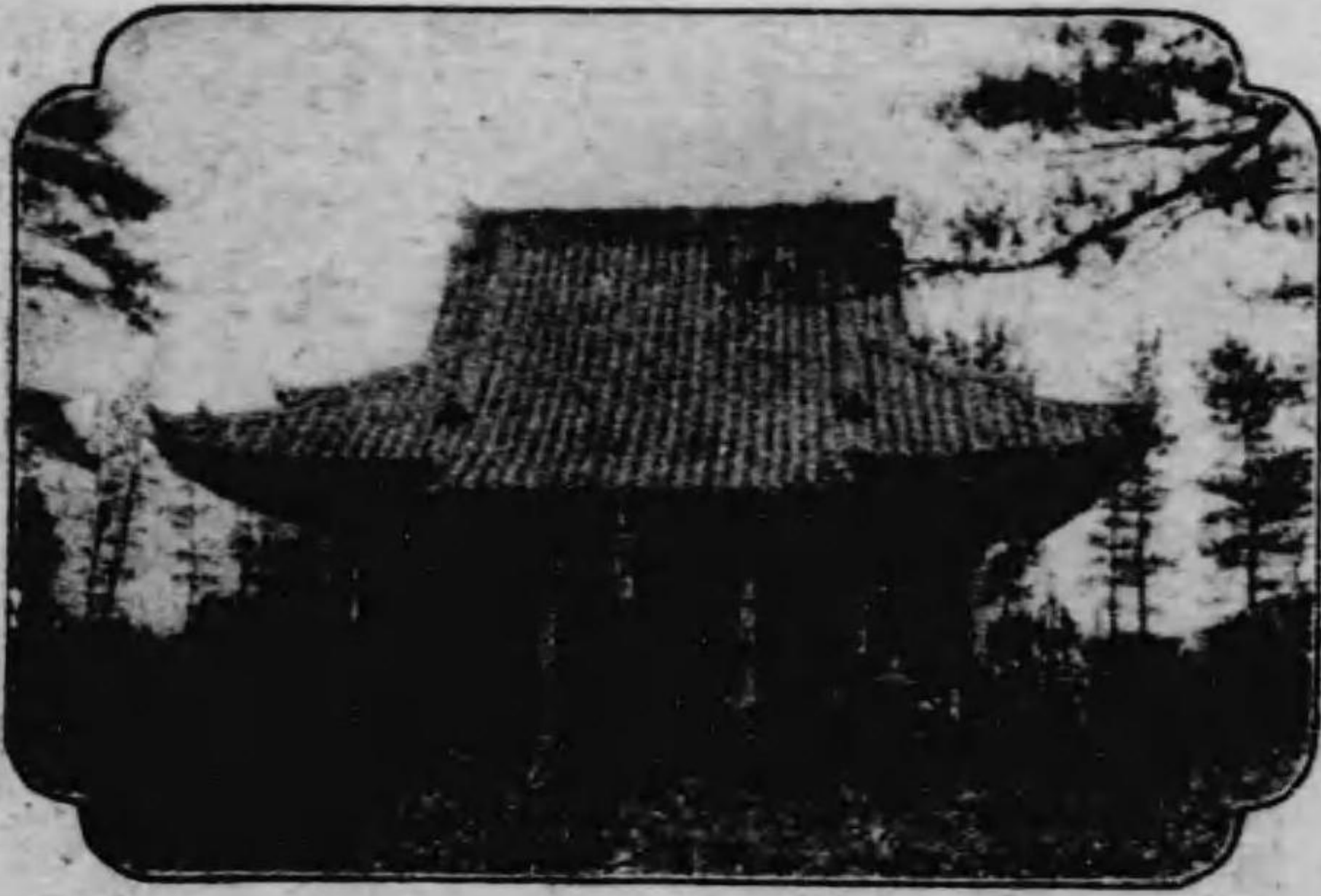
豐橋から東海道線を西に行くと、名古屋までの

間て、旅客の目を刮するものは、蒲郡海水浴場のある衣ヶ浦の晴渡である。海を隔て、向ふに見えるのは、渥美半島で、その突端が伊良湖岬である。島のた、すまひや、山の連亘や、空気の加減や、汽車の窓から見ても、眼を離されないやうなところである。この衣ヶ浦を、蒲郡から出發して、島、師崎などに寄港して、伊勢の神社港から二見、鳥羽の方へ行く汽船が、毎日一度午前に出る。伊勢詣の近路とも言ふべきもので、船の嫌ひでない人は、汽車で大廻りして行くよりも餘程面白い。それに、この汽船の甲板の上は、他には澤山見ることが出来ないほど景色が好い。この航路中、福江で下りて、二里歩いて、伊良湖岬の鼻まで行つて見るのも面白ければ、篠島に上陸して、後村上天皇の漂流された跡を偲びまつるのも興味がある。師崎から伊良湖の鼻に、汽船がか、つて行くあたりは、殊に海と山の大觀を盡してゐると言つても誣言ではない。

蒲郡の海水浴は、一夜是非旅客の泊つて見なければならぬ處である。行つて見ると、汽車の窓から見たほどのことはないが、それでも、舞阪などよりも趣がある。

これから少し行つて、岡崎町には行つて見る價値がある。徳川家康の出身地だけあつて、感じが何處かおつとりしてゐる。女などにも特色がある。停車場から電車があつて、

八八



大 御 堂 寺

七錢で町の入口まで行ける。城址は今、公園になつてゐる、徳川家康の産湯の井などがある。その傍に東照宮もある。その他、大樹寺、是字寺、瀧山寺、大林寺、伊賀八幡など見るところが多い。城址の外にある矢矧橋などもおもしろい。

大府から、武豊線がわかれて行つてゐる。知多半島に赴く人は、此處で乗替をしなければならぬ。知多半島には、龜崎、半田などいふ町がある。その西海岸には、名古屋の人のよく出かけて行く大野海水浴がある。常滑附近から山の中に入つて行くと、源義朝が長田忠致に殺された遺址が澤山に残つてゐる。

この他に、大府で下りると、一里足らずで、

例の今川義元の桶狭間古戦場に行くことが出来る。さびしい、つまらぬところだけれども、歴史を偲ぶ人は行つて見るべきところである。

九〇

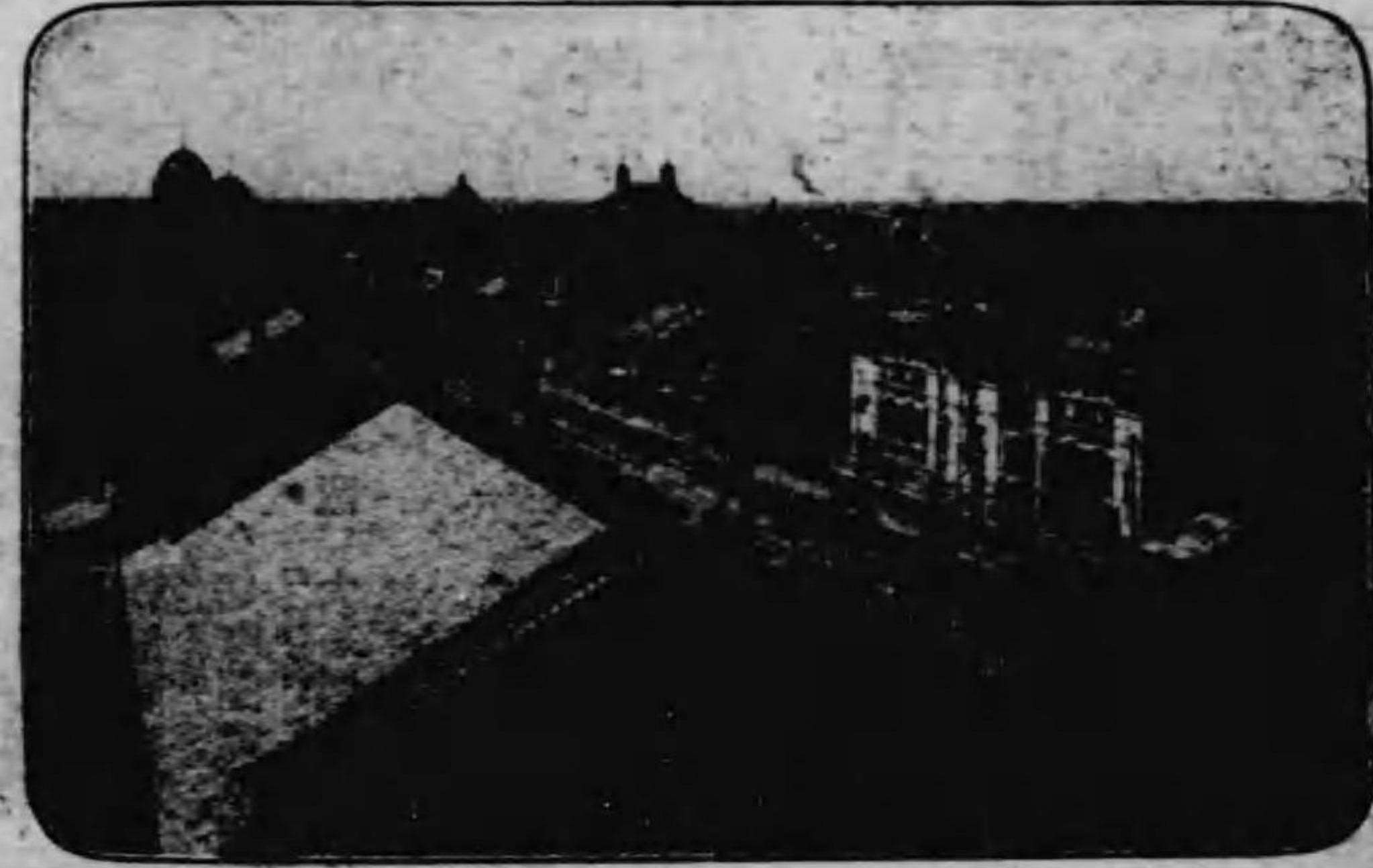
九 伊勢参宮

- ▲名古屋 まで東京から二三四哩六、三等賃金二圓六十六銭。
- ▲山田 まで同三〇七哩同三圓三十三銭。時間は普通名古屋まで十二時間、特別急行で八時間、唯の急行で十時間位。それから名古屋から山田まで四時間半位。
- ▲名古屋 から大山へ電車。
- ▲同所 より新津島へ電車。東一宮へ汽車。
- ▲彌富 木曾川橋間は、關西線と東海本線とを連絡した鐵道だ。中に津島神社のある津島町がある。全線の三等賃金四十一銭。
- ▲湯の山 四日市間、軌道、賃金二十八銭。
- ▲桑名 藤原間軌道、賃金二十銭。
- ▲津 久居町間電車。
- ▲松阪 大石間軌道、賃金二十九銭。

伊勢参宮

昔は伊勢参宮と言へば、随分榮えたものであつた。名古屋から、参宮街道にかけては、殆ど旅館と宿引とで充たされてゐたといふ形であつた。伊勢参宮名所圖繪などを繕いて見ると、其時の賑であつたさまがよくわかる。しかし、今では、汽車が出来て、交通が一變して、大廟のある宇治山田市でさへ昔の繁榮を保つことが出来なかつた。ですから、旅客は伊勢ばかりを目的とせず、大廟から上方見物を一所にして出かけて行くものが多い。此頃流行る團體旅行などでも伊勢、二見、京、大阪と言つたやうな計畫でやつてゐるのが多い。

従つて私は此處には、伊勢と、伊勢から上方へと行く路順とを主にして書いて見ると



名古屋街市

もりである。
で、先づ東京驛を朝出る。急行でなければ、名古屋まで行くのにかれは一日かゝる。その日は名古屋に泊る。まるや、志那忠、錢屋丸文、其他にも澤山好い旅館がある。電車が市中を往來してゐるから、何處に見物に行くにも便利である。

一番先に金の鱧の名古屋城、長島町の東照宮、門前町の大須觀音、これだけは先づ見落してはならない。大須觀音は、大阪なら千日前、東京なら淺草觀音といふ格で、見世物があつたり飲食店があつたりして賑やかだ。この觀音の向に、旭遊廓がある。料理店では、河文、御納屋、魚屋などといふのが好い。



名古屋城

名古屋女の美しい舞の手ぶりは西川流で、東京には一種變つた情味がある。一晚おもしろく遊んで見るのも好い。
郊外に少し離れては、八事山などに行つて見るも好い。春は躑躅などが咲いて見事だ。流石は名古屋の人達が折詰などを持つて遊びに出かけて行くのも尤だと點頭かれる。山の上には弘法大師の開いた遍照院といふのがある。賽者が多い。この八事山について春は蕨、秋は蕨の出る天道山といふのがある。
停車場から西に二十町ほど行くと、中村公園がある。豊臣秀吉の生れたところで、今は豊國神社が立つてゐる。その他、甚目寺などといふ古刹がある。

しかし、名古屋は、割合に見るところが少ない。名所と言つては、先づ此位で、この上見やうと思へば、小牧の古戦場とか、長湫の古戦場とか中央線の汽車で行く美濃の虎溪山とか、さういふあたりまで出かけて行かなければならない。

それに、此處に来て、熱田の神宮には是非詣りなければならぬ。こゝは日本では、伊勢の大廟に次いで尊ぶべき古祠で、日本武尊を主として祀つてゐる。草薙の劔がその神體であるといふことは、一層人に襟を正さしめる。昔、東海道の時分には、宮の七里の渡しと言つて、旅客は、名古屋に入らずに、唯遙かに金の鰯の夕日にかゝやくのを眺めて、此處から船で桑名へ渡つたものである。今は熱田は名古屋の中に編入されて、築港が出来て、船舶が澤山来て碇泊してゐる。

伊勢の大廟に赴くには、名古屋で、關西線の汽車に乗り替へる。そこは豊饒な尾張平野で、村に白壁の家などが多い。水田も多く、溝渠も縦横に通じてゐて、あたりは何となくのんびりしてゐる。蟹江からは、尾西鐵道が右にわかれる。例の津島の古風な祭を見やうとするものは、其處で汽車を乗り替へる、その祭禮の時には、彼方此方から人が出て来て、臨時汽車を出しても、それでも乗客が外に溢れるといふことである。そこ

の祭禮は舊曆六月十四日五日で、十五日には壯麗な山車が出て、日本でも澤山ない位の賑かなお祭であるさうな。

そこから少し行つて、木曾川の長い橋を二度わたる。頗ぶる壯觀だ。日本では多く得られないやうなひろびろした感じがする。これをわたり終ると、右に山脈が近づいて来る。多度山がそこにあるのである。そしてその向ふが養老山になつてゐるのである。伊吹山が、注意すると、右に高く聳えて見える。

これから桑名はすぐだ。例の時雨蛤の名産地である。四日市がついて来る。市制を布いてあるだけに、中々賑かだ。人家の軒も揃つてゐる。此處にも、大きな祭禮が秋にはある筈だ。菟野温泉といふのは、こゝから右に入つて行く山の中にある。ちよつと静かな世離れた好いところだ。今軌道がある。

四日市から少し行くと、参宮街道と東海道とが右と左にわかれる。右が東海道である。そして汽車は東海道へと沿つて進んで行く。河原田、加佐登などといふ驛を通つて、やがて龜山に着く。

日本武尊が陵のある能褒野神社は、加佐登からも龜山からも行かれる。共に一里二三

十町だ。この他に、この近所に精神社などといふのがある。

此處等に來ると、鈴鹿山脈が實によく見える。丁度御在所嶽などといふのがその正面に當つてゐる。龜山では、參宮鐵道線が左へとわかれる。

從つて、大廟に赴く人や、こゝで汽車を乗替へなければならぬ。龜山はちよつとした町で、城址などがある。

龜山でわかれた汽車は、暫し丘陵の中を通つて下庄を経て、一身田へと着く。そこはもう丘陵から出て海に近い氣分になつてゐるやうなところである。經ヶ嶽が右の車窓からありくと見える。一身田には、眞宗高田派の専修寺がある。大きな伽藍は、汽車の中からそれぞれ指さされる。かなりの流行佛で、賽客は常に陸續として來り集る。

この少し行つたところで、汽車は、四日市の先きでわかれた參宮街道に合して、そして、津市へと入つて行く。『伊勢は津で持つ、津は伊勢で持つ』の津である。市街もかなり長く、大門町の觀音のあるあたりは頗る賑やかである。流石は藤堂侯三十五萬石の城下だと點頭される。こゝで見物すべきところは、城址と公園と、もう一つ贅崎の遊廓位のものである。公園はちよつと靜かである。

旅館には、大觀亭、聽潮館、若六などといふのが好い。

阿漕には海水浴場がある。一夜靜かに泊るのも興味がある。

これから、汽車は、伊勢海岸平野を眞直に南へと向つて行く。殆ど何も見るもの、ないやうな平凡な海岸平野である。高茶屋、六軒を経てやがて松阪に着く。右に聳えてゐる山脈は、伊勢と伊賀との國境を劃つてゐる布引山脈である。松阪の町は、汽車の中から見て行く。成ほど金持の多いらしい町で、白聖が多い。そこは松阪木綿の産地で、三井家の出身地である他、本居宣長を以てきこえてゐる町だ。暇があつたら、一汽車おくらせて下りて見ても好い。公園には紀州家の祖徳川頼宣を祀つた南龍神社、その下に本居宣長を祀つた本居神社がある。宣長の墓は、町の西南山室山にある。

この近所に、辛洲海水浴がある。松がちよつと好い。伊良湖と鳥羽と朝熊山と相連つた形を望むに適してゐる。

山田の停車場を下りると、すぐ電車がある。この電車は、内宮の方へ行くのと、二見の方へ行くのと、二つに分かれてゐる。しかし、先づ外宮を参拜する爲めには、この電車は用はない。ぐんぐん歩いて行くと、すぐ突當りが外宮の正門になつてゐる。宿屋は澤山にある。藤屋、五二會ホテルなどといふのが最も大きい。しかし、あまり大きな旅館に宿を取る必要はない。

外宮は、一の華表、二の華表、三の華表と段々入つて行く。此處に注意すべきことは、境内で烟草を飲んだり、帽子を被つたり、外套を着たりしてはならないことである。もし知らずに、それをする、峠度巡査にどなり附けられる。やがて正殿の前に行く。例の伊勢式の建築で、頗る神々しい。そこに手洗所がある。そこで、口そ、ぎ、手洗ひをして三拜するのである。

そこから出て来ると、神苑がある。綺麗になつてゐる。その正面北側に農業館がある。これから内宮へは、電車でも行けるが、旅客には、その間を歩いて貰ひたい。何故ならば、その間には、昔の榮えた時分の古市の髻髻を見ることが出来るからである。町の通は、昔のまゝになつてゐて、それで衰へてゐる。通りの狭いのも面白く、ところん、



外宮

に遊廊の浅黄暖簾が下つてゐるのも面白い。例の福岡貢の油屋などもそこにある。やがて間の山に着く。昔は例のお杉お玉がゐて、三味線のヘラで巧に銭を受けたところである。

しかし、この道はかなり長い。少くとも一里近くあると思はなければならぬ。それに坂がある。で、段々内宮近くなつて行くと、町通は再び賑やかになつて、名物の烟草入を賣る肆が段々あらはれて来る。やがて宇治橋のところに着く。

昔はこの宇治橋の下には、乞食がゐて、大きな網で、客の投げる銭をすくつて拾つたものだが、今はもうそんなものは見たくも見られない。それほどあたりが綺麗に掃除されて



宮 内

一〇〇
る。宇治橋の上は、跣足で歩いても差支ない位だ。

橋をわたつて境内に入る。小砂利の上に松が静かにその影を落してゐる。守衛の巡査が其處此處をぶらりぶらりとしてゐる。いかにも神々しい。やがて五十鈴川の畔に来る。そこで口を漱ぎ手を洗ふ。水がいかにも綺麗で、石がすき透つて見える。

やがて杉の葉の濃かな中の路を奥へと、入つて行く。大麻授與所、五丈殿四丈殿などがある。

で、正殿の前に跪いて参拜する。流石に気がすますには居られない。用材も建

築も、外宮と同じだが、唯、屋上の千木の切尖がちがふのだといふ。

再び宇治橋に戻つて、そこから五六町來ると、二見に行く電車の停留場がある。それに乗ると、電車は逸早く町を離れて、田圃の中を横つて向ふに行く。かなり早い。窓から右に高い山が見える。それが例の萬金丹できこえた朝熊山である。

朝熊山へも、暇があつたら、一度は登つて見るが好い。私は、内宮の傍のところから登つて行つた。さう大して険しくはなかつた。二三四町登ると、あとは山の背のやうなところ、一里ほど行くと、例のたうふやのところへと出る。二見から上ると、そこへ來るのだが、却つて其の方が路がわるい。

たうふやのある處は、名高いところだけあつて、頗る風景に富んでゐる。神社から二見にかけての伊勢灣が一目に見えて、志摩の山の連亘が波濤のやうに見える。こゝから朝熊の寺まで廿町ほどである。女子供にはちよつと荷が勝ちすぎる。

二見に行く電車は、ひろい入江のやうなところにかけた橋の上を通つて行く。到る處すべて感じが好い。春先など殊にさう思はれる。一時間とか、らない中に、電車は二見に着く。

二見は猫の額のやうな狭いところだがちよつと好いと思ふ。伊勢では、海水浴では矢張此處だ。これで、松がもう少し多く、海がもう少し遠いと猶好いのだが、惜しいことには、波がちと高すぎる。

旅館には、二見館、太陽館などといふのがある。宿料は餘り高い方ではない。例の土産物の貝細工を賣る家が非常に多い。徴古館と言ふのがある。古器物を陳列してゐる。そこから、海岸を二三町傳つて行くと、例の大い注連繩をかけた大小二つの岩が海中に浮んでゐる。始めて見るものにも、さう大してめづらしいとは思はれない。何だか子供だましのやうな気がする。丁度、朝日がその傍から浮ぶやうに上るので、それが名勝になつてゐるのである。

參宮鐵道の線は、山田から二見を通つて、志摩の鳥羽まで行つてゐる。だから、此處まで来た旅客は、是非とも鳥羽まで行つて見なければいけない。鳥羽の日和山は、天下の大觀である。

そこは松島などよりもぐつと好いと言ふ人はいくらもある。私なども、或は松島、橋立に次ぐべき風景であらうと思ふ。鳥羽の停車場から五六町しかない。其處に上ると、

鳥羽水道に繋ぎされた無数の島々が重り合ひ凭れ合つて見える。菅島、答志島、遠く離れて神島が見える。その向ふに、三河の渥美半島の伊良湖の鼻が見える。海山の勝、此に及ぶものがあらうかと思はれる。

これから志摩の中に入つて行くと、中々好いところがある。二日を其處で潰す氣なら、的矢から、安乗岬、大王岬、御座岬を見て、濱島にわたつて、そして鳥羽に戻つて來ることが出来る。大王岬は、さう大してすぐれてはゐないが、安乗と御座とは、實に天下の大觀である。ことに、金比羅山の上から見た落日の御座岬は、天下を周遊しても猶且つ多く見ることの出来ない風景であつたことを私は此處に記して置く。

私は濱島から五ヶ所、贅、錦浦などを通つて、長島から紀州の木の本の方へと出て行つた。

で、再び湊町線の龜山まで歸つて來る。行きだけでも退屈する汽車だから、歸りは殊に退屈する。

龜山から關へ行く。そこには、例の名高い地藏尊がある。こゝから例の鈴鹿峠が始つて西近江の土山、水口の方へと出て行くのである。關から一里ほど行つたところに、筆

捨松がある。

汽車はこれから錫杖ヶ嶽の間の谷を深く穿つて入つて行く。この間の谷と、溪流と山村の布置とはちよつと好い。箱根の中よりも却つて此方の方がすぐれてゐはしないかと思はれる。やがて、加太の大きなトンネルを越えて、伊賀の柘植へと入つて行く。伊賀はちよつと面白い國だ。少くとも、私は好きだ。四面山に取巻かれて、中に平地がある形も面白ければ、そこに住んでゐる女などに、一種保守的な静かな気分のあるのも好い。

上野の町は、停車場から三十町ほど離れてゐる。車で行くと、二十錢位とられる。そしてその車は、城址の傍を通つて、町の中へと入つて行く。曾我忠は好い旅館だ。概してこの伊賀の娘の言葉なり気分なりが柔かだ。好い。「ぶぶばつか」などと言はれると、伴て来て小間使にでもしたいやうな氣がする。此處は大抵、月の瀬の梅を見に来た人が一夜泊つたり何かする處だが、町には例の荒木又右衛門の鍵屋の辻があつたり、芭蕉の記念塚があつたりして、見る處が多い。伊賀川にも、何とか言つて、一とこり溪流のすぐれた好いところがある筈だ。

月の瀬は梅の勝地としては、天下第一だ。これに比すべきところは何處にもあるまいと私は思ふ。花の盛はや、遅く、三月中旬が盛である。私は三度ほど其處に行つた。そこに行くには、上野から入ると、鳥ヶ原から入ると、路が二つある。後者の方が前者よりは近いが、前者の方が後者の方より興味が饒い。鳥ヶ原から行くと、二里半しかないが、唯山の中ばかりで、別に興味を惹くやうなところがない。それに引かへて、上野から行くと、村あり、丘あり、梅ありで、興味が湧くやうに起る。

上野から月の瀬まで五里、石打といふところから梅がちらほら見える。やがて、尾山に行くくと、忽ち眼界が開けて、名張川の美しい谷を眼下に見おろすといふ形になる。この名張川の谷がいかにも好い。清淺潺湲、まさに梅花と共に仙化しやうとするやうなやえた感に誰れも打たれる。

これを谷に添つて下らずに、裏から行くと、一目萬本、一目千本などといふ處から、山の背を傳つて、鶯谷へ下りて行くといふ形になつてゐる。

梅の一番多いところは、鶯谷から、月の瀬橋へかけての一帶の地だ。月の瀬橋は、山陽時代には、渡して、風情があつたといふことである。それが、明治の初めに、渡しが土



月の瀬の梅

橋になり、更に今度は鐵橋になつた、しかし今更橋になつたと言つて慨嘆するほどのことあるまい。

橋を渡ると、月の瀬である。梅は山にも尾にも満ち満ちてゐるといふさまである。旅館はそこから五六町登つて行つたところに、かぢ屋と言ふのがある。餘り好い旅館ではない。それに梅の時は雑沓する。

そこから名張川に添うて下る。山も川も皆好い。水も清い。淡竹の藪の多いのも感じが好い。やがて、桃ヶ野に着く。此處にも梅が多い。溪流に臨んでかけ茶屋などを出した茶店が何軒もある。旅亭も二三軒ある。一目萬本から見た氣色もかなり好い。梅は櫻

のやうに、望んでほ爛漫とした趣はないけれども、ところどころに白く簇つて咲いてゐるさまも亦興がないではない。

此處から山越しに、柳生但馬守の城下の柳生を通つて、笠置の方へ出て行く路があるが、峠があつたり坂があつたりして、あまり樂でない。そしてかなりに遠い。柳生まで三里、そこから笠置まで三十町位ある。しかし、笠置に登る人は、これを行くと、笠置の裏から山つゞきに入つて行くことになるから、峻しい十八町の山路を登らなくつて済むには濟む。

で、月の瀬の梅の歸りは鳥ヶ原に出て、湊町名古屋間の汽車に乗る。鳥ヶ原には、徳田屋といふ旅館がある。

それからまた、上野まで戻つて、名張町の方へ行つて見るのも興味がある。その間は五里、乗合馬車がある。町はちよつと感じが好い。また、此處から二里ほど行くと、例の赤目四十八瀧の勝がある寺がある、寺は延壽院と言つて、奥には瀧が非常に数多くかかつてゐる。中で、一番大きいのは、布引瀧である。こゝから山越しに、大和の室生の方へ出て行く路も面白いが、普通の旅客には、ちと荷が勝ちすぎる。

島ヶ原には古刹正月堂がある。それから汽車は、大河原を通つて笠置に着く。この間で、伊賀川と名張川とは合して木津川となる。そして關西線路中唯一の溪山の勝とも言はるべき奇景が其處に展開されるのである。

この溪山は箱根よりも鈴鹿よりも好い。山の形も奇なれば、水の流も面白い。ちよつと車窓から顔を離すことが出来ない位である。それに、左に笠置の獨立山が屹立してゐるのも趣を添えてゐる。

笠置で汽車を下りると、河を渡つて對岸に有市の鑛泉がある。笠置を見物してから行つて泊るのに好いところである。笠置は元弘帝の古蹟、成ほどこれほどの山なら、敵も攻めあぐんだのも無理もないと思はれる。險路十八町、それが殆ど板を立てたやうである。これで内部が一致して、裏面の防備を嚴にしたなら、楠公の千早と同じく、滅多に、一月や二月で落ちるべき筈のものではないと思つた。しかし笠置は南北朝以前、天武朝の事蹟にもおもしろいところがある。元弘の兵火に逢つて、形が薄くなつたと言はれる大きな岩に鑄つた佛像など實に立派なものである。それを見ただけでも、此處の寺觀が宏壯を極め、宗徒は異常な勢力を持つてゐたといふことが想像される。

山上にある岩石にもめづらしいものが多い。山の頂に立つて、案内者が遙かに敵に内通した穢多村を指して、今でも、そこだけ婚嫁を通じないなど、言つてゐるのも面白い。元弘帝の行宮の址に立つと、感慨無量である。齋藤拙堂の『遊笠置山記』と太平記とを比べて見ると、その當時のさまが殆ど手に取るやうに見える氣がする。元弘帝が藤房卿と、共に『天下にはかくれ家もなし』と詠せられた辛艱の御さまなどが胸に迫つて來る。こゝから汽車は木津に向つて行く。更に奈良へも、京都へも、大阪へも向つて行く。しかし此處では、此處で筆を擱いて、あとは京都なり、奈良なりの條に書くことにする。奈良や京都の方から笠置なり月の瀬に行く人はこれを逆に見るが好い。それからまた此處からつゞけて奈良なり京都なりに行く人は、此條に先の記事をつゞけて讀んで貰ひたい。此處から奈良は、もう一時間か二時間で行けるのである。

十 京都と大阪

▲岐阜 大垣に行つたものは、養老に是非行つて見るべきだ。もとは不便だったが、今は養老鐵道が出来て、大垣、養老間、池野大垣間、この二線を起してゐる。大垣から養老まで八哩八、三等賃金二十一錢。

▲岐阜 から飛彈の高山に入る路がある。三十里ほど。

▲湖南鐵道 と言ふのは、西近江線と並んで、東海本線の左の方にあるものだ。

▲石山 の下からは大津に行く汽船が出る。唐崎、堅田の方にも行く。大津から竹生島の方に行く汽船も出る。

▲京都 市中の電車は、七條から北野までつゞいてゐる、途中木屋町で乗替へて三條上の方へ、寺町丸太町で乗替へて、出町橋の東線、押小路から千本二條の西線、東寺から肥後町まで、かなりに便利だ。嵐山電車も出来た。

▲保津川 下りのためには、丹波龜岡まで行く。汽車賃二十二錢。龜岡から船を借りる。一棧借切で三四圓、乗合は七八十錢。

▲京都 の多い寺の中で、最も古い、是非見なければならぬものは、太秦の廣隆寺だ。

▲桃山御陵 は、電車で、伏見まで行く。

▲淀川 沿岸では、昔三十石船で榮えた牧方、右岸の鳥飼野など。

▲大阪 の見物は、やゝ面倒臭いが、電車も出来たから、餘程好くなつた。外圍を繞つた汽車を利用するもよし、車で要所々々を選んで見て歩くもよし。文樂座、明樂座。

▲箕面 有馬電車は十分乃至十五分毎に發車、梅田から箕面まで往復二十八錢、寶塚へ同三十八錢、全線遊覽券五十錢。

▲大阪 から生駒山脈を横つて、奈良へ行く電車は、全區を五區に分ち、一區金五錢、即ち奈良まで三十錢、六分乃至十分毎に發車、時間は五十分で奈良に達する。

▲京都 まで東京から哩數三二九哩三、賃錢三等三圓四十八錢、大阪まで同じく三五六哩一、三圓六十七錢、時間は普通で京都へ十七時間、大阪へ十八時間、これを最大急行で行けば、京都へ十一時間大阪へ十二時間。

上方見物は、一週間あればかなり澤山に見られる。忙しいけれど、交通機關を利用して、テキパキやつてのければ、京都、大阪ばかりではなく、神戸までも行けるし、奈良も見えて来られる。急行でやつて行けば、夜、東京を立つて、明日の朝京都に着く。その日の中に西山と東山とを見物する。それに御所も見物する。そしてその足で、桃山に行く。それから大阪に行つて泊つても好し、大阪に泊まるのがいやなら、宇治あたりで静かに寝て、翌日早く奈良に行く。春日、大佛、もつと奥に行つて西の京を見る。そして歸りには郡山に出て、そこから汽車に乗つて、法隆寺で下りる。法隆寺は午後四時までだから、注意してそれまでに行くやうにしなければならぬ。これはかなり忙しい。しかし九時に奈良に着いたとして、四時間あれば、西の京まで見て郡山の停車場までは行ける。で、法隆寺を見て、その夜は、大阪まで行つて泊る。しかしこの急行では、龍田位は見られるが、畝傍まで行つて見る餘裕はない。で、翌日は半日大阪を見物する。大阪には、文樂だの何だの彼だのと、見るものが多いが、千日前と、生國魂の舞臺と、築港と、心齋橋筋位なら半日あれば澤山だ。そして其足ですぐ箕面なり寶塚なりに行く。有馬までも行けるかも知れないけれど、それはちよつと無理として、まア寶塚あ

たりで泊る。これで三夜である。あと一日神戸から須磨明石のあたりで暮らす。あとの一日は、都合がよかつたら、和歌の浦あたりまでのして見る。五日目の夜は、急行で東京に歸つて来ることが出来る。上方見物は實にわけがない。しかしかういふ急行も面白いには面白いが、却つて費用が餘計かゝる。上方見物は、何うしても一週間かける氣でなければならぬ。高野から吉野の方まで入ると、十日かければならぬ。そしてその費用は、書生旅行なら三十圓位でもあがるが、旅館にわるい顔をされない程度では、まア、一日五圓十日五十圓と思はなければならぬ。それは上方は物價の高い處だし、目の毒なものが澤山にあるから、五十圓が百圓でも十分と言ふわけには行かないが、五十圓で伴れが三人ほどもあれば、祇園の舞の艶な姿位は見えて、ちよつとした土産物位は買つて来られる。

茶代はまア、一人一圓と見なければならぬ。それに、女中には、普通の旅では、これはまア少しお捻りをにぎらせた位で好いが、三人以上行つたら、是非一圓やらなければいけない。でないと、何うも不愉快ばかりでなく不便である。勿論、これも旅館によつてちがふ。わるい旅館に泊れば、一圓の茶代でやりすぎたと思はれるやうなところも

ないではない。しかし人情として、旅は普通好い旅館屋に泊りたい。靜かにゆつくり寝たい。あまり固くない蒲團にねたい。で、私の経験では、旅は兎に角その土地の第一流乃至二流で代々固く旅館業を営んでゐるやうな旅館にとまるのに限る。さういふ家では、決してわるく物をすゝめない。従つて少し位宿料が高くつても、却つて得になる。それを慌て、停車場前などの新開の旅館屋などに泊ると、散々な目に逢ふ。初めは經濟的やうで、結局不經濟になつてゐる。概して、宿引の煩さく勸めるやうな宿屋はわるい方が多い。

上方を旅行するには、殊にさういふ注意が必要だ。何故かと言へば、上方は一般に旅館業がひらけて、そして商賣にかしこいからである。

で、此處には一週間乃至十日位で旅程を定めて案内して見るつもりだが、それにして一つの條に書かずに、いくつにもわけて書く方が便利でもあるし、不自然でないから、その積りで書く。通じて旅行して歩く人にはそれを合せて見て貰ふ方が好い。

京都に行くには、東京驛の三等の九時で立つと、翌日の九時には着く。この哩數、三二九哩三鎖、汽車賃三圓四十八錢、外に急行券五十錢が要る。で以つて一寢入して行か



飼鶴川長

れる。三等急行列車にある食堂では、さしみなどが食へて、ちよつと氣持が好い。

しかし、ぢかにすぐ京都に行つても好いが、その間にも、また見物すべきところがかかりに多く残つてゐる。それを、行きなり、歸りなり、乃至はまた用事で上方に行つて次手に寄つて見るといふ人の爲めに、二三此處に書いて見ることにする。

で、名古屋から先では、一宮に一宮神社がある。この町は賑かなところで、萬の市といふ市が日をきめて立つ。稻津の近所に、織田信長の清洲の城址があつて、それが汽車の窓からも見える筈である。左に長く連つてゐるのは、養老山脈で、その上に濃く高く聳えてゐるのが鈴鹿山脈である。木曾川を渡る時分から、伊吹山の大きい姿が汽車の右になつたり

左になつたりして見える。

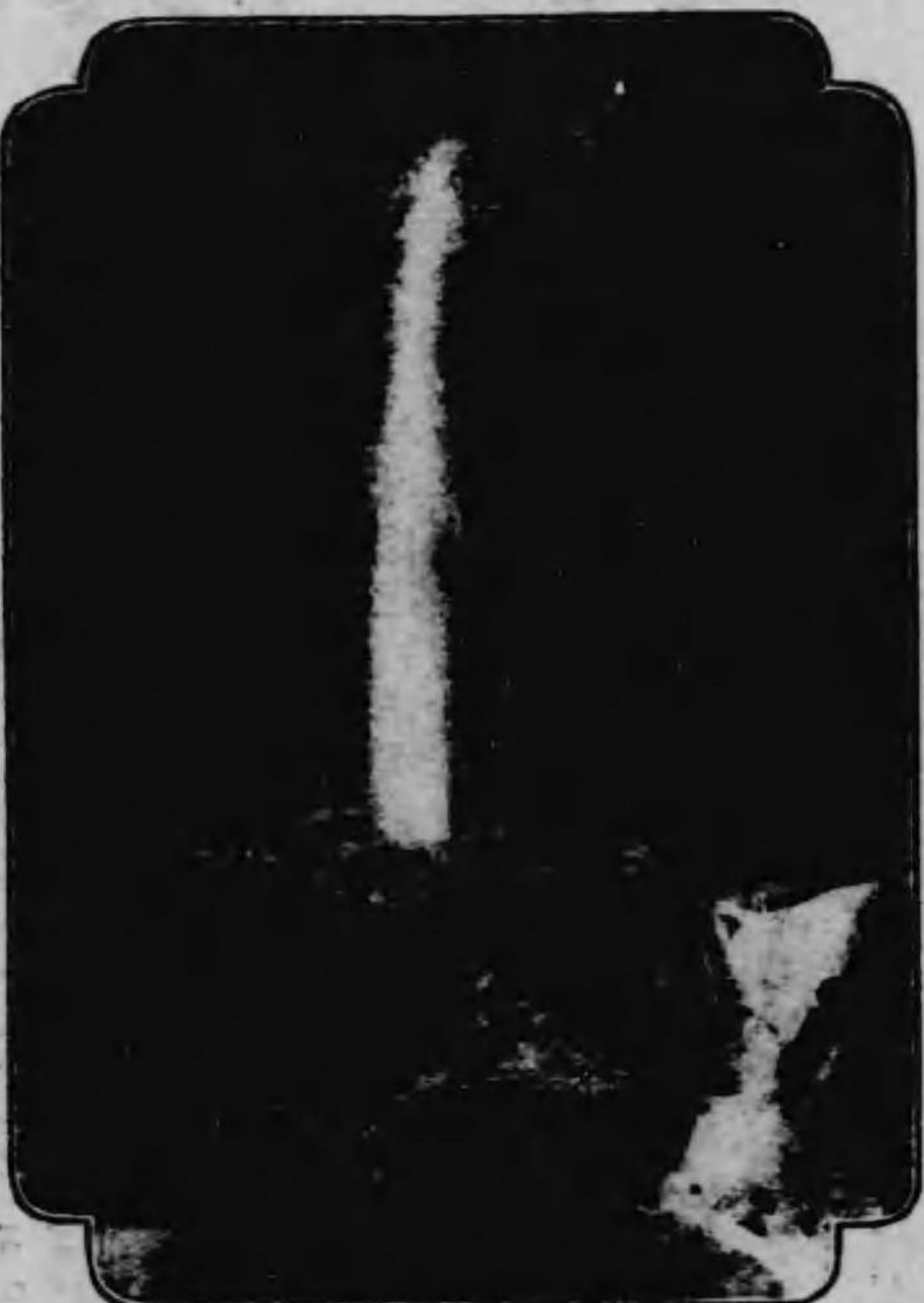
岐阜では、長良川の鵜飼が一番人口に膾炙してゐる。それは、毎年五月十一日から、五ヶ月間、月夜を除いてはいつでもある。岐阜の宿屋は玉井屋、津の國屋、鐘秀館、水琴亭、十八樓などに荷を定めて案内をさせれば、いつでも親切に世話をして呉れる。船賃は五人乗一圓、六人乗二圓、十五人乗四圓位である。暗い中に篝火の點々としてゐる形は、ちよつと面白い。

岐阜では、其他、稲葉山、その麓にある伊奈波神社、茶屋町の正法寺の大佛などがある。稲葉山に連つて金華山がある。共に眺望に富んでゐる。その下の公園には名和氏の昆蟲研究所がある。金華山に上ると、織田信長が清州から出て、次第にその舅齊藤龍興を蠶食して、遂に美濃を収めるに至つたことなどが胸に上つて来る。秀吉が一夜に築いた州の股の城などのことも思ひ出されて来る。

これから汽車は大垣に行く。養老瀧を見物するには、こゝで下りて、高田から養老山の麓まで行く軽便鐵道に乗らなければならぬ。この間一時間、瀧を見物したり何かして、四五時間あれば十分である。山腹には養老寺、養老神社などがある。そしてその奥

に瀧がか、つてゐるのである。

瀧はさう大きくない。わざと行つて見た人を失望させる。



養老の瀧

しかし、例の孝子の一條で瀧は名高くなつてゐるのだから仕方がない。山中にある千歳樓の階上からは、尾張平野が一面に見わたされる。名古屋の金の鯨なども見える。瀧よりも眺望の方がすぐれてゐる。

大垣から垂井、そろ／＼關ヶ原の古跡は始まつて來るのである。此處を通る度

に、私は是非一度垂井で下りて、關ヶ原から柏原あたりまで歩いて見たいと思ふが、さうしたらさぞ當時のさまが身に沁みて感じられるであらうと思ふが、ついぞその望み

勝山

伊吹山

關ヶ原の古

を果したことがない。垂井には結城の遺子春王安王の墓があつたり、玉泉寺門前の垂井の清水があつたりして見る所が多い。汽車の中からも、注意すると、家康の高等司令部を置いた勝山といふ丸い小さい丘陵なども見える。その他その近所には徳川方の諸將の陣した趾などが澤山に残つてゐる。南宮山は、小早川秀秋の陣營のあつた山で、汽車のレールの左に聳えてゐるのが其山である。そこに南宮神社がある。例の大谷吉隆が小早川の二心を疑つて、堅く陣地を占めたのは、丁度その山の麓のところになつてゐる。此處に來ると、伊吹山は實に近い。すぐ前に聳えてゐると言つても好い位である。春だの、秋だのは實に好い。新緑の頃はことに好い。それに、この汽車の沿道に横つてゐる山村のさまが面白い。柿の木があつたり、竹藪があつたり、その中に舊家らしい白壁があつたりする。石田三成の陣した趾は、關ヶ原の停車場から北に當つて十二三町のところにある。その近所には島津や浮田だの、陣趾もある。皆な標木を立て、それを示してゐる。しかし、汽車はそんなことには頓着なく、ぐんぐんこの古戦場の中を通つて行つて了ふ。伊吹が右に隠れると、鈴鹿の深い山脈が前に顯はれてその中を中仙道が通つて行つてゐる。例の不破關址や、磨針峠や、猿馬場や、美濃と近江の寢物語の里など

米原

筑摩祭

彦根
佐和山古城

永源寺の紅葉

がそこに横つてゐるのである。琵琶湖を展望する地點としては、磨針峠などは、昔から著名な地としてきこえてゐたところであるが、今は、中仙道の交通がすたれたので、餘り言ふ人がない。そこには、米原から行けば、三十町位しか隔つてゐない。で、汽車は伊吹を出て、日本武尊の遺趾のある醜ヶ井を通つて、米原へと出て行く。そこは北陸線のわかれて行く大驛で、そこまで來ると、旅客はホツと呼吸をついたやうな氣になる。福井、金澤の方へ行く人は此處で汽車を乗替へなければならぬ。この近所に、筑摩の鍋かぶりといふ祭がある。男を持つた数だけ女は鍋をかぶつてそこにお詣りするといふ儀式である。昔から聞えた祭禮で、西鶴、近松などもそれを書いてゐる。こゝに來ると、琵琶湖の東の一部がちよつと見える。

彦根には、石田三成の佐和山城址だの、公園だの、樂々園だの、八景亭だのがある。町も立派だ。此處からは近江鐵道がわかれて、八日市驛を通つて、草津線の貴生川に合してゐる。東近江の中心を貫通してゐるやうな鐵道がある。例の近江では唯一の山水と言はれる永源寺の紅葉は、この鐵道で八日市まで行つて、そこから猶三里ほど山の中に入つて行くのである。浮流が頗る好く、寺も大きく、境も幽邃である。紅葉の時は無論だ



永源寺溪流

二一〇

が、平生でも行つて見て後悔するやうなことはない。安土からは、十二三町で、織田信長の安土城址に行くことが出来る。此の城は半は出来たばかりで、本能寺の變があつて、衰へて了つたが、歴史上ちよつと面白ところである。八幡、野洲あたりは、近江商人の本場で、大きな商人が多い。これから野洲川を渡ると左に赤ちやけた山が見える。それが田原藤太のむかひを退治したといふ三上山である。ちよつと面白い山で、晩春の候通ると、つ、じが赤はけ山の中に點々として咲いてゐるさまは人目を惹くに足りる。

守山から草津に行く。此間絶えず左に奥深く聳えてゐるのは、鈴鹿山脈で、丁度關西線の通つてゐる地方と背中合せになつてゐるのである。そして東海道はその山の中から来て、草津で此方から行つた中仙道と合

するのである。

草津からは草津線が左にわかれて、これが伊賀の柘植に行つて、關西線に合してゐる。草津は、東海道中仙道兩交通路の追分で、昔は中々賑やかであつたところだ。例の草津の姥ヶ餅が名物だ。

こゝから琵琶湖はひろく一目に見わたされる。比叡から比良の雪がいち白く見わたされる。八景の一つである矢橋は丁度汽車の通る右に當つてゐる。やがて石山に着く。勢多の橋が見える。こゝを下りると、電車があつて、瀬田まで三錢、石山まで四錢である。石山は例の紫式部の源氏を書いたところで、ちよつと好い感じのするところだ。源氏の間などといふ處が寺の中に残つてゐる。今では月見など出かけて来るものが多い。石山驛から街道を行くと、粟津で、例の源義仲の戦死した址などが残つてゐる。

馬場驛といふのはなくなつて、今は大津驛になつた。この近所には、義仲寺だの、芭蕉堂だのがある。電車があるので、大津に行くにも、三井寺に行くのもわけはない。三井寺までは西二十八町、電車賃四錢で行ける。寺は湖水を見るのに好い。それに辨慶の釣鐘などがある。高観音も湖水眺望の地にして聞えてゐる。



三井寺

大津の市街はちよつと感じがフレッツシだ。日本のベニスだなどと言ふが、成ほどさうかも知れないと思はせる。惜しむらくは、湖水の水の色が美しくない。鮮やかでない。こゝには近江八景遊覽船と言つて、四月から七月二十日まで、僅か二三時間で一週し、戻つて歸つて来る船がある。それから三月一日から十月卅一日まで竹生島行の汽船が出る。その外湖南汽船會社の船もあるのだ、唐崎へでも、堅田へも自由に行かれる。しかし、唐崎でも、堅田でも、さう大して感心するほどの處ではない。琵琶湖の諸勝の中で、私の氣に入つたのは、先づ竹生島位のものである。

三井寺から京都へぬける疏水の船が出る。出来立ては、めづらしがつて、人が随分乗つたものだが、今はあまり乗手がない。それに何だか氣味がわるい。

大津の宮、即ち志賀の郡の址は、大津からさほど遠くない滋賀村字錦織にあつて、二町四方ばかりの御所址といふのが残つてゐる。大津から北へ一里、阪本の一邑がある。比叡山延曆寺への正面の登口で、人烟がかなりに稠密してゐる。此處に旨い蕎麥を食はせる家が一軒ある。こゝから唐崎の松のある唐崎神社はすぐである。

それからこの西近江で、唐崎、堅田を除いて、大溝の附近に例の中江藤樹の藤樹書院がある。好事の士は一度行つて見るが好い。それには、汽船で大溝まで行つて、それから三十一町ほど歩けばある。又その近所の玉林寺といふ寺に、藤樹の墓がある。この他、西近江は、昔、北國街道であつただけに、ちよつと面白ところが多い。今津などいふ町も特色のある町である。若狭の方へ行くには、そこで汽船を下りて、山越しをして行くのが一番近くつてそして便利である。

竹生島に行くには、大津から船が出るが、米原の先の長濱から行つても好ければ、今津から行つても好い。四面絶壁で、宮のあるところだけが一ところ船を寄せることが出来るやうになつてゐる。『石見國如硯 竹生島似笙』などといふことが思ひ出される。平經盛のことなども思ひ起させられる。

再び東海道線に戻る。そして今度はいよく京都へと入つて行く。汽車の通つて行くところは、即ち昔の逢坂山で、關所のあつたところである。歴史上から考へて來ると、いろ／＼なことが思ひ出されて來るやうなところである。關の清水なども今日猶依然として残つてゐる。そこに行つて見るのには、大谷で下車すればわけはない。山科を通ると、京都の盆地がやがて目の前にひらけて來る。今までの眼だけでは足りないといふやうに思はれて來る。竹藪があつたり、陵があつたりする。次第に京都の町は開けて來る。東寺の塔が見える。老の阪山脈が見える。やがて稻荷に着く。例の伏見の稻荷である。赤い大きな華表が眼に着くと、今度は、東山がやがて一目に見える。鴨川を汽車は渡つて行く。兩本願寺の大きな伽藍がぬつとして立つてゐるのが見える。もう京都に來たのである。

京都は電車が四通八達してゐる。少し地理に明るければ、車などは頼まなくつても、ぐんぐん見物が出来る。先づ順序として、一番先に東山に行く。電車を四條で下りる。四條通も賑やかだし、三條通も賑かだ。此間には、例の新京極などがあつて、京都では先づ中心だ。四條の大橋の附近は、夏は例の夕涼の出來るところで、東京では見るこ

との出來ないほどの賑やかさである。しかし近年は河原に涼棚を拵へることを禁じたさうだから、餘ほどわるくなつたといふことだ。晝間見ると、何だ、こんなところ、鴨川なんて大袈裟に言ふが、こんな溝のやうなちよろちよろ水、かう思ふが、夜になると、丸で變る。それに小さくつても、水の綺麗なのが何よりも取得である。涼棚に坐して、足を水にちやぶちやぶやらせてゐると、夏なんか何處かに行つたかと思ふやうな氣がする。それに、山に近いので、空氣が新鮮である。何處となく東京などよりも夜は涼しい。

橋の東は祇園、先斗町、祢歌の聲が湧くやうである。一カ、大可などといふのが中ても好い。例の赤前垂の仲居なども東京では見られない感じである。何でも此の近所で、女の大騒ぎをするひし屋櫛の本店がある筈である。繩手通の四辻には、目疾地藏がある。それから新地を眞直に向ふに突當ると、八阪神社がある。社殿も立派である。例の七月廿日から七日間、祇園會に出る鉾山車は、此處から出るののである。境内には櫻が多くつて、春は賑やかだ。

突當りは圓山公園になつてゐる。その入口に、例の祇園の大きな櫻がある。そこを見



院 恩 知

二二六
 てから知恩院に行く。浄土宗の本山だけあつて大きな伽藍だ。松の間に花の交つて咲いてゐるさまなど繪のやうである。本堂の東南の屋根裏に建築の時大工が置き忘れたといふ傘のさしてあるのが下から見上げると微かに見える。それから本堂の傍の方へ行つて、中に入つて見る。例の鶯張の廊下は到る處にあつて、踏むと、キウキウと好い音をして鳴る。寶物は澤山にある。一々數へ切れないほどである。
 知恩院から圓山に引き返して、長樂寺、そこには、安徳天皇の御衣でつくつたといふ十六歳の幟がある。その山腹に頼山陽と頼三樹との墓がある。眺望が好い。
 それから八阪の塔の傍を掠めて、清水の方へ



寺 水 清

と行く。その前に、高臺寺がある。秀吉の創建で、秋の名所になつてゐる。豊臣家の廟や、千利休の好みで出来た時雨亭、傘の亭などがある。で、八阪の塔を見て、三年坂を上つて、五條坂に行く。例の清水焼を賣る店が兩側に並んで客を呼んでゐる。中に騒々しい。それを抜けると、清水寺だ。流石は京都の著名な遊覽地だけあつて、俗地ではあるが賑やかでちよつと面白い。高八尺の十一面觀音がその本尊になつてゐる。清水の舞臺からは京都が半分は見える。崖に添つて小さい音羽の瀧の落ちてゐる形も可笑しい。この近所には、轟の橋だの、地主権現だの、成就院だのと見るものが多い。景清の爪で作つたと

鳥部野

豊國神社

耳塚

洪鐘

いふ瓜形観音なども面白ければ、山科からそこを大石が通つたのだといふ路なども面白い。やがて此處を出て、細い路を通つて、少し行くと、昔の鳥部野に出る。墓が非常に多い。大きいのも小さいのもある。昔は京都の市街はもつと西に開けてゐて、鴨川以東は郊外であつたから、それで此處等を焼場にしたのであらうが、それが今遊覽地の真中になつて了つてゐるのなども不思議だ。徒然草の作者が双ヶ岡から、この鳥部野の畑を望んで、無常を感じた當時のさまなども思ひ出される。そこに、お俊傳兵衛の墓があつて、賽者が多い。それを出ると、西大谷の廟所で、親鸞上人の墓がある。境内には蓮池があつたり櫻があつたり眼鏡橋があつたりして、頗る手入がとゞいてゐる。

こゝから通りに出て少し行くと、豊國神社の前に出る。その奥には、阿彌陀峯が聳えてゐて、千古の英雄秀吉の靈がそこに眠つてゐる。豊國神社の前に、大きな丸い墳見たいなものがある。耳塚である。豊公征韓の役に、朝鮮人の耳を切つて、持つて来て、此處に埋めたものである。しかし、實際は耳でなくて鼻であるといふことである。耳塚でなくつて鼻塚であるのである。

豊國神社の傍には、例の歴史上有名な方廣寺と國家安康の銘のある洪鐘とがある。寺

方廣寺

大佛

三十三間堂

通し矢

澤山



京都と大阪

社 神 國 豊

は舊觀を存しないが、鐘は依然として元のまゝである。一錢出せば、撞かせて呉れる。それに、その鐘の銘もはつきりと讀むことが出来る。その傍に大佛がある。秀吉の建立したものであるが、火災に逢つたり何かして、今は甚だ見るに足りない。

これから南に行くと、三十三間堂の特異な建物がすぐ眼に入る。南北六十六間二間毎に一柱を置いた。それで三十三間堂の名に呼ばれてゐるのである。通し矢できこえたところで、今でもその堂の長押しに、澤山矢數の額がかつてゐる。堂の中は總て觀音の像で大小三萬三千體ある。入つて行つて、不思議なやうな氣がする。かう澤山に佛像を並べて置くと言ふのは、何だか氣ちがひ染みて

血天井

六波羅の址

粟田の青蓮院

粟田口

平安神宮

るるやうな氣がする。外國人などの驚くのも無理はない。

この前に、桃山城の悲劇の血汐で塗られた遺物で出来た血天井と言ふのがある。俗なものだが見て置いても好い。で、これから南に行くと、泉涌寺、東福寺、紅葉で名所の通天橋、それから伏見の稻荷といふ順序である。

で、先づ其處で引かへして来る。歸りには、六波羅の址などを見て、建仁寺から、安井の金比羅、双林寺、西行庵、平康頼の墓芭蕉堂、大雅堂などを見て、祇園に歸つて、知恩院から北の方に向つて行く。そこには東大谷の廟所、それから粟田の青蓮院がある。こゝは天台宗の名刹で、親鸞上人も嘗て此處に學ばれたことがある。寶物などにも見事なものが多い。この近所に、後花園天皇の陵がある。

こゝを下ると、粟田口に出る。元の東海道は大津から逢阪山を越えて、此處へ出て、それから三條大橋のところへと行つたのである。こゝには、粟田焼の陶器をひさぐ家が澤山にある。

これを突當ると、平安神宮がある。今は平凡だが、これでも五六百年も此まゝで立つてゐたら、人がめづらしいものにして見るであらう。この前に小さな動物園がある。

蹴上げ

南福寺

永觀堂

銀閣寺

詩仙堂

こゝを出て蹴上の方へ行く。やがて疏水のところに来る。船が鐵索につれて上つたり下つたりしてゐる形は一奇觀である。この少し右に入つたところに、京都料理の瓢亭がある。今は代が變つたさうだが何んなになつたか知らないが、兎に角變つたものを食はせる處であつた。疏水の前を東に行くと、南福寺がある。頼山陽が一帶青松路不迷と吟じたところである。山門も寺も新しくなつたので、昔のやうなさびた味は味はれない。これから三四町北に離れて、紅葉の名所永觀堂がある。

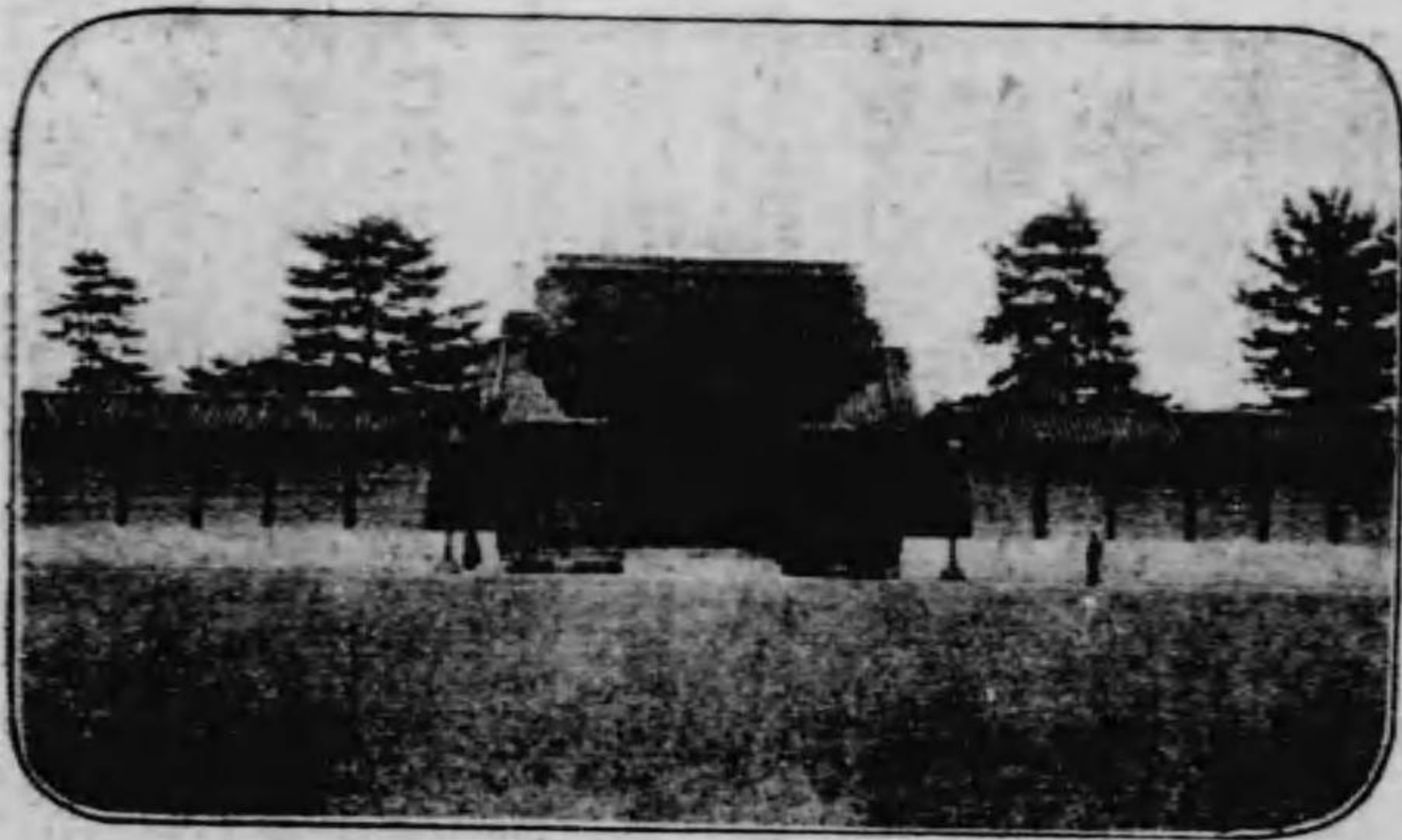
少し遠くなるが、此處から思切つて、銀閣寺まで行つて見る方が好い。永觀堂の北に若王本社がある。その北に、例の鹿ヶ谷の談合谷がある。銀閣寺は丁度その後になつてゐる。南福寺から十七八町もあらうかと思はれる。

金閣寺と銀閣寺とを比べると、規模は小さいが、銀閣寺の方が感じが好い。それに境が幽靜である。庭は相阿彌の意匠に成つたもので、足利義政閑居の地である。泉石の布置など中々見事だ。

これからまた奥に行くと、一生鴨川の水を渡らなかつたといふ石川丈山の詩仙堂などがあるが、そこまでは普通の旅客は滅多に入つて行かない。

黒谷

皇居



御所

岡崎から神樂岡にかけては、帝國大學と高等學校とがあるもので、すつかりひらけて、今は東京の本郷附近をそのまゝ、此處に持つて来て移したやうな町が出来てゐる。昔の京都には甚だ以て似つかはしくない氣分だ。その中に、黒谷の眞如堂や光明寺などがある。鐘の音が今も依然として四邊に鳴りひびいてきこえてゐる。

で、そこから引返して、今度は御所の方へ行つて見る。信長の殺された本能寺は、京都市役所の近所にある。それからこの近所に豊臣秀次の侍女の大勢殺されて埋められた寺がある。

電車に乗つて、御所前で下りるとそこがすぐ皇居だ。御大典の行はれたところは其處である。左近の櫻、右近の橘などといふのがそこにある。皇居は宣

相國寺

北野天滿宮

一條戻橋

平野神社

衣笠山

秋建春などといふ四つの門で圍まれてあつて、周圍は綺麗に掃除が行きとゞいてゐる。この皇居の後のところに、相國寺があつたり、相國寺といふ大きな寺があつたりする。それから上加茂、下加茂の方へも此方から行ける。しかし、普通の旅客は、さう奥まで入らずに、皇居から西陣でも見て、北野、平野から金閣寺の方へ行つて見るが好い。

電車は北野まで行つてゐるから、わけなく行ける。北野の停留場から、北野の天滿宮はもうすぐである。天滿宮の門前と言ふものは、何處でも賑やかだが、此處も矢張さうで、一種ゴタゴタした賑かさを持つてゐる。それに、此處は、天滿宮の本家本元だけあつて、社殿も立派なれば、境内も手入がよく行きとゞいてゐる。梅なども多く、賽客も陸續としてゐる。

此處に来る前に、ちよつと寄道すれば一條の戻橋と言ふのが見られる。北野の天滿宮の裏を抜けて、少し行くと、平野神社がある。官幣大社である。境内がひろく、木が多くつて感じが好い。こゝから金閣寺へは、もういくらもない。村を一つ越すと、足利義滿が盛夏に雪景が見たいと言つて白い布を一面に張らせたといふ衣笠山が前に見える、ひとり手に、金閣寺のある松林の中に入つて行かれる。



金閣寺

金閣寺は銀閣寺と竝んで、京都に於ける足利時代の類廢した文明を語るものと言はれてゐる。矢張、寺觀泉石の布置ばかりで、大したものとは思はれないが、しかし、寶物には、贅澤な立派なものがある。かうまで骨董趣味に人間は墮ちて行くものかと思はれる。『秋の違ひ棚、南天の床柱』などがその一つである。しかし、庭と、池と、泉石の布置とは中々價値がある。一概に捨て、了ふことが出来ないやうなところである。金閣寺を出て、嵯峨の方へ行く路は、天氣の好い日には、人に訊き／＼歩いて見て面白いやうなところだ。女子供でも、さう大して難儀な路ではない。しかし、單獨に嵯峨に行かうと思ふ人は、嵐山電車なり、丹波に行く汽車の花園



仁和寺

驛なりに下車して行く方が近いには近い。しかし折角金閣寺まで来たのだから、私はつゞけて案内することにする。こゝから、嵯峨の仁和寺まで十三四町、その間は多くは田圃道で、のんきなところである。その途中に、足利尊氏の木像を勤王の志士が斬つて四條積に曝したので有名な等持院がある。やがて仁和寺の塔が高く林の中に見える。仁和寺と言ふと、何より先に、徒然草に書いてある鼎をかぶつて歩いた僧のことが思ひ出されて噴き出したくなる。しかし、寺は大きく、境は静に、桜などもあつて、春は遊びに来るのに好い處である。山門にある仁王の彫刻も好い。仁和寺から兼好法師のゐた双ヶ岡を通つて、段々妙心寺の方へ出て来る。其方から来ると、順路は丁



廣隆寺

一三六

度妙心寺の裏門から入つて行くといふやうな形になつてゐる。妙心寺は宗妙心寺派の本山になつてゐるのだけあつて、寺觀も大きければ、それに附屬した寺坊も多く、立派な寺である。境内なども掃除がよく行きとゞいてゐる。寺内に大きな老松がある。

こゝから大社線の花園停車場は二三町しかないが、忘れても行つて見なければならぬのは、太秦にある廣隆寺である。これは京都の多い寺の中で、最も古い寺で、京都がまだ都にならなかつた時分から儼としてその本堂が残つてゐるのである。奈良の諸佛寺と同じ年月を閲した寺である。創建はたしか聖徳太子だと覺えてゐる。無論特別保護建造物である。中でも太子堂は千三百年以來そのまゝの建物である。この附近に、名こそこの瀧だの、小楠公の首塚だの



嵐山

京都と大阪

一三七

がある。それを探つて、嵯峨の清涼寺の方へ出て行く。廣澤の池なども見ておいて好いところである。やがて、天龍寺から嵐山へと行く。

嵐山は京都の名勝中、最も人口に膾炙してゐる。京都へ行くと誰でも先づ先にそこに遊びに行くといふ風である。今は嵐山電車が出來たから、何處にもよらずに、すぐ真直に其處に行ける。

嵐山は山の形が好い。それに麓を流れる川の水が好い。保津川は此處ではもう大堰川と言つてゐる。そしてこれから少し下ると、桂川である。渡月橋あたりから山を見た形は殊にすぐれてゐる。三軒茶屋あたりで、月の夜、花の夜などに酒を呼ぶのも興味がある。その近所に小督局の塚があつて、もとは草叢の中にあつたのが、今は路傍に露



川 津 保

出しでゐて、何となく昔を偲ぶのにふさはしくない。三軒茶屋の前から船で上につて行くのもよし、橋を渡つてぐると、川に添つて歩いて行くのも好い。温泉までは歩いて行つたところで、十町位しかない。

温泉のあるところはちよつと好い。浴後の酔を呼ぶには殊に妙である。一面つれ込宿ではあるが、そんなことは何うでも好いとして、一夜静かに寝て来るのも好い。保津川下りも一時の興としては面白い。それには、汽車でこの先の丹波の龜岡まで行つて、そして例の瓜皮の船で激湍急瀬を衝いて下るのである、この保

津の峡谷は、殊に幅の狭いのできこえてゐるだけあつて、船の中になると、身は萬山の底に落ちたやうな氣がして、世離れた心持になる。船は極めて早い。龜岡から一時間位で嵐山の下まで来る。中でも鐵橋のあるあたりの風景は殊にすぐれてゐる。嵐山から北では、俣尾、高尾など、紅葉の名所である。つまり清瀧川の谷に廻つて登るのである。しかし、普通の旅客には、ちよつとそこまで入つて行く餘裕がない。で、一先づ戻る。電車を二條離宮の前で下りる。この近所に、神泉苑と大極殿址とがある。神泉苑は京都で一番古い庭園である。大極殿址は、昔、京都が始めて開かれた時分に、大極殿のあつたところで、そこから市街の南の外れの東寺の近所の羅城門址のところまで眞直に朱雀大路が通じてゐたのである。それを見ても、京都の市街がぐつと今では東に偏つてのたことがわかる。

西本願寺から鳥原の方へかけては、京都の停車場から近い。停車場を下りたあたりは、所謂本願寺の信徒町で、安い旅宿や、法衣を賣る店や、珠數を賣る店などの多いところである。東本願寺、それと背中合せに西本願寺がある。共に大きな建物で、人目を驚かしめるに足りる。中でも西本願寺の飛雲閣は、豊臣秀吉の聚樂亭を移したもので、今は

本願寺

堀川御所址

特別保護建造物になつてゐる。この近所にある東寺の五重塔は、日本で一番高い五重塔としてきこえてゐる。寺内の池には杜若が多い。その近くに六孫王社、五所社、多田権現などといふのがある。

西本願寺に隣つて、日蓮宗の本願寺がある。この附近は、昔、源為義の邸宅のあつたところで、義経のゐた堀川御所といふのは、こゝらであつたらうと言はれてゐる。

それからすつと上に行くと、伊藤仁齋の堀川の塾の址などもある。

島原の遊廓は、西本願寺の裏から入つて行くと七町位しかない。これが有名な島原かと思はれるほどそれほど狭い小さい遊廓である。見かへり柳なども、あるにはあるが、頗るあはれなものである。妓樓などもさう大して大きなものはない。概して祇園の方にその全盛を奪はれて了つたといふ形である。

島原から十町、綾小路には壬生寺がある。それから東北六町、蛸薬師通り堀川には、空也堂がある。

この他市内でも、郊外でも、詳しく見やうと思へば、見るところが、澤山にある。容易に此處には書きつくされぬ。それにまた普通の旅客には、さう細かいことも必要で

島原の遊廓

寂光院

建勸神社

桃山陵

はない。先づ初め輪廓を見て、細く入りたければ、あとでいくらも細く入つて行くが好い。

しかし郊外で、普通の旅客にも勧めたいのは、一乗寺村から大原の寂光院に行つて見ることと、出来るから、比叡山にも、登つて見たまへといふことである。

寂光院は歴史上から見ては、優にさびしいかなしいところである。大原御幸などといふことは、京都の長い歴史の中でも、澤山にはない好いシーンである。比叡に上るには雲母越を上げるが好い。さう大して骨は折れない。で、横川中堂あたりに一宿して、歸りは阪本の方に下りるが好い。叡山から見た琵琶湖はまた格別の價值がある。

その他は、紫野の織田信長父子の墓、船岡山の建勸神社、上加茂、下加茂なども、暇があつたら行つて見る方が好い。

で、先づさつとではあるが、京都の見物はこれですんだとする。すぐ行きたくなるのは、伏見の桃山陵だ。それには、奈良線で行つてもよし、京阪電車で行つても好い。伏見で下車して、すぐ明治天皇、昭憲皇太后の御陵を参拜する。今更ながらかしこさに涙こぼる、心持がする。

言ふのを忘れたが、京都の旅籠でも、俵屋、終屋、澤文、月の家、萬屋、津田屋などといふのが好い。澤文あたりは殊に上品で居心が好い。しかし、普通旅客の泊る家としては、三條小橋の萬屋と萬屋別館位が好いと思ふ。

で、桃山で参拜を終る。伏見にも見るところはある。観月橋のあたりも捨て難い趣がある。昔は皆な伏見に来て、そして例の淀川のくらはんか船で、大阪に下つて行つたのである。此處まで来ると、是非、宇治まで行つて見たくなる。それに、京都に一夜泊つたなら、その次の晩は、大阪に泊るよりも、もつと静かなところに泊りたいといふ氣になる。しかし宇治まで行くとそこから引返さずに、すぐに奈良の方まで行つて見たくなる。奈良に行くと、今度は大和めぐりがしたくなるといふ風に、段々大阪に縁遠くなつて行くから、宇治はあとまはしにして、京都からすぐに大阪の方へ向けて行くとする。

京都と大阪との間で下りて見るやうなところは、男山八幡と、櫻井驛と、勝尾寺と、先づその位のものである。汽車で素通りをして見てもわかるが、山崎の狹隘は、成ほど昔度々戦争があつたのも尤だと思はれるやうな地形である。山崎で下りると、男山八幡は南に一里卅町ほどある。所謂岩清水八幡宮で、歴史では非常に名高い社である。下か

ら上つて行く石階はかなりに長い。社殿も頗る壯麗を極めてゐる。ことに、鹿のトヒが金のトヒだといふので名高い。この附近に承久の三上皇を祀つた水無瀬宮といふ神社がある。これも、次手に詣で、行く方が好い。

櫻井の里は、山崎驛から西に二十町ほど隔つたところにある。汽車のレールに添つてゐるので、知つてゐるものは、車窓の中からそこに立つてゐる石碑を指點して行くことが出来る。それは元は英國公使ハウクスの建てたものだったが、近年、乃木大將が、楠公訣別之處といふ六字を題した。別に見るものもないやうなところだが、それでもちよつと下りて見たくなる。此處で、櫻井焼といふ陶器が出来るが、今は何うしたか。

これは見物の方ではないが、地理學の方面で面白いことがある。それは、淀川と、淀川の残水湖である巨椋池と、大阪の治水とのことである。淀川は琵琶湖から出で山城盆地に来て、諸川を合せて、愈々大きくなつて、伏見から淀の方へと行く。そこで、水が多いために逆流して湖を成したのが巨椋池である。だから、水が出ると、この巨椋池が氾濫すると共に大阪が洪水になる。で、先年大阪の治水をする時にも、勢多の落口と、此處と、新宇治川の閘門とに就いて、餘程深い注意を拂つたといふことである。

高槻はちよつとした町だ。勝尾寺には茨木から行つて二里、あまり人は行かないが、大きい寺で好いところである。それから、淀川の沿岸では、牧方あたりがちよつと面白い氣分のするところだ。この近所には、昔は歴代天皇の遊獵させた狩野の跡があちこちに残つてゐる。鳥飼野はその一つである。昔は雁鴨など澤山にゐたことと思はれる。それに神武天皇時分には、この淀川が枚方附近で海に注いでゐたらしく思はれる。天皇東征の際、白肩に上陸して、大和に入らうとしたと書いてあるのは、この枚方のことであるといふ話だ。菊の名園がある。

茨木附近には、片桐且元などの跡が二三残つてゐる。松永、三好の徒のゐた址などもある。この右に見える山の中では、寒天の製造が盛である。

で、大阪が段々近くなる。布を地上にならべて、長い柄杓で水を汲んでそれにかけてゐるのが到る處で目につく。やがて吹田驛が来る。新淀川の鐵橋が来る。汽車は大阪に入つて行く。

大阪の旅館では、中の島で自由亭、花屋、銀水、北濱で加賀屋、銀波樓、丸三、出雲屋、今橋で泉米、紫雲樓、大川町で明石屋、水明館、池喜、いつ六、江戸堀で金森、そ

の他、まだ澤山に好い旅館がある。

大阪の梅田の停車場を下りて、南に少し行くと、中島公園がある。そこに豊國神社、白玉稻荷、公會堂、圖書館などがある。木村長門守の記念碑が大阪城に對してゐる形なども面白い。公園の西端には北に大江橋があり、南に淀屋橋がある。大江橋を渡つて、北に行くと、北の新天地に境して、例の曾根崎の蜷川がある。近松の『天の網島』で小春治兵衛の涙の跡はそこであるといふことである。蜷橋と言ふ電車の停留場がある。

これから東區に入つて、東に向つて行くと、やがて天神橋の橋の袂に達する。この近所に例の淀川のくらはんか船の寄港地があつて、今でも其處に汽船や船などが集つてゐる。八軒屋と言はれてゐる。

この川の向側は、天満で、天満宮は天満大工町にある。北區ではちよつと賑やかなところで、境内には寄席や見世物が多い。一月二十五日の初天神は賑かである。夏祭は七月二十五日、その日は銚流しといふ神事があつて、船に炬火を焚いて、流れを下つて、松島の御旅所に着くのが例である。その時には非常に群集が雜沓する。

この近所には西寺町西福寺に西山宗因の墓、寺町成正寺に大鹽平八郎の墓がある。俗

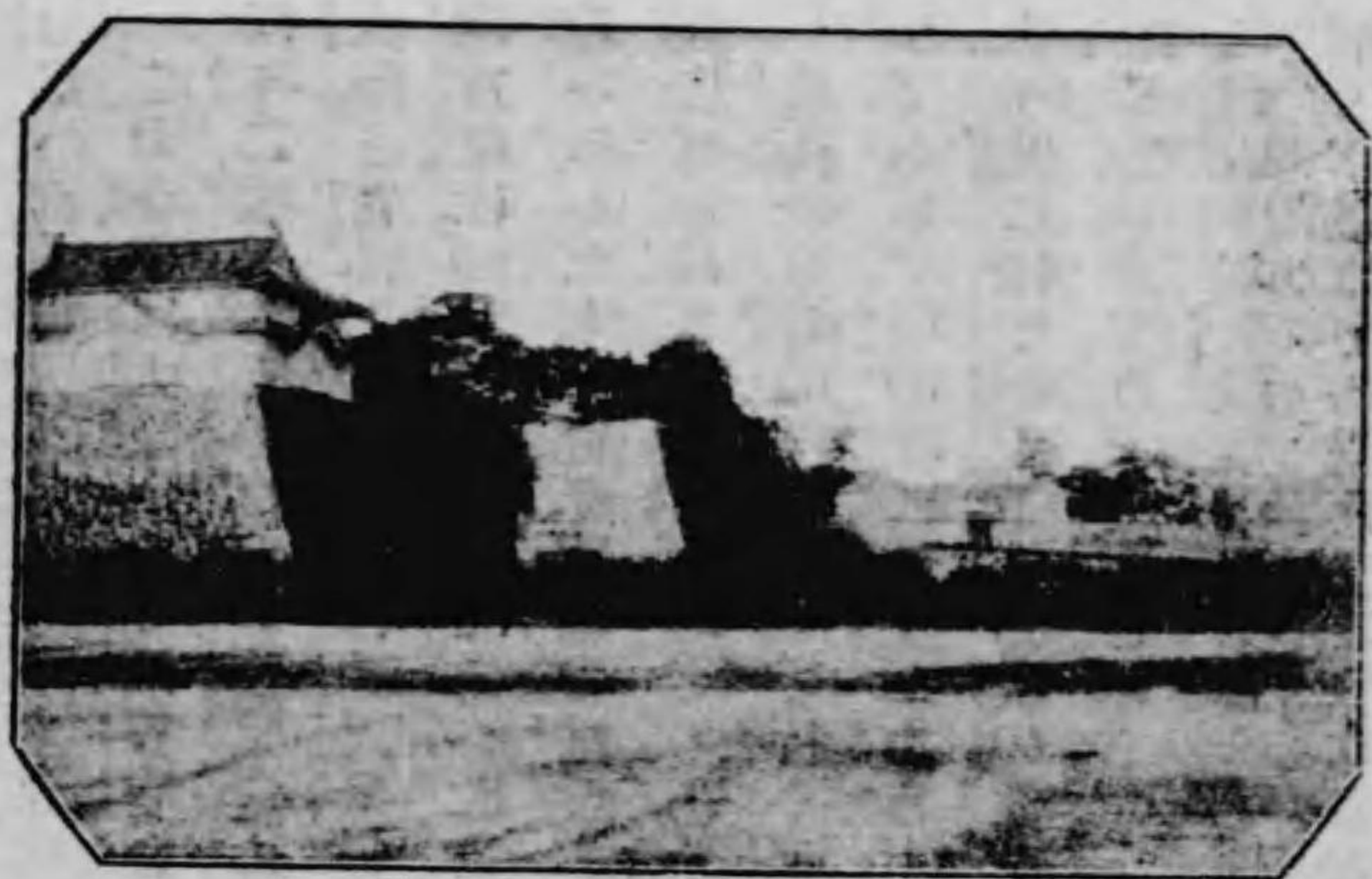
にお初天神といふ露天神や、眼病に靈驗ある眼神八幡や、寒山寺や、さういふものが澤山にある。

梅田の停車場の近所にある凌雲閣、人は皆な九階九階と呼んでゐるが、この東南、北野東町に、網敷天神がある。菅公左遷の時、梅の盛りなのを見て、船網に敷いて賞せられた古蹟だと言はれてゐる。

天神社から、西南、稻荷山に近く、萩の名所の圓頂寺、それからその近所に、淀君の墓のある太融寺がある。境内は、夏は藤の花などが咲いて、ちよつと人出がする。割烹店などもある。

これから福島の方へ行くと、逆櫓の松だの、王仁の墓だの、杜若の名所だの、歡喜大だの、いろいろ見るところがあるけれども、まださういふところはあとで詳しく見るなり、この次に来た時に見るなりして天神橋から東に大阪城の方へ行つて見ることゝ急がなければならぬ。

大阪の城のあるところは、今の大阪が海の中であつた時分から存在してゐる丘陵の一角で、大昔は、波がこの丘の根元まで押しよせてゐたといふことである。この丘からす



大阪城

つと南に高津の丘陵がついてゐるが、そこに、仁徳天皇の例の民の煙の高津宮があつたのであるといふことである。大阪の城は、本願寺がゐる時分から、や、その形を成してゐるが、完成したのは、無論、豊臣秀吉である。今、残つてゐるのは、本丸の一部分で、例の冬の陣のこのの俣ばれる址を留めてゐる。第四師團司令部が其處にある。此處から東に平野川に出る、大阪陣の古戦場しぎ野の跡を通つて玉造に来る。そこに例の眞田山の丘陵が横つてゐる。そして高津宮のあつた丘陵と相連つてゐる。こゝは例の眞田幸村が出城を築いて、徳川勢を悩ましたところで、そゝろに昔のことが思ひ出される。この近所に契沖の圓珠庵、高津宮の跡、産湯の清水、産湯の稻荷などがある。

桃山は、桃の名所になつてゐる。豊公の榮華のさまなど思ひ出される。ここから四天王寺はもうちきである。大きな五重塔が市街の瓦葺の中に見える。この寺では大阪市中で最も古い。堂宇は屢々兵燹に逢つて焼けて、今は徳川の寛元四年に建てたものだが、聖徳太子創建以來、實に千五百有餘年を閱してゐる巨刹である。大阪と言ふところは、仁徳天皇の高津宮以來、皇居は別なところに移されて行つても、離宮位はつねに置かれてあつたところで、昔は今のやうな雑沓地ではなく、眼下に難波瀨を見わたした風光明媚の地であつたのである。従つて聖武天皇なども一時大和から此處に都を移されたことなどもある。四天王寺は、實にその時分創建されたのである。市街から寺の中に入つて行く。大鳥居がある。東門を入ると、五重塔がぬつとして立つてゐる。塔の北に金堂がある。其北には聖徳太子の經を講じたといふ大満堂がある。太子堂には聖徳太子十六歳の像を安置してある。中庭には、大きな池に金魚や鱒が泳いでゐたりする。幽邃といふやうな趣は、市中だけに、味ふことは出来ないけれど、兎に角大きな立派な寺であることは争はれない。先年、聖徳太子千三百年忌に獻納した巨鐘も、遊覽者の見落してはならないものである。それからこの寺内に、十月頃、市が

立つことがある。その時は頗る雑沓を極めるといふ。この近所で見るところは、聖徳太子作の觀音像や、兆殿寺の十六羅漢を藏した願林寺、淺野長矩の筆に成つた萬松山の扁額をか、けた吉祥寺、淨瑠璃の祖竹木義太夫の墓のある超願寺などである。それから、天王寺にあるルナバクなども見物すべきもの、一つである。大阪の郊外を一周してゐる汽車の天王寺の停車場は、このちき近所にある。だから、京都の方から行つた旅客は、梅田で下りるが順路だが、奈良の方から来た人は、天王寺驛で下車して、先づ天王寺を見物して、それから高津、生國魂、千日前といふ風に逆に出で行く方が便利で好い。で、天王寺を出で、東に行つて、茶臼山がある。徳川家康が本陣を置いたところである。その昔の濠の畔に、邦福寺と言つて、俗にいふ雲水の精進料理を食はせるところがある。ここから七代目市川團十郎の墓のある一心寺を訪ね、安居の天満宮に詣で、新清水寺の舞臺から、勝鬨坂の遊行寺に、一遍上人の跡やら芭蕉の碑やらをたづねて、北して夕日が丘に行く。

此處は家隆卿の歌で名高いところで、今でも古墳と僑居の跡とが残つてゐる。近所に陸奥宗光の墓がある。

こ、から北向八幡宮、これは大阪城の守護神として立てられしものであるといふことである。そこに詣で、蓮池を見て、やがて生國魂神社に着く。こ、に来るのに、夕日の岡や、茶臼山を廻らなければ、天王寺から高津を経てやつて来る路がある。

生國魂の境内は、春夏遊客の踵至するところである。それに、舞臺があつて、大阪の市街を一目に見わたすやうになつてゐる。櫻が多く、蓮花が多い。

附近に、元梅屋敷、梅屋敷がある。そしてそれから西は高津になつてゐる。やがて高津神社のあるところに来る。大阪では名高い神社で、境内に梅の橋、頌徳碑、望烟亭、などがある。丘陵の上に位置してゐるので、その舞臺からは、大阪の百萬薨を始め、六甲山の翠微、茅渚の海の水光を一眸のもとに集めることが出来る。此處に来ると、いくらか大昔の難波の津の明媚の風光が微かに味はれるやうな心持がする。宮の入口には、二三の旗亭がある。

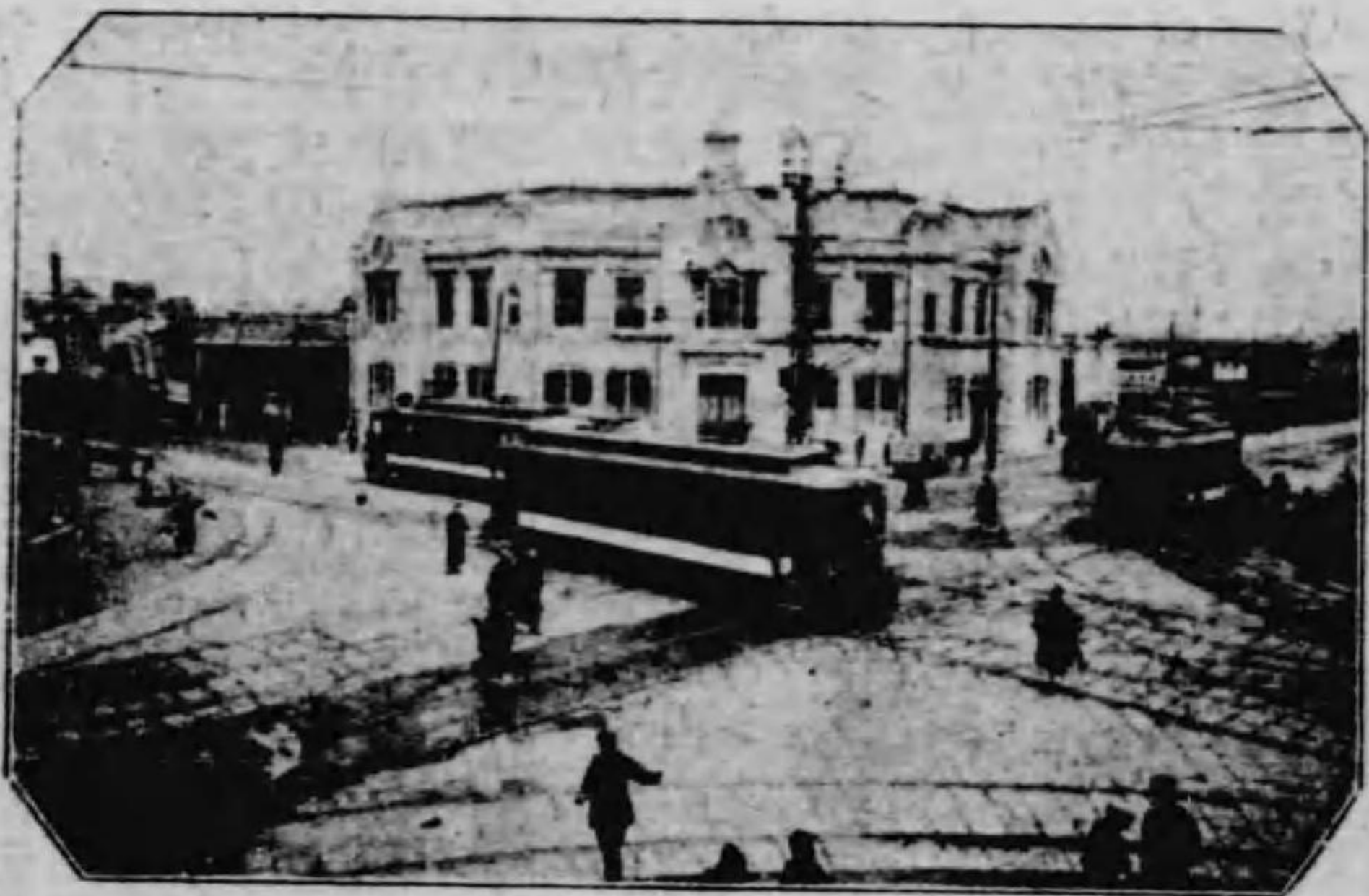
附近に、翫菊庵の菊、吉助の牡丹などがある。

こ、から岩おこし屋、津の清の店先にある徳川幕府の鑄錢場の用水であつたといふ井戸を見て、直ちに、道頓堀、千日前の方へと行く。

道頓堀、千日前は、大阪を見物する旅客の先づ第一に見物しやうとするところである。大阪式の繁華は一に此處に集つてゐると言つても好いほどそれほど特色に富んでゐる。

千日前に行くとき先づ芝居の幟の賑かに風に靡いてゐるのが眼に着く。浪花座、中座、角座、朝日座、辨天座、この五座を圍んで、昔いろは茶屋の名のあつた芝居茶店や貸席がずらりと軒を並べてゐる。東京の芝居などから比べると、ぐつと多く昔の面影を残してゐて、何となく別世界に入つたやうな心持がする。旅館、飲食店なども非常に多い。この芝居の裏に千日寺といふ寺があつて、昔は刑場で、晝も猶さびしいといふ處であつたといふ。道頓堀には、戎橋、日本橋などといふ橋がかつてゐる。汚ない堀割で、水

のない夏の日などは、橋の上に立つてゐても餘り好い心持がしない。この附近は所謂難波新地の狭斜街で、宗右衛門町、九郎右衛門町などといふ名高いところである。つまり南地なるもので、大阪藝者の粹は此處に集つてゐると言つて好い。例の有名人富田屋、伊丹幸などといふ家は、此處にあるのである。餘裕があつたら、此處で一夜遊ぶのも面



橋 ツ 四

白い。

この近所で見物すべきものは、道頓堀を掘つた安井道頓を祀つた安井神社、それから戒橋を渡つて行つた三津寺町の三津寺、北佐野屋坂を渡つて行つた三津八幡などである。例の大阪の繁華の中心、心齋橋筋と言ふのは、佐野橋筋から東に二つ目にある橋で、通りは狭いが、中々賑かな好いところである。店などにも大きな店があるし、シャウインドゥウなどにも立派なのがある。この通りを真直に北に行くと、中島公園の東端の日本銀行や米穀取引所などのあるところへと出で行かれる。南に行くと、二三町で、關西線の湊町停車場へと達する。

それから十日或と言つて、毎年一月十日に縁起

物として、小判や立烏帽子や東髪斗などを小篋につけて賣る今宮の或なるものがその近所にある。是非行つて見る方が好い。それから、道頓堀の新戎橋から、西横堀に添つて北に五六町行くと、長堀と西横堀と交叉するところに四つ橋と言ふのがある。炭屋橋と吉野屋橋と上繫橋と下繫橋とがかう四つ橋が相對してゐる。ちよつと奇觀である。「涼しさに四つ橋を四つ渡りけり」といふ有名な來山の句がある。

こゝから靱の方へ出て行く。そこにある陶器神社の七月十四日の祭禮は、大阪での見物である。その日は、西横堀の陶器問屋が陶器で作り物を拵へて見せるからで、人出は非常だといふことだ。

この靱と心齋橋筋の間に、まだ見ものが二三残つてゐる。それは、平野町の御靈神社、南備後町の本願寺の津村別院(北の御堂)御堂筋の大谷派本願寺の難波御堂(南の御堂)その後にある座摩神社、博労町の難波神社、南安堂寺町の油燃地藏などである。中でも御靈社の中には、例の有名な文樂座がある。旅客は是非一度其處に行つて、大阪特有の淨瑠璃を聞かなければならない。

靱から京町堀の方へ行くと、その西端に有名な雜喉市場がある。東京での日本橋河岸

である。かなり古い魚市場で、大阪市の沿革の一部を背負つて立つてゐると言はれてゐる。

江の子島の西には、舊居留地がある。そして、その附近に、川口の波止場がある。以前大阪の築港の出来ない中は、海から来る水運は、すべて此處に集つたもので、旅館や、運漕店が軒を並べて、一種特色ある繁華をつくつたものだが、今ではもう以前のやうな趣はなくなつた。こゝから南、九條町に行くと、毎月三六の日、吳服古着の市の開ける茨住吉神社がある。その東には、木津、尻無の二川に挟まれた松島の遊廓がある。

その東に行くと、土佐稻荷、そこには橋が多い。阿彌陀ヶ池は、本田義光が善光寺の阿彌陀像を拾ひ上げたところとしてきこえてゐる。

此處まで来た次手に、築港の方も行つて見る方が好い。電車で行けばすぐである。十年前には、田圃や沮渚地であつたところが、今はすっかり人家になつて、天保山のあるあたりまで、空地といふものを見ないほどである。安治川を見て、河村瑞賢の事蹟を考へるのも好ければ、天保山に行つて、舊砲臺の跡を見るのも興味がある。

築港は中々堂々としたものだ。突堤が兩方から出て港門を形ちつてゐるさまは見事

である。長い棧橋には、いつも大きな汽船が横づけにされてゐる。海は碧く、山は淡く、いかにも茅葺の海らしい感じがする。

築港附近は、ちよつと賑かである。夏の夜など此處まで涼を納れに来る人はかなりにある。大阪は暑いところだから、此處等あたりまでやつて来なければ、涼しい風の一霎をも得ることが出来ない。

先づ大阪は、これでザツと一通り案内した。詳しく探れば、もつと面白いところが澤山に澤山にあるけれども、普通の旅客には、先づこれで澤山である。この外、大阪城の東に、泉布觀だの、櫻の宮だのがあるが、これは八軒屋あたりに行つた次手に、向ふに渡つて見るが好い。

福島方面にも、見やうと思へば、見物すべきところが二三ある。野田の藤だのがその一つである。

東京なら、この他に、郊外で行つて見なければならぬやうなところが澤山にあるのだけれど、大阪には何にもない。大阪は殆ど郊外と言ふ郊外を持つてゐない。大阪人の郊外は、眞の意味の郊外でなくて、笑面とか、寶塚とか、濱寺とか、櫻宮線の沿線の勝地

とか、さういふところが、大阪人の行つて遊ぶところになつてゐる。
それをちよつと此處に書いて見る。
一番先に、秋ならば、箕面に行く。梅田から電車があるからわけがない。賃金は往復二十八錢である。時間は往復で二時間か三時間あれば、十分である。箕面は今公園になつてゐる。

箕面の山水は、近畿では、月の瀬、宇治川などに匹敵すべき山水である。山はさう深くはないけれども、寺から瀧まで行く間が中々好い。溪流と紅葉と相映するさまは明るい一幅の繪のやうである。寺は瀧安寺と言つて、役小角が刻んだ辨天を安置してゐる。日本で江島、嚴島、竹生島を合せて四辨天の稱がある。瀧は谷の奥にかゝつてゐて、高十一丈、幅三間ある。日光の瀧などに比較すると、瀧としては、さう大して大きな瀧ではないけれど、近畿では、先づ先づめづらしい方である。

で、それを見て、電車で池田まで行く。池田は大阪への薪炭の供給地として昔からきこえたところである。山の翠微に近く、嵐氣が多くちよつと感じの好い町だ。そこから阪鶴線に乗換へて、伊丹へ出る。造酒で昔からきこえたところである。町の黒染寺には



京都と大阪

荒木村重の墓と俳人鬼貫の墓とがある。

こゝまで来たなら、次手に、寶塚に行つて一夜泊つて見るのも好い。梅田からここまで電車賃往復三十八錢である。温泉は武庫川の對岸にあつて、大規模な浴場や、家族風呂などで評判である。要するに、其處は大阪、神戸あたりから、紳士が女などをつれて遊びに行くところである。靜かな温泉場ではない。

旅館には、分銅屋、寶樂屋、炭酸ホテル、泉山丸山などがある。

有馬温泉に行くには、大阪舞鶴間の汽車で、三田まで行つて、そこから、三田有馬間の軌道に乗るのである。三田まで四十四錢、三田から有馬まで十三錢である。一時間半か、れば行ける。有馬

は山の中の温泉場だけれども、昔からきこえてゐる。豊公なども淀君をつれて入浴したやうなところだから、暇があつたら、一度は行つて見る方が好い。温泉の設備はかなりによく整つてゐるが、湧出する温泉の量が少いので、大湯ばかりで、内湯に乏しい。旅客は大抵宿から手拭を下けて、案内されて、大湯へと入りに行くのである。

こゝから歸りは、同じ道を歸るのも愚であるから、足弱でもつれてゐなければ、六甲をこえて、神戸の手前の住吉驛まで出て来る方が好い。此方から行けば、登りが長く下りが短くつて、困難だが、向ふから来ればその反対で頗る楽だ。散歩に少し毛の生えた位の勞力ですむ。それに、六甲から下りて来る路の眺望が好い。紀州の山と由良水道あたりの海が手に取るやうに見える。

この外、此方面では、西の宮の戎、住吉神社、岡本の梅林、東洋第一温泉といふラジウムの温泉など、電車を利用すればすぐに行ける。

それから大阪の北部東部の方では、例の櫻宮線の軌道の沿線に、行つて見るべきところかなりにある。鳳臺山稻荷、野崎の觀音などいづれも流行佛で、緣日には、臨時汽車が一杯になるほどの人が出がする。そしてつと東に行けば、楠正行の戦死した四

條暖にも行くことが出来る。そこには四條暖神社がある。その他、この沿線には星田の窟だの、桃林だのと、大阪人のその日かへりの散策に適したところが二三ある。

南の方面では、住吉から堺、堺の大濱、落寺あたりまで、皆な大阪人の散策の區域である。住吉の手前に、仇討で名高い天下茶屋がある。其處には、豊公の豪奢の跡なども残つてゐる。阿部野は、北畠顯家の足利と戦つて敗死したところで、今は其處に別格官幣社阿部野神社が残つてゐる。

住吉には、公園の中に、住吉神社がある。海岸の高燈籠と社前の反橋とは、誰も知らぬ人がない。それに、境内も広く、石燈籠も多く、料理屋などもある。社殿も立派である。

堺は新大和川の鐵橋をわたるとすぐだ。昔榮えたところだけあつて、町は一種面白い感じを持つてゐる。段通と刃物とは、今でも名物である。そこで見るべきものは、例の妙國寺に歸りたやと言つたといふ蘇鐵である。成ほど見事である。そこには、堺事件に切腹して外人を驚かした勇士の石碑が立つてゐる。大濱には、大阪人の好みさうな海水浴場がある。一泊も亦妙である。茅海樓、丸三、一力、川芳などといふのがある。此處で

暇があつたら、停車場から東に二十四町の仁徳天皇の百舌原御陵を拜観するが好い。多い山陵の中でも、殊に、その規模の大きなのできこえたもので、後園前方のスタイルを最も完全にあらはしたものといはれてゐる。それに隣つて、履中天皇と反正天皇の二つの御陵がある。

瀧寺は、松原が好い。それに、気分がさつぱりしてゐる。海水浴場としては、堺の大濱よりは、ぐつとすぐれてゐる。そこからは淡路島も見え、紀州の山も見え、六甲も見え、四國も見え、大阪人につつての須磨明石と言つても差支ない。松原の中に旅館が五六ある。一力樓、海濱院などといふのがあつた。この附近には、日本有名な古社の願神社がある。これも行つて見る方が好い。

こゝまで来ると、これから先がもつと見たくなるが——それに、和歌山に行く電車が便なので、一層さういふ氣になるが、それは和歌の浦から高野山の方へ行く旅程に譲つて、此處から大阪に引歸すことにする。

この他、池田の奥に、能勢の妙見といふ流行佛がある。これは山路を七八里も行かなければならないところだから、普通の旅客には、ちよつと入つて行きにくく、はあるが、

大阪からは、よく其處へ出かけて行く。縁日には、その邊僻の山の中が人で埋まるといふほどであるといふことである。

十一 大和めぐり

- ▲京都 から奈良へは奈良線の汽車、大阪からは、生駒山脈を横断した大阪電氣軌道は殊に便だ。
- ▲京都 奈良間は哩數二十六哩、三等賃金四十錢、關西線で来ると、名古屋から八三哩三、同賃金一圓二十六錢である。
- ▲木津 片町線は木津から大阪に行く線て、二八哩一、三等賃金四十七錢。
- ▲奈良 高田、王寺間といふ汽車は、大和めぐりに殊に必要で、長谷でも、三輪でも、多武峯でも、畝傍でも、皆これで行ける、大和國をぐる／＼廻つてゐる

やうな汽車。奈良から王寺まで三等賃金四十二銭。
 ▲法隆寺は關西線本線の一驛で、こゝから此頃丹波市の天理教會のあるところ
 に軌道が出來た。法隆寺から、三輪の方へ行くに便利だ。
 ▲高野から和歌山の方へ行かうとするには、王寺を起點として、高田からわ
 けて行く和歌山線に乗る。この汽車は、壺阪に行くに好い。
 ▲吉野山へは、この線の吉野口から新に軌道が出來て、吉野の下の市の柳の渡あ
 たりとその終點を置いた。今ではわけなく吉野へも行ける。
 ▲長谷の觀音には、奈良王寺線の櫻井から、軌道がわかれて行つてゐる。
 ▲奈良から宇治までは、二十六銭、桃山まで三十一銭。宇治から京都まで十九
 銭。桃山からは十一銭。

前にも言つた通り、大和めぐりは、京都を見て、宇治に行つて、そして、それからす
 ぐ行く方が、旅客には便利であるかも知れない。また、その方が興味が饒いかも知れな
 い。しかし、それも旅客の都合次第である。東京から行く團體旅行などでは、大抵、伊
 勢からすぐ關西線で奈良に入つて、好加減に大和の名所を見て、それから大阪に入つて、



風 凰 堂

京都へ來るといふ風である。その方が日数が
 はぶける。しかし、さういふ忙しい旅ばかり
 が能ではないから、此處には、靜かに大和め
 ぐりをすることにしやう。

大阪から行くには、湊町乃至天王寺驛から
 出發する。又生駒の電車による。京都から行
 くには、七條から奈良線で立つ。關西線で來
 れば、木津で奈良線に乗り替へるのである。
 先づ前の夜を宇治の靜かな旅館に寝たとす
 る。宇治ならば、旅館は菊屋か花屋敷である。
 京都から來るつれ込宿であるだけそれだけ設
 備は行届いてゐるが、何うかするとお安くな
 いところを見せつけられる。宇治の町は靜か
 で綺麗でいかにも茶どころらしい感じがする。

平等院

縣神社

宇治川の上

黄檗山

笠置山脈

宇治橋の橋の袂を右に行くと、一町か二町で、例の平等院に達する。鳳凰堂の建築は建築上頗る聞えたもので、年代も千年以上を経過してゐる。今は、特別保護建造物になつてゐる。是非一見すべきである。此處は元關白頼長の別墅であつたのを、以仁王のことがあつた後に寺にされたのである。平等院の前に源頼政が自殺した扇の芝といふ處がある。土手の上からかけて、櫻が一面で、春は頗る見事だ。山と川の景色も凡でない。この上流に供養塔見たいなものが立つてゐる。佐々木梶原の先陣を争つた小島ヶ岬といふところは、橋の下流二三町のところにある。橋の社は宇治橋の西にある。其外、此處には縣神社といふ祭禮の賑やかな祠がある。や、淫祠ではあるが、花柳界の人は、遠くから此處にお詣りに来るのを例としてゐる。

宇治川の上流、琵琶湖の勢多の南郷の閘門まで行く間は、里程にして七里位あるが、此間には人に知られない好いところがあるといふことである。

宇治川の向ふ岸には、黄檗宗の本山があつて、そこはかなりの名高い寺になつてゐる。其處から出た名僧などもかなり多い。わざ／＼出かけて行つて見る價値がある。

宇治から木津まで行く間は、後に笠置山脈を帯び、前に生駒山脈を望んだ晴れ／＼と水驛で下りる。

生駒山脈

木津

昔の泉川

恭仁宮址

奈良山

奈良平野

した好いところだ。この間に、長池、玉水、棚倉、上狛など、いふ停車場がある。以仁王の自刃せられた舊蹟や、高倉宮に行くには棚倉驛で下りる。井手の玉川に行くには玉水驛で下りる。

やがて木津に着く。此處は關西線と奈良線と櫻宮線とが交錯してゐる大驛である。それに此の近所は、聖武天皇の時に出来た恭仁宮の址に近いので、歌によまれた名所が澤山にある。泉川は今の木津川である。鹿背山は今もある。現に、和泉式部の墓などもそこに残つてゐる。暇があつたら、恭仁宮址に行つて見るのも好い。木津から三四里の處にその址はある。そこを見て、笠置の方へも行つて見ても好い。

木津を出ると、小さな丘陵があたりに散在してゐる。昔の所謂奈良山である。そこを出ると、ひろ／＼とした大和平野がその前に展けて来る。春日山が見える。三笠山が見える。山に凭つた白堊の多い町が見える。五重塔が見える。大佛を圍んだ大きな木造家屋も指さされる。奈良に來たといふ氣分が湧くやうに旅客の胸を衝いて来る。

奈良の停車場から眞直に春日山に向つて東西に通じてゐる町筋は、昔の平城宮時代の三條道路のそのまゝに残つてゐるものである。大抵の旅客は、折角、奈良までやつて來

ても、昔のことは知らずに、唯、春日と大佛とをめぐらしがつて見て行くばかりであるけれども、此處に來た以上、少くとも昔の平城宮の址位はよく飲み込んで置きたいと私は思ふ。

昔の奈良の都は、今の町とは位置がすつかり東に偏つてゐたので、丁度今日旅客が春日に向つて歩いて行く左の裏の方の都跡村といふあたりに、整然としてその市街はつくられてあつたのである。今の町のあるところは、昔の市街から見て、全く郊外であつたのである。春日や大佛や南園堂や、さういふものは皆な昔の奈良の都の東の郊外になつてゐるのである。

で、先づ旅客は其の昔の三條通を眞直に歩いて行く。や、爪先上りの路である。あられ酒だの墨だのを賣つてゐる家がある。少し行つて左に山陵がある。開元天皇の御陵である。路の角に平城宮の址や昔の寺などに行く大きな案内の木標が立つてゐるものなどはいかにも奈良の氣分である。

やがて興福寺の五重塔が見える。右に猿澤の池がある。采女が身を投じた跡の楊柳が池の畔になびいてゐる。五重塔の傍には、南園堂がある。路の右には鹿を殺して箱詰に

された見の跡を吊つた堂などがある。菊水旅館が其處にある。興福寺に金堂、東金堂がある。



春日神社

北に北園堂がある。春日の一の華表から奥に入つて行くところは、いかにも氣持が好い。青草の上に鹿が寝ころんでゐる形など、何とも言はれない。外國人は殊にこれをめづらしがさうである。杉森の中には、馬酔木などが澤山にある。春日野、雪消の澤、春日の松を引き、若菜を摘みにとやつて來たところである。春日野の飛火の野守いて、見よ今いく日ありて若菜つみ

てん』いかにもその時分のさまが眼に浮ぶやうな気がする。

春日の一の華表から入つて行くと、五六町で春日神社に達する。全く杉の古樹に蔽はれた宏壯端麗なる社である。燈籠の数が三千もあると言ふが、いかにも古風で好い。藤原時代がそのまゝ、其處に残つてゐるはしないかと思はれる位である。若宮の方の祠殿は藤原時代の建築そのまゝで、今は特別保護建造物になつてゐる。そこに若い巫女がゐて、賽客の希望に従つて、鈴を振つて、白衣をひるがへして舞ふ。

そこにお詣りをして、路を西に取つて、土産物などを澤山並べて賣つてゐる店の前を通つてやがて若草山の麓に来る。三笠山は丁度重り合つて聳えてゐる。この二つの山の間、に奥に入つて行く路があつて、それをたどると鶯の瀧といふのがある。晩春には山藤が非常に多いといふことである。

若草山の麓は、昔むさし野と言つたところで、伊勢物語にある『むさし野は今日はやきぞ若草の妻もこもれりわれもこもれり』といふのはそこである。二條后と業平の昔などが思ひ起される。むさし野といふ好い旅館が此處にあつたが、今はつぶれて了つたといふことである。

若草山は登り五六町ある。女子供にも登らうと思へば上れる。そこから見た奈良は見事なものである。今の町を隔て、昔の皇居のあつたあたりや、西山の薬師寺の塔などが一目に集つて来る。生駒も見えれば、金剛山も見える。大和平野の中央に並んで立つた大和三山も見える。

山の頂きから二三町奥に行くと、由縁は知らないが、鶯塚といふのがある。

で、若草山の麓から猶ほ真直に西に行くと、又、深いこんもりとした杉森があつて、その中に丹碧の鮮やかな手向山神社がある。例の『紅葉のにしき神のまに／＼』の手向山である。この祠殿もかなりに端麗である。そこに賽して、少し行くと、三月堂、四月堂がある。小さな堂であるけれども、奈良朝時代から今日までそのまゝ、に千百餘年を経過したもので、今、國寶になつてゐる。旅客は見落してならない。

二月堂は堂は大きい、建物は新しい。しかしそこにある本尊は矢張有名なもので、國寶である。そこには、舞臺がある。そこからは生駒、金剛も見え、畝傍、香久山も見える。こゝから下りて行く階段は、三月の祭禮の時に、大きな松火を持つて上るといふので、その天井裏がすっかり黒く焼け焦けてゐるのを見る。それを下りると、下に

休茶屋が二三軒軒を並べて、客を呼んでゐる。

そこを向ふに行くと、大きな鐘がある。金を出して旅客が好奇に撞木を握つてゐるのなどをよく見かける。一つ撞いて鳴らして見るのも面白い。ここから真直に下ると、東大寺の周囲を取巻いた塀の右の横側に出るやうになつてゐる。

東大寺に行く正面の道は、春日へ行く一の華表から左に行つてゐる大きな通りがそれである。その路の左の奥に、奈良博物館がある。そこには奈良の寺院の中から取換へ引換へ寶物を持つて來て陳列して置くから、是非入つて見る必要がある。美術、歴史、工藝の三部にわかれたれてゐる。

東大寺は依然として昔の壯觀を保つてゐる。山門も堂々としてゐれば、堂宇も宏壯である。そして例の大佛殿は、その金堂を成してゐるのである。山門にある仁王の像は、彫刻の妙を以て世にきこえてゐる。それを入ると、大佛殿の前に、陳亞卿の金の燈籠もある。これも見落してはならないもの、一つだ。さて、それから大佛殿に入つて行く。先第一に注目しなければならぬのは、大佛を圍んだ偉大なる木造建築である。木造建築としては、世界にもこれほど大きいものはないと言はれてゐる。

大佛は聖武天皇の勅願に由つて、天平勝寶三年に建立されたもので、身の丈五丈三尺三寸といふ大きなものである。すべてブロンズで仰いでも見上げられないほどの大きさを持つてゐる。最初のは、平重衡の亂の時に焼け落ちて了つて、今は鎌倉時代につくつたものであるが、それでも矢張奈良では第一に見るべきものになつてゐる。臺座の彫刻なども世にきこえたものである。先年、ある處が破損して、大修繕に取かつたが、今では、全く落成して、すつかり元のまゝになつてゐる。

ここを出て、左の塀について、少し行くと、帝室の勅封になつてゐる正倉院がある。ここには、孝謙天皇と光明皇后が聖武天皇七々の忌を修めんがために、大佛に獻納した御物が納めてあつて、それを見ると、その時代の生活状態がよくわかる。今でも夏の蟲干の時に開くだけで、衆庶の觀るのを禁じてゐる。維新前には、その監督も今のやうに嚴重でなく、夜は乞食などがその牆壁の下に集つて、焼火などをしたものだが、よくも今日まで残つたものである。

奈良に遊ぶ大抵の旅客は、先づこれだけで歸るのだが、私は是非西の京だけは行つて

轉害門

般若寺

海龍王寺

西大寺の塔の模倣

法華寺

見給へと御勸めがしたい。そこに行くには、足弱は車でなければ行けないが、健勝な人は却つて歩いて行く方が好い。こゝから西大寺、唐招提寺、薬師寺あたりまで里程一二里である。

正倉院から、奈良の町に出たところに、轉害門がある。これも古いのできこえた門である。これを北に行くと、般若寺がある。大塔宮の經櫃にかくれて賊手をのがれたところである。樓門にか、けた般若寺の三字の扁額は僧空海の筆として名高いものである。これから西の丘には、元明天皇や元正天皇や聖武天皇の陵がある。聖武天皇陵を西に六町ほど行くと興福院、不退寺などがある。この邊に車塚がある。左右陪塚の多いのできこえてゐる。

で、海龍王寺に着く。小さな寺だが、右に本堂、正面に西金堂がある。西金堂は天平時代の建築で、國寶になつてゐる。中に高さ一丈五尺の五重小塔を安置してある。これは西大寺の塔の模倣で、叡尊の作つたものだ。天智式の建築では、今、奈良に、これと薬師寺の三重塔しかないと言はれてゐる。是非見なければならぬ。これと相接して、法華寺がある。昔、東大寺が日本の總國分寺であつたのに對して、

大極殿址

平城宮址

此寺は總國分尼寺であつたのである。光明皇后の創建で、歷代皇女などがその主尼となつた由緒のある寺である。今でも、其處には若い尼さんなどがゐる。そこにある本尊十一面觀音は、當代の製作中優秀なものとしてきこえてゐる。境内が靜かで感じが好い。こゝから田舎籬落の間を二三町たどる。やがて野の中に大きな木柱の立つてゐるのを見る。それは昔の皇居の大極殿の址である。田をこえたり川を渡つたりして其處に行つて見る。礎の跡や、龍尾道のさまなどがちやんと残つてゐる。千二百年経つたまゝになつてゐる。

奈良の平城宮は、此處を中心にして、東西八町、南北十町にわたつてゐるのである。そしてこゝから出た朱雀大路は、郡山近くに及んでその羅生門を設けてゐるのである。詳しくは、奈良沿革圖を見ればわかる。

その木柱には、平城宮大極殿舊址と記されてある。西北に、雜木林のしけたところがあるが、その地を今でも大宮と言つてゐる。内裏の地といふ。

これからもとの道に戻つて、猶西に行くと、朱雀大路基點の標木がある。平城天皇

孝謙天皇、成務天皇、神功皇后などの陵がある。佐紀村で路は三つにわかれる、正面は西大寺、右は秋篠寺、南は郡山に行く道である。秋篠寺は光仁桓武兩帝の本願で、今は講堂ばかりが残つてゐる。わかれ道から十一二町ある。佛像には優れたものが多い。真直に行くと、西大寺には五町位しかない。この寺は眞言律宗の本山で、七大寺の一に位した大きな寺である。火災に逢つて、建築物は、昔のまゝに残つてゐるものは殆どない。しかし寶物にはすぐれたものがある。空海筆の十二王畫像などがある。奥の院には興正菩薩の墓がある。

これから菅原を通つて、菅原天神社や喜光寺や、菅原屋敷址や、菅公誕生の池などを見て、池をめぐるした垂仁天皇の大きな陵の前を通つて、やがて松の多い唐招提寺へと着く。

唐招提寺は、西の京の中で最も見るに値ひしてゐる伽藍である。此處には、金堂、講堂、三面僧房、すべて千二百年以來、そのまゝである。そこに行くと、何とも言へない澄んだ好い心持になる。境内に多くある松、春先だと、それに梅などが交つて白く咲いてゐる。秋の末だと、落葉ががさこそと風に飛で舞つてゐる。



唐招提寺鼓樓

山門を入ると、大きな金堂が屹然として立つてゐる。棟の兩端には鴟尾がついてゐて、頗る宏壯である。奈良古建築中最も大きな堂宇であるといふことである。七間四面、屋蓋は四注形を成し、組物は完全な三手先で、前方に支輪が挺出している。内陣は三間四面、格天井の中には彩色が施してある。とくに支輪の間に極彩色の唐草を描いたさまなどは、今日の塗物工藝家をして後に瞠若たらしめる趣がある。そこには、正面に盧舍那佛乾漆座像、左は藥師如來、右に千手觀音が据ゑられてある。皆な天平時代の佛像である。その他、僧軍法刀作の梵天帝釋がある。これも頗る見事だ。金堂の後に講堂がある。これは平城宮の朝集殿を賜つて建てたものであるといふことである。これ

も依然として昔のまゝである。中にある佛像は丈六彌勒座像である。講堂の左に、禮堂と舍利殿がある。往昔の三面僧房の残つたもので、奈良でもこの他には、法隆寺に東西兩房があるばかりである。當時の寺觀の位置などを研究するにはなくてはならないものである。金堂の右にある鐘は、矢張天平年間のもので、右京唐招提寺の六字が、今日でもはつきりと指點することが出来る。兎に角この寺は、奈良に遊んだもの、是非來て見なければならぬところである。案内を乞はうと思へば、奥に行つて頼めば、僧が出て案内して呉れる。案内料は思召で好い。三人で一圓もやると、奥で、茶位は飲まして呉れて、鴟尾形の菓子も呉れる。

こゝを出て、少し行くと、裳階を持つた三重塔が見えるから、藥師寺の所在はすぐわかる。いくらも隔つてゐない。二三町位である。この寺も奈良では是非見なければならぬ寺である。

案内を乞はうと思へば、その少し手前を左に入つたところに寺坊があるから、其處に行つて頼むが好い。春雨の降る日に、雜僧か西の京藥師寺と書いた番傘をさして案内に立つのなどを見ると、何とも言はれない古雅な心持がする。

藥師寺は光明皇后の病氣平癒を祈るために、天武天皇の九年十一月に創建されたものである。元、高市郡にあつたのを、平城京遷都後、養老二年に今の地に移した。矢張、奈良七大寺の一つで、昔は榮えたものだが、火災に逢つて今で建築が残つてゐるものは、東塔(三重塔)ばかりだ。

しかし此處で最も見るべきものは金堂と講堂とにある二組の藥師三尊だ。アメリカ人フエノロサは、一見して世界無比の鑄造佛だと言つたが、實際、人を驚かしめるに足りるものがある。本尊の左右には、日光佛、月光佛がある。講堂にも矢張これと同じものがある。關野博士は、後者は白鳳鑄で、前者は和銅改作であらうと言つてゐる。實に壯麗美麗を極めた佛像で、フロンズの色が丸で漆か何ぞのやうに光澤を放つてゐる。雨の降つた日などは殊に好い。日本にもこれだけの佛像があるかと思ふと、何となく誇りたいやうな氣がする。

それから旅客の注意しなければならないことは、須彌壇の四面、瓦燈形の中に不思議な裸體人物の半肉彫があること、青龍朱雀白龍立式の四獸の彫られてあること、壇の上下兩縁に葡萄模様の彫られてあること、である。それから佛の衣裾の全く前面に垂

東院堂
聖觀音立像

東塔

塔尖の水烟

佛足堂

下してゐる形などにも注意しなければならぬ。

金堂の東にある東院堂にも、また頗る優秀な佛像を藏してゐる。それはブロンズの聖觀音の立像である。人によると、この像の方が三尊よりもすぐれてゐるなどといふものがある。これも是非見落してはならない。

東塔は奈良古建築中でも殊に名高いものである。三重だが、裳階があるがために、ちよつと見ると六重塔のやうな氣がする。法隆寺の靈肘木式から三手先式に進まうとする過渡時代の組物の手法をあらはしてゐるのできこえてゐる。塔の尖の水烟には、天人の空中に飛翔する状を現はしてゐる。實際、日本でも他に見ることの出来ない立派な古い塔である。九輪の銅柱には、舍人親王の書いた銘が刻されてあるといふことである。

塔と相對して、佛足堂がある。中に、有名な佛足石がある。後方にその所由を書いた石碑がある。

東に角、唐招提寺と師寺は、奈良に行つたもの、忘れても見なければならぬものである。これを見ないものは、奈良に行つても、奈良に行つたとは言はれない。で、歸りは、同じ路を歸るのもつまらないから、七大寺の一であつて、今は全く荒廢

した大安寺を大安寺村にたづね。それから田圃の中を近路をして來ると、十五六町で、奈良の停車場に來る。

藥師寺からすぐに法隆寺を訪ねやうと思ふ人は、郡山に行つて、そこから汽車に乗る。つひ手に、金魚商の多い郡山の町が見られる。藥師寺から郡山の停車場まで、一里車賃二十錢内外である。

で、先づ奈良は一通りは見たが、この他にまだ一つ新藥師寺がある。それは、ちよつと方角が違ふので、ついあと廻しにされるが、猪澤の池から右に入つて行つて、さう遠くはない。それに、そこに行く途中に、極樂院、元興寺、十輪院、璉城寺、福智院などといふ古寺がある。新藥師寺に行つたつひ手に見て來る方が好い。

新藥師寺は聖武天皇が眼病平癒祈願の爲めに、僧行基に命じて、大佛殿造營の残木を以て建立せしめられたものである。で、今でも眼病の爺さん婆さんなどがそこに願をかけに行く。寺は丁度兵營と相對してゐるやうな位置にある。本堂は矢張昔のまゝで、特別保護建造物の一つだ。藥師如來の座像、ことに十二神將型像は、國寶としてその名は高く世にきこえてゐるのである。

新藥師寺

後方に聳えてゐる山は、高圓山で、もと春日離宮のあつたところで、萩、月の名所として、古人の吟詠が多い。
この他、郡山町の近所に、矢田地蔵尊、松樹寺などがある。松樹寺には舍人親王の手刻した千手千眼の觀世音がある。しかし、普通の遊覽者には餘り多く此處まで入つて行くものはない。
で、奈良を見終つて、初瀬から多武峯の方へ行くか、それとも法隆寺の方へ行くか、何方か都合の好い方を旅客は選ぶのだが、普通には、奈良からすぐ湊町線で、法隆寺に向ふ方が多いやうである。
奈良から法隆寺はすぐである。汽車で行けば、二十分とか、ならない。この途中右に岡本の法起寺の五重塔が見える。その後長く連亘してゐるのは、生駒山脈で、その鞍部を越して大阪の方へ出て行く暗峠の一路がある筈である。
で、法隆寺驛で汽車を下りる。田圃を隔て、右に見える人家は、法隆寺町で、注意深い旅客は、その町の向ふに、松樹の間から大きな伽藍や五重塔の隠見するのを認め得るであらう。車で行けば、南大門まで二十錢位である。

寺は法相宗の大本山で、奈良七大寺の一、聖德太子が用明天皇の勅を奉じて創建したもので、その時代から依然として、すべて元のまゝに残つてゐるのは、此寺ばかりである。それに、規模が頗る大く、寺域が二萬八千四百餘坪を領してゐる。日本での美術の淵藪、詳しく研究するには、一年も二年もかゝるといふ稀有の寺である。
そこにある特別保護建造物が二十一棟、國寶が百十九點に達してゐる。以てその偉大なのが知れる。

先づ正面から南大門に入る。そして中門に行く。共に特別保護建造物である。中門の樓上には、孝謙天皇が供養したと言はれてゐる百萬塔が藏せられてゐる。其處にある仁王は止利佛師の作である。この門を中心にして、昔のまゝの廻廊が、右から左に連り、中に金堂と五重塔とその後の講堂とを包んでゐるといふ形になつてゐる。門を入つて、すぐ前にあるのが金堂である。旅客は中門で拜觀券を買ふと、案内者は忠實に案内して呉れる。此處では旅客は案内料を惜んではならない。金堂は桁行九間二尺五寸、梁行七間四尺七寸、兩層を成して、下に一階の裳屋を加へてゐる。いかにも宏壯端麗である。千三百年前にかういふ寺が建築されたかと驚かる、ばかりである。

大きな扉を開けて入る。橋夫人の玉蟲の厨子が先づ眼に着く。ついで、堂の四壁を圍んだ四佛淨土の圖が人目を驚かす。東は寶生淨利、西は阿彌陀淨土、北の東壁は藥師利土、同じく西壁は釋迦國土で、あとは菩薩の立像だの、羅漢の住所だのが一面に描かれてある。成ほど大きな立派な、ローマの壁畫もかくやと思はる、ばかりである。そして天井裏には、蓮花が一杯に描かれてある。惜しいことには年代が遠いのと、寺内の空氣が薄暗いので、明かにこれを見ることが出来ないことである。この堂の本尊は釋迦金銅佛で、その他藥師四天王、阿彌陀三尊などの像がその中にある。皆すべて國寶である。橋夫人の玉蟲厨子は、木製で、高さ七尺五寸、臺座の四面に描かれた止利式の漆畫は、本邦最古の繪畫として名高いものである。何故、この厨子を玉蟲の厨子かと言ふのに、壁面以外の部分は、悉く玉蟲の羽を布いて、鍍、唐草透影の金具でそれを押へたためである。

金堂を出ると、西に五重塔がある。方五間、高さ二十五間、塔内には泥塑の佛像、人物、山水等の形を安置してある。大講堂は金堂、五重塔から比べると、六七十年、時代が新しい。本尊藥師及び日光月



法隆寺夢殿

光四天王の木像などがある。こゝを見て、寶藏に入つて、寶物を見る。めづらしいものばかりである。禮堂、それから夢殿の方へ行く。夢殿はちよつと面白い建築である。聖德太子が三昧定に入つたところで、天平十一年の再建である。回廊の殆ど中央に位してゐて、その形は八積形を成してゐる。本尊救世觀音は、立木像金色で、太子等身の像と稱せられてゐる。矢張國寶である。夢殿の後方に、御繪殿、舍利殿などがある。御繪殿には、太子一代のことが描かれてある。兎に角、法隆寺は詳しく見ると、中々大變だ。それに、詳しく見てゐるとは、手間ばかりか、つて仕方がないから、まア好加減にして、附近の中宮